

国際コミュニケーション学部

学修ガイドブック

2022

SCHOOL of INTERNATIONAL COMMUNICATION

専修大学

専修大学 21 世紀ビジョン
「社会知性 (Socio-Intelligence) の開発」

社会知性 (Socio-Intelligence)

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、
深い人間理解と倫理観をもち、地球的視野から独創的な発想により
主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力

専修大学が創り育てる “知”

専修大学は、1880年（明治13年）、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、アメリカのコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てたい。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあつて、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。時は21世紀に至り、この建学の精神「社会に対する報恩奉仕」を、現代的に捉え直し、「社会知性 (Socio-Intelligence) の開発」を21世紀ビジョンに据えました。このビジョンは、創立者たちが専門教育によってわが国の人的基盤を築こうとした熱き思いを現代社会において実現することでもあります。

国際コミュニケーション学部

学修ガイドブック

2022

令和4年度

専修大学

この学修ガイドブックには、2022年度に入学した皆さんのカリキュラムに関連する重要事項が記載されています。

卒業まで使用する冊子になりますので、紛失等に注意し、ガイダンス等の際には必ず持参するようにしてください。

学部長からのメッセージ

GOING GLOBAL

国際コミュニケーション学部長 齋藤 達哉



■伝統ある専修大学へようこそ！

国際コミュニケーション学部の新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

専修大学は、近代日本が国際社会の仲間入りをするために必要とされていた経済学、法律学を学べる高等教育機関「専修学校」を起源としています。明治維新後に、アメリカ合衆国のコロンビア大学、エール大学、ハーバード大学、ラトガース大学で学んだ相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格が中心となり、世界に通用する経済学、法律学を日本語で分かりやすく教授する本学を創立したのは、1880年のことでした。以来140年間にわたって、専修大学は社会に貢献できる人材の育成を行ってきています。新入生のみなさんには、伝統ある専修大学で誇りを持って学んでいただきたいと思っています。

■国際コミュニケーション学部での学び

私たち国際コミュニケーション学部は、国際人であった創立者たちの精神を受け継ぎ、専修大学の21世紀ビジョン「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」の具現化の一つとして、《グローバルコミュニケーションを学ぶことで、これらの時代に国内外で生き生きと活躍すること》を目指します。日本語学科は日本語という言語を軸にして世界とつながることを学び、異文化コミュニケーション学科では複数の外国語を入り口にして文化の多様性や世界各地域の特性を学びます。

学部そして両学科の「ディプロマポリシー」や「カリキュラムポリシー」は、このガイドブックにも収録しています。履修登録の時期だけでなく、折々にふれて読み直していただくことで、4年間の学修がぶれないものになるはずですよ。

企業が大学教育に対して求めていることの中には、「多様性を尊重し、異文化を受け入れながら組織力を高める力」や「価値観の異なる相手と双方向に真摯に学びあう対話力」を身に付けることがあります。国際コミュニケーション学部では、教室での講義だけでなく、留学や実習などを通してアクティブに世界に触れながら、グローバルコミュニケーションの体得を目指します。

■コミュニケーションを学ぶことの意義

ところで、私たちと同じ哺乳類であるマッコウクジラは、数百頭から数千頭からなるクランという集団を形成しており、それぞれのクランには、特有の言語（方言）と文化（習性）があることが、生物学者たちによって明らかにされてきています。気候変動が起きたとき、餌の確保が困難になってしまうクランと、これまで通りに確保できるクランとが生じることがあるのだそうです。マッコウクジラは、クラン間で言語と文化が異なるために情報交換することができないだけでなく、異なるクランから学ぶこともありません。こうしたことは、野生動物の生存競争の中では当たり前のことなのかもしれません。

私たちヒトも、様々な言語と多様な文化を持っているという点はマッコウクジラと同じです。しかし、ヒトは、異なる言語を学ぶ行為や、多様な文化を知ってお互いから学ぶという行為が可能な生物です。世界規模の危機に直面している現在、私たちは、新しいコミュニケーションのあり方を工夫することや、文化の違いを越えて学び合うことがどれだけできるかを試されているのではないのでしょうか。私たちは今、ヒトがヒトとして存在する意義を問われているのだとも言えるのです。

■履修プログラムを自主的・自発的に組もう

大学での学びは、専門分野だけではありません。それぞれの学科では、特色を生かしながら、転換・導入科目、教養科目、外国語科目、専門科目を幅広く用意しています。

この「学修ガイドブック」をよりどころとし、毎年の年度初めの「履修ガイダンス」に出席することで、自主的・自発的に自分の目標にあった履修プログラムを自らの責任で組み立てていくことが大切です。

グローバル化の進展に伴い、日本企業に特徴的であった終身雇用と年功序列は限界を迎えていると言われています。こうした状況の中では、社会人になっても、常に次の自分に何が必要かを見極め、新たなことを学び取っていくことが求められます。大学での4年間の履修プログラムを組み立てることを通して、自分なりの目標や戦略を持って「新しいことを学びとるスキル」を磨いていきましょう。

1. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

専修大学	<p>専修大学は、「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」のもと、「専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力」の育成を目指し、次に掲げる資質・能力を身につけることを卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）とします。</p> <ol style="list-style-type: none"> （1）社会知性の核となる、専門的および一般的な知識を体系的に理解し、それらを説明することができる。（知識・理解） （2）言語運用能力、情報・データリテラシーを身につけ、それらを活用することができる。（汎用的技能） （3）知識体系を基盤とした思考方法を用いて、地球的視野から創造的に社会の諸課題に取り組むことができる。（知識体系に基づく思考と知の創出） （4）「社会知性」の意義を理解した上で、人間理解、倫理観を基礎にして、社会生活上の諸課題の解決に取り組んでいける能力を更新し続けることができる。（態度・志向性）
国際コミュニケーション学部	<p>国際コミュニケーション学部は、日本語を含む諸言語についての研究、言語教育の手法やコミュニケーションの在り方そのものについての研究及び社会・思想・文化の研究を基礎としながら、より広い視野をもち、強靱な論理的思考を実践できる力を身につけた人に、日本語学科では学士（文学）、異文化コミュニケーション学科では学士（言語文化）の学位を授与します。各学科において修得すべき資質・能力は、以下のとおりです。</p>
日本語学科	<ol style="list-style-type: none"> （1）日本語学の諸分野に関する知識と日本語の諸相とについて体系的に理解し、説明することができる。また、言語学、日本語以外の言語、コミュニケーション、文化、歴史、社会、自然などについての一般的知識を理解し、説明することができる。（知識・理解） （2）言語学的視点に立った日本語の高い運用能力を身につけ、情報・データを適切な方法で収集・処理・表現し、国際化社会において知見や自身の考えなどを聞き手に分かりやすく伝達することができる。（汎用的技能） （3）自らの知識と客観的な情報を統合し、複眼的・批判的に思考・分析することで、国際化社会の諸課題の解決に寄与することができる。（知識体系に基づく思考と知の創出） （4）多様な視点からの卓越した知見を活かし、日本語の言語教育（国語教育・日本語教育等）の分野をはじめとして、日本語を必要とする様々な領域に参加することができる。（態度・志向性）
異文化コミュニケーション学科	<ol style="list-style-type: none"> （1）文化・歴史・社会、自然及び情報・データリテラシーなど幅広い領域の一般的知識を獲得し、様々な言語や文化と多様なコミュニケーションの知識を通して、多様な地域・社会に関する知識を構造的かつ体系的に理解し、説明することができる。（知識・理解） （2）日本語に加えて複数の外国語の運用能力を獲得し、自己の考えや判断を的確に表現することができる。（汎用的技能） （3）外国語の高度な運用を通して、多様な情報を収集・理解・評価し、現代社会の諸問題を国際的な視点及び普遍性と特殊性の観点から把握・分析できる。また、論理的な思考に基づいて主体的な判断を提示することができる。（知識体系に基づく思考と知の創出） （4）異文化や他者への関心と共感を深め、自己と国際社会への複眼的な視点を持ち、多様な価値観を受け入れて、社会に参画することができる。（態度・志向性）

2. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

専修大学	<p>専修大学は、卒業認定・学位授与の方針に掲げる資質や能力を身につけるための教育課程として、各学部・学科に設置する科目を体系的に編成し、講義・演習等を適切に組み合わせた授業を行います。また、教育課程の実施に係る「教育課程の構成と目的」、「教育課程上の各種取組」および「学修成果の評価方法」について、以下のように方針を定めます。</p> <p>（1）教育課程の構成と目的</p> <p>専修大学の教育課程は、以下に記載する「転換・導入科目」、「教養科目」、「外国語科目」および「専門科目」で構成し、授業科目の系統性を示す科目ナンバリングを導入することで、教育課程の体系性と順次性を確保するとともに、教養教育と専門教育</p>
------	--

	<p>の有機的連携を図ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・転換・導入科目 <ul style="list-style-type: none"> 転換教育として、少人数演習形式の「専修大学入門ゼミナール」を設置し、社会知性の開発を目指す専修大学の学生としての自覚と心構えを持ち、大学での学修に求められる技能や能力（読解力・思考力・プレゼンテーション力・文章力）を身につけます。 導入教育として、教育目標である「社会知性の開発」の基礎を学修し、大学で学ぶときだけでなく、生涯学ぶうえで必要とされる基盤となる能力を身につけます。 ・教養科目 <ul style="list-style-type: none"> 専修大学における教養教育は、各学部・学科の専門教育を相対化し、専門教育の範囲を超えた広い領域の知識・技能を学び、異なる視点から問題にアプローチすることを目的としています。教養科目では、こうした学部・学科の学問領域に捉われない多面的なものの見方の基礎を養成するために、「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」、「融合領域科目」および「保健体育系科目」で構成します。 ・外国語科目 <ul style="list-style-type: none"> 外国語科目では、英語をはじめとする外国語の運用能力を獲得し、適切なコミュニケーションを行うことで、世界の文化や社会について理解を深め、幅広い視野からさまざまな問題に取り組む力を身につけることを目的とし、「英語」、「英語以外の外国語」および「海外語学研修」で構成します。 ・専門科目 <ul style="list-style-type: none"> 専門科目では、専門的な知識・技能とそれに基づく思考方法や、主体的に問題の解決に取り組む能力を身につけるために、それぞれの学科において、基礎から発展・応用的内容へと段階的な科目配置にします。 <p>(2) 教育課程上の各種取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・能動的な学修への参加を促すため、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等のアクティブ・ラーニングを導入します。 ・単位制度の実質化を図る観点から、特定の学期における偏りのある履修登録を避けるために、履修登録単位数の上限を明示します。 <p>(3) 学修成果の評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業時における質を確保する観点から、学生に対しては、各授業科目における到達目標、授業内容、成績評価基準等を明示し、これに基づく厳格な評価を行います。 ・卒業認定・学位授与の方針に掲げる資質・能力および総合的な活用力の修得状況を、「大学レベル」、「学部・学科レベル」および「学生個人レベル」の三つのレベルで把握し、評価します。これらの詳細はアセスメントプランに記載しています。 ・各授業科目と卒業認定・学位授与の方針に掲げる資質・能力との対応関係は、カリキュラム・マップに示しています。各授業科目の成績評価は、対応する卒業認定・学位授与の方針に掲げる資質・能力に応じて、筆記試験、実技試験、形成的評価、成果物等によって適切に評価します。
<p>国際コミュニケーション学部</p>	<p>国際コミュニケーション学部では、教育研究上の目的及び養成する人材に関する目的を達成するために、「転換・導入科目」、「教養科目」、「外国語科目」及び「専門科目」の4つの科目区分で教育課程を構成し、教育課程全体の体系的・順次性を確保し、かつ教養教育と専門教育の有機的連携を図ります。</p>
<p>日本語学科</p>	<p>(1) 学位授与の方針を踏まえた教育課程編成の方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学位授与に求められる体系的な教育課程の構築に向けて、初年次教育（転換・導入科目）、教養教育、専門教育、キャリア教育等の観点を踏まえた編成としており、特に初年次教育は、多様な入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを实践できる内容とし、キャリア教育は、卒業後も自律・自立して学習できる観点を踏まえた内容としています。 <p>①転換・導入科目、教養科目、外国語科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業認定・学位授与の方針に掲げる資質・能力の基盤となる授業科目として、科目区分「転換・導入科目」には、「専修大学入門科目」、「専門入門ゼミナール」、「キャリア基礎科目」、「基礎自然科学」を配置しています。 ・文化、歴史、社会、自然など幅広い領域の知識を理解し、説明することができる能力を養成するため、科目区分「教養科目」には、「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」、「融合領域科目」、「保健体育系科目」を配置しています。 ・言語運用能力を身につけ、活用することができる能力を養成するため、科目区分「外国語科目」には、「英語」、「英語以外の外国語」、「海外語学研修」を配置しています。

②専門科目

- ・「専門科目」は、「基礎科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「応用科目」、「関連科目」の5つの科目群で編成することとしており、4年間の体系的な科目履修を通して、知識と能力を身につけることが可能となるよう配慮し、基礎から基幹、基幹から発展、発展から応用へと展開させるための教育課程の編成としています。
- ・日本語学の諸分野に関する知識と日本語の諸相とについて体系的に理解し、説明することができる能力を養成するために、「基礎科目」、「基幹科目」、「発展科目」において、日本語の音声、音韻・表記、文法、語彙・意味、語用論等の諸分野及び日本語の時間的変異、空間的変異、社会的変異に関する授業科目を配置しています。また、言語学、コミュニケーション、文化についての知識を理解し、説明することができる能力を養成する授業科目を、「基礎科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「関連科目」に配置しています。
- ・言語学的視点に立った日本語の高い運用能力を身につけ、情報・データを適切な方法で収集・処理・表現し、国際化社会において知見や自身の考えなどを聞き手に分かりやすく伝達することができる能力を養成するために、「基礎科目」、「基幹科目」において、情報・データリテラシーを身につける授業科目を配置しています。
- ・自らの知識と客観的な情報を統合し、複眼的・批判的に思考・分析することで、国際化社会の諸課題の解決に寄与することができる能力を養成するための授業科目を、「基幹科目」、「発展科目」、「応用科目」に配置しています。
- ・多様な視点からの卓越した知見を活かし、日本語の言語教育（国語教育・日本語教育等）の分野をはじめとして、日本語を必要とする様々な領域に参加することができる能力を養成するための授業科目を、「基礎科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「応用科目」に配置しています。

(2) 学位授与の方針を踏まえた教育課程実施の方針

①転換・導入科目、教養科目、外国語科目

- ・大学での学修の基盤となる能力を養成する「転換・導入科目」は、多様な入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを実践する初年次教育として実施します。
- ・言語運用能力のうち、自分自身の思考や判断を明晰かつ適切に伝達するための基礎力養成は、「転換・導入科目」の「専修大学入門科目」において実施し、必修科目として、1年次に全員が学びます。
- ・幅広い領域の知識・理解の修得は、「教養科目」において実施し、10単位以上修得することを卒業要件としています。
- ・言語運用能力のうち、母語以外の言語運用能力の養成は、「外国語科目」において実施し、英語から4単位以上（外国人留学生は日本語8単位以上）、英語以外の外国語から4単位以上修得することを卒業要件としています。

②専門科目

・基礎科目

日本語や日本文化を学ぶ目的や、日本語学の基礎的な知識体系を理解するとともに、情報やデータを扱う日本語情報処理、日本語学と社会との接点、言語学、多様な考え方や立場を理解する異文化理解の基礎についての学修は、「基礎科目」において実施します。6科目12単位を必修科目として配置し、6科目12単位を選択科目として配置します。

・基幹科目

「基礎科目」の理解のうえに、日本語学の諸分野に関する専門的な知識体系を理解するとともに、日本語の時間的変異、空間的変異、社会的変異及び日本語教育や日本語統計・情報処理に関する基礎についての学修は、「基幹科目」において実施します。2科目4単位を必修科目として配置し、25科目50単位を選択科目として配置します。

・発展科目

「基幹科目」の理解のうえに、日本語学の諸分野に関する専門的な知識をより深く理解するとともに、日本語学、言語学の諸分野に関する知識の理解、日本語教育、言語教育の実践しながらの理解及び日本の言語政策の歴史についての理解による、専門的な知識体系と一般的な知識の統合や論理的な分析に関する学修は、「発展科目」において実施します。2科目4単位を必修科目として配置し、14科目30単位を選択科目として配置します。

・応用科目

日本語教育に関する実践的な能力及び日本語学の応用分野に関する実践的な能力を修得するとともに、学生が特定のテーマについて主体的に判断して研究、発

表、報告、討論を行うことによる、具体的な状況に対する知識の応用や課題の発見・解決に関する学修は、「応用科目」において実施します。3科目12単位を必修科目として配置し、3科目7単位を選択科目として配置します。

・関連科目

日本語学に関連のある日本文学・中国文学・書道及び海外の文化や地域研究等に関する学修は、「関連科目」において実施します。30科目60単位を選択科目として配置します。

(3) 教育内容・方法

① 転換・導入科目

高等学校段階の教育と大学での教育とを接続するために、社会知性の開発を目指す専修大学の学生としての自覚と心構えを持ち、大学での学修に求められる最低限の読解力・思考力・プレゼンテーション力・文章力などの技能や能力を身につける内容の「専修大学入門ゼミナール」は、初年次教育の少人数演習形式とします。

「専門入門ゼミナール」、「キャリア入門」、「あなたと自然科学」は、専門的な知識・技能とそれに基づく思考方法や地球的視野からの視点を持つため、その基礎となる内容と、大学で学ぶときだけではなく、生涯学ぶうえで社会においても必要とされる基礎的な力を身につける内容とします。

② 教養科目

各学部・学科の専門教育を相対化し、専門教育の範囲を超えた幅広い領域の知識・技能を学び、異なる視点から問題にアプローチすることを目的とする「教養科目」は、各授業科目の内容に応じた授業形態（講義、演習、実験・実習）とします。

「教養科目」を構成する「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」は、特に、文化、歴史、社会、自然など幅広い教養を身につける内容とします。また、「融合領域科目」は、基礎的な知識や技能を背景として、専門教育以外の異なる視点からの総合的な学習経験と創造的思考力を養成する内容とします。「保健体育系科目」は、自身の健康やスポーツへの理解を深める目的にとどまらず、自己管理能力やチームワークなどを身につける内容とします。

③ 外国語科目

英語をはじめとする外国語の運用能力を獲得し、適切なコミュニケーションを行うことで、世界の文化や社会について理解を深め、幅広い視野からさまざまな問題に取り組む力を身につけることを目的とする「外国語科目」は、一部の授業科目を除き、演習形式とします。

1年次に履修する英語は、入学時に行うプレイスメントテストに基づいて習熟度別の少人数クラスを編成し、外国語の基礎的な運用能力の獲得と適切なコミュニケーション能力を身につける内容とします。

英語以外の外国語は、多くの学生が初めて学ぶものであることを踏まえ、初級・中級・上級とそれぞれの学習段階における到達目標を明確にした内容とします。

また、異文化・多文化への理解を深め、世界の諸地域の言語とその背景となる文化を身につける内容の「世界の言語と文化」、「言語文化研究」は、講義形式とします。

④ 専門科目

・基礎科目

「基礎科目」は、日本語や日本文化を学ぶ目的や、日本語学の基礎的な知識体系を理解するとともに、日本語情報処理、日本語学と社会との接点、言語学、異文化理解の基礎を学修する内容とします。

・基幹科目

「基幹科目」は、「基礎科目」の理解のうえに、日本語学の諸分野に関する専門的な知識体系を理解するとともに、日本語の時間的変異、空間的変異、社会的変異及び日本語教育や日本語統計・情報処理に関する基礎を学修する内容とします。

・発展科目

「発展科目」は、「基幹科目」の理解のうえに、日本語学の諸分野に関する知識をより深く理解するとともに、日本語学、言語学の諸分野に関する知識の理解、日本語教育、言語教育の実践しながらの理解及び日本の言語政策の歴史について学修する内容とします。

・応用科目

「応用科目」は、日本語教育に関する実践的な能力及び日本語学の応用分野に関する実践的な能力を修得するとともに、学生が特定のテーマについて主体的に判断して研究、発表、報告、討論を行う内容とします。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関連科目 「関連科目」は、日本語学に関連のある日本文学・中国文学・書道及び海外の文化や地域研究等に関する内容とします。 ・ 専門分野の基礎的な知識及び幅広い領域の習得と理解を目的とする教育内容は、講義形式による授業形態を採るとともに、態度・志向性（多様な価値観の受入れ、倫理観と社会的責任）及び汎用的技能（言語運用能力）の習得を目的とする教育内容は、演習形式による授業形態を採ることとし、知識体系に基づく思考と知の創出（知識の統合と活用、論理的思考力、問題解決力）を目的とする教育内容は、演習形式や実践形式を交えた授業形態を採ります。 ・ 学修者の能動的な学修への参加を促すために、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等をはじめとする能動的学修を導入します。 ・ 教育課程編成・実施の方針が、教育研究上の目的や人材養成の目的を達成するという目的のもと策定され、かつ教育課程の編成において体系的性と順次性が明確であることを示すために、授業科目の系統性を示す科目ナンバリングを導入します。 ・ 単位制度の実質化を図る観点から、特定の学期における偏りのある履修登録を避けるとともに、学生が学習目標に沿った適切な授業科目の履修が可能となるように、養成する具体的な人材像に対応した典型的な履修モデルを提示するとともに、C A P 制の意義を踏まえ履修登録単位数の上限を明示します。 ・ 卒業時における質を確保する観点から、予め学生に対して各授業科目における学習目標やその目標を達成するための授業の方法、計画等を明示したうえで、成績評価基準や卒業認定基準を示し、これに基づく厳格な評価を行います。
異文化コミュニケーション学科	<p>(1) 学位授与の方針を踏まえた教育課程編成の方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学位授与に求められる体系的な教育課程の構築に向けて、初年次教育（転換・導入科目）、教養教育、専門教育、キャリア教育等の観点を踏まえた編成としており、特に初年次教育は、多様な入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを実践できる内容とし、キャリア教育は、卒業後も自律・自立して学習できる観点を踏まえた内容としています。 ① 転換・導入科目、教養科目、外国語科目 <ul style="list-style-type: none"> ・ 卒業認定・学位授与の方針で掲げる資質・能力の基盤となる授業科目として、科目区分「転換・導入科目」には、「専修大学入門科目」、「データリテラシー」、「キャリア基礎科目」、「情報リテラシー科目」、「基礎自然科学」を配置しています。 ・ 文化、歴史、社会、自然など幅広い領域の知識を理解し、説明することができる能力を養成するため、科目区分「教養科目」には、「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」、「融合領域科目」、「保健体育系科目」を配置しています。 ・ 言語運用能力を身につけ、活用することができる能力を養成するため、科目区分「外国語科目」には、「英語」、「英語以外の外国語」、「海外語学研修」を配置しています。 ② 専門科目 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「専門科目」は、言語系科目に加え、＜地域＞＜文化＞＜コミュニケーション＞の3体系を柱として、「基礎科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「応用科目」、「関連科目」の科目群から編成することとしており、4年間の体系的な科目履修を通して、知識と能力を身につけることが可能となるよう配慮し、基礎から基幹、基幹から発展、発展から応用へと展開させるための教育課程の編成としています。 ・ 様々な言語や文化と多様なコミュニケーションの知識を通して、多様な地域・社会に関する知識を構造的かつ体系的に理解し、説明することができる能力を養成するための授業科目を、「基礎科目」、「基幹科目」に配置しています。 ・ 日本語に加えて複数の外国語の運用能力を獲得し、自己の考えや判断を的確に表現することができる能力を養成するための授業科目を、「基礎科目」、「基幹科目」に配置しています。 ・ 外国語の高度な運用を通して、多様な情報を収集・理解・評価し、現代社会の諸問題を国際的な視点及び普遍性と特殊性の観点から把握・分析できるとともに、論理的な思考に基づいて主体的な判断を提示することができる能力を養成するための授業科目を、「基幹科目」「発展科目」に配置しています。 ・ 異文化や他者への関心と共感を深め、自己と国際社会への複眼的な視点を持ち、多様な価値観を受け入れて、社会に参画することができる能力を養成するための授業科目を、「応用科目」、「関連科目」に配置しています。

(2) 学位授与の方針を踏まえた教育課程実施の方針

① 転換・導入科目, 教養科目, 外国語科目

- ・大学での学修の基盤となる能力を養成する「転換・導入科目」は、多様な入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを实践する初年次教育として実施します。
- ・言語運用能力のうち、自分自身の思考や判断を明晰かつ適切に伝達するための基礎力養成は、「転換・導入科目」の「専修大学入門科目」において実施し、必修科目として、1年次に全員が学びます。
- ・情報・データリテラシーの基礎力養成は、「転換・導入科目」の「情報リテラシー科目」及び「データリテラシー」において実施します。
- ・幅広い領域の知識・理解の修得は、「教養科目」において実施し、10単位以上修得することを卒業要件としています。
- ・言語運用能力のうち、母語以外の言語運用能力の養成は、「外国語科目」において実施します（外国人留学生は日本語を8単位以上修得することが卒業要件）。

② 専門科目

・基礎科目

思考と表現の土台となる日本語と日本文化に対する理解、異文化理解の基礎の学修、国際的な社会知性の涵養に欠かせない外国語の運用能力の修得は、「基礎科目」において実施します。日本語・日本文化系科目、言語系科目を中心に7科目9単位を必修科目、44科目45単位を選択科目として配置します。

・基幹科目

「基礎科目」で学修した外国語の運用能力を実践の場において高め、多様なコミュニケーション能力とともに複眼的な視点に立った文化への関心と理解の涵養は、「基幹科目」において実施します。6科目18単位を必修科目として配置し、52科目104単位を選択科目として配置します。うち<地域><文化><コミュニケーション>に関連する科目群から計6単位以上、言語系科目から計24単位以上、また、他者の多様な考え方や立場を理解したり、修得した専門的知識を体系化し、一般的知識と統合して応用する「ゼミナール」などの6科目18単位の修得を卒業要件としています。

・発展科目

世界の多様性を学究的な領域で深め、発展させるとともに、他者の多様な考え方や立場を理解しつつ、広い視野から様々な問題を自ら発見・分析し、その解決に向けて主体的な判断を提示できる国際的な社会知性の涵養は、「発展科目」において実施します。15科目30単位を選択科目として配置し、うち<地域><文化><コミュニケーション>の3体系から各2単位、計12単位以上修得することを卒業要件としています。

・応用科目

「基幹科目」及び「発展科目」の学修内容をさらに深め、これまで学修した専門分野の基礎的な知識や理解をベースとしながら自分の置かれている状況を把握し、社会の多様性に意欲的に対応しながら他者と協働しつつ、論理的な思考に基づいて自らの考えを表現する能力の涵養は、「発展科目」において実施します。18科目36単位を選択科目として配置し、うち<地域><文化><コミュニケーション>の3体系から各2単位、「関連科目」と合わせ計14単位以上修得することを卒業要件としています。

・関連科目

「関連科目」は、「発展科目」と「応用科目」を連動させ、学際的かつ実践的な学修に結びつけるとともに、多様な言語による表現などの幅広い学修の機会を設ける科目として、19科目38単位を選択科目として配置します。

(3) 教育内容・方法

① 転換・導入科目

高等学校段階の教育と大学での教育とを接続するために、社会知性の開発を目指す専修大学の学生としての自覚と心構えを持ち、大学での学修に求められる最低限の読解力・思考力・プレゼンテーション力・文章力などの技能や能力を身につける内容の「専修大学入門ゼミナール」は、初年次教育の少人数演習形式とします。

「データ分析入門」、「キャリア入門」、「情報入門1・2」、「あなたと自然科学」は、専門的な知識・技能とそれに基づく思考方法や地球的視野からの視点を持つため、その基礎となる内容と、大学で学ぶときだけではなく、生涯学ぶうえで社会においても必要とされる基礎的な力を身につける内容とします。

② 教養科目

各学部・学科の専門教育を相対化し、専門教育の範囲を超えた幅広い領域の知識・

技能を学び、異なる視点から問題にアプローチすることを目的とする「教養科目」は、各授業科目の内容に応じた授業形態（講義、演習、実験・実習）とします。

「教養科目」を構成する「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」は、特に、文化、歴史、社会、自然など幅広い教養を身につける内容とします。また、「融合領域科目」は、基礎的な知識や技能を背景として、専門教育以外の異なる視点からの総合的な学習経験と創造的思考力を養成する内容とします。「保健体育系科目」は、自身の健康やスポーツへの理解を深める目的にとどまらず、自己管理能力やチームワークなどを身につける内容とします。

③外国語科目

英語をはじめとする外国語の運用能力を獲得し、適切なコミュニケーションを行うことで、世界の文化や社会について理解を深め、幅広い視野からさまざまな問題に取り組む力を身につけることを目的とする「外国語科目」は、一部の授業科目を除き、演習形式とします。

英語は、本学科の学生が継続的に学修するための科目と位置づけ、外国語の運用能力のさらなる育成と適切なコミュニケーション能力を身につける内容とします。

英語以外の外国語は、本学科の学生が第三言語として学修するものと位置づけ、それぞれの学習段階における到達目標を明確にした内容とします。

④専門科目

・基礎科目

「基礎科目」は、思考と表現の土台となる日本語と日本文化に対する理解を深め、異文化理解の基礎を学修するとともに、国際的な社会知性の涵養に欠かせない外国語の運用能力を修得する内容とします。

・基幹科目

「基幹科目」は、「基礎科目」で学修した外国語の運用能力を実践の場において高め、多様なコミュニケーション能力とともに複眼的な視点に立った文化への関心と理解を養い、「発展科目」における学修の基礎となる内容とします。

・発展科目

「発展科目」は、世界の多様性を学術的な領域で深め、発展させるとともに、社会の多様性に対応し、問題を自ら設定し、その解決に向けて主体的な判断を提示できるだけの国際的な社会知性を涵養する内容とします。

・応用科目

「応用科目」は、「基幹科目」及び「発展科目」の学修内容をさらに深め、これまで学修した専門分野の基礎的な知識や理解をベースとしながら、社会の多様性に意欲的に対応、論理的な思考に基づいて自らの考えを表現できるようにする内容とします。

・関連科目

「関連科目」は、「発展科目」と「応用科目」を連動させ、学際的かつ実践的な学修に結びつけるとともに、多様な言語による表現などの幅広い学修の機会を設ける内容とします。

・専門分野の基礎的な知識及び幅広い領域の習得と理解を目的とする教育内容は、講義形式及び演習形式による授業形態を採るとともに、汎用的技能（言語運用能力）の習得を目的とする教育内容は、主に演習形式による授業形態を採ることとし、知識体系に基づく思考と知の創出（知識の統合と活用、論理的思考力、問題解決力）及び態度・志向性（多様な価値観の受入れ、倫理観と社会的責任）を目的とする教育内容は、講義形式及び演習形式による授業形態を採ります。

・学修者の能動的な学修への参加を促すために、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等をはじめとする能動的学修を導入します。

・教育課程編成・実施の方針が、教育研究上の目的や人材養成の目的を達成するという目的のもと策定され、かつ教育課程の編成において体系性と順次性が明確であることを示すために、授業科目の系統性を示す科目ナンバリングを導入します。

・単位制度の実質化を図る観点から、特定の学期における偏りのある履修登録を避けるとともに、学生が学習目標に沿った適切な授業科目の履修が可能となるように、養成する具体的な人材像に対応した典型的な履修モデルを提示するとともに、CAP制の意義を踏まえ履修登録単位数の上限を明示します。

・卒業時における質を確保する観点から、予め学生に対して各授業科目における学習目標やその目標を達成するための授業の方法、計画等を明示したうえで、成績評価基準や卒業認定基準を示し、これに基づく厳格な評価を行います。

目 次

学部長からのメッセージ	3
1. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）	4
2. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）	4
I 専修大学の学士課程教育	13
II 大学における学修	
1. 大学における学修	16
2. 単位制と授業科目	17
3. 専修大学の科目ナンバリング	19
4. 専修大学のデータサイエンス教育	21
5. 卒業要件	22
6. 卒業見込証明書発行条件	24
7. 授業科目の履修について	24
*日本語学科科目一覧	27
*異文化コミュニケーション学科科目一覧	29
8. 全学公開科目	31
9. 試験について	32
10. 卒業論文・卒業研究	34
11. 成績評価と通知	35
12. オフィス・アワー	36
13. 卒業発表	37
14. 学期末卒業制度	37
15. 卒業延期制度	37
16. 授業評価	37
III 転換・導入科目	
1. 専修大学入門科目	40
2. 専門入門ゼミナール	41
3. データリテラシー	41
4. キャリア基礎科目	41
5. 情報リテラシー科目	43
6. 基礎自然科学	43
IV 教養科目	
1. 人文科学基礎科目	46
2. 社会科学基礎科目	47
3. 自然科学系科目	48
4. 融合領域科目	50
5. 保健体育系科目	51
V 外国語科目	
1. 英語	54
2. 英語以外の外国語	59

3. 海外語学研修	64
VI 専門科目	
1. 国際コミュニケーション学部のカリキュラムの特色	70
2. 日本語学科での学び方	71
3. 異文化コミュニケーション学科での学び方	80
VII 外国人留学生の履修について	
1. 大学卒業の要件	94
2. 外国人留学生の特例履修科目	95
*日本語学科科目一覧（外国人留学生）	97
*異文化コミュニケーション学科科目一覧（外国人留学生）	99
VIII 教職，司書，司書教諭，学校司書，学芸員課程	
1. 教職課程	102
2. 司書・司書教諭・学校司書課程	102
3. 学芸員課程	103
4. 大学院教職課程	103
5. 科目等履修生	103
IX 海外留学プログラム	
1. 長期交換留学プログラム	106
2. セメスター交換留学プログラム	106
3. 中期留学プログラム	106
4. 春期留学プログラム	107
5. 夏期留学プログラム	107
6. 寮内留学プログラム（日本国内）	107
X 情報科学センター	
1. 情報科学センターの利用について	110
2. 情報科学センター窓口	110
3. 開設時間	110
4. 利用手続	110
5. 講座	110
XI 卒業後の進路	
1. 就職・キャリア形成について	112
2. 大学院進学	113
XII 各種規程・規則	
1. 専修大学履修規程	116
2. 専修大学定期試験規程	119
3. 定期試験における不正行為者処分規程	123
4. 専修大学国際コミュニケーション学部学期末卒業に関する取扱内規	125
5. 専修大学卒業延期の取扱いに関する内規	126

I 専修大学の学士課程教育

専修大学の学士課程教育

専修大学に入学したみなさんが、これから4年間専修大学に在学し、各学部学科で定められている授業科目の単位を修得すると、それぞれの専攻分野を付した「学士」となって卒業し、「社会への第一歩」を踏み出します。

この入学から「社会への第一歩」を繋ぐ「学び」の道のを「学士課程」と呼んでいます。

しかしながら、中学や高校の勉強と大学での「学び」は同じではありません。大学では、一人ひとりが自分で「学び」を選択し、自ら研鑽することが求められます。大学における「学び」は、受動的、画一的な「学習」ではなく、能動的、自律的な「学修」なのです。

そこで専修大学の「学士課程教育」では、まず、みなさんが大学での「学び」や生活にスムーズに適応し、大学および社会で求められる必要不可欠な基礎的知識と技能を修得できるよう転換・導入科目を設置しています。例えば、少人数の**専修大学入門ゼミナール**は全ての学部の学生が履修する科目です。この科目で、専修大学の学生としての自覚と心構えを得るでしょう。

この転換・導入科目に加えて、専修大学の学士課程教育は、教養科目、外国語科目および専門科目の4つの科目群で構成されています。転換・導入科目を土台に、教育課程全体の体系性・順次性が確保されるとともに、かつ教養教育と専門教育の有機的連携が図られています。2019年度からは科目ナンバリングも導入され、科目の体系性・順次性がよりわかりやすくなりました。

教養科目には、「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」、「融合領域科目」および「保健体育系科目」の5つの科目群があり、興味を持った分野をより深く学べるようになっています。今日のかつ学際的・融合的な科目も用意されています。外国語科目は、「英語」、「英語以外の外国語」、「海外語学研修」の3つの科目群で構成されています。外国語の重要性はみなさんも十分に理解しているでしょう。専門科目は、それぞれの専攻分野について、基礎から応用へと段階的に学修できる科目配置となっています。専修大学の多様な科目を履修することで、各自の興味や関心を深化、発展させたり、専門分野を多角的に考察したりすることで、社会に通用する力を確実につけることができます。

つまり、専修大学の学士課程教育を通じて、どの学部にも所属していても、社会に出てから必要な基礎的知識や技能を学び、課題解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力などを身につけることができます。専修大学の学士課程教育は、一人ひとりの「学修」が、将来の持続的成長につながるよう、様々な工夫されています。

みなさんの将来には、無限の夢と希望が満ち溢れています。しかし内外の環境は急速に変化しており、それらに適時適切な対応をしつつ、世界に飛翔するためには、国際的通用性を備え、先見性・創造性・独創性に富み、積極的に社会を支え、社会を改善する意欲・能力が肝要です。「学び」は一瞬の夢ではありません。生涯続く険しい道りです。高い志と気概を失うことなく、21世紀を生き抜くために、専修大学での学びを通じて人生の礎を築いてください。

Ⅱ 大学における学修

1. 大学における学修

学校教育法第83条第1項では、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とされています。つまり、大学教育では、学部・学科ごとの専門の学術を教授するだけではなく、豊かな人間性を育むことが目的とされています。

大学は、高度の専門的知識・技能を磨いて職業人を養成すると同時に、広い視野から人間教育を行い、文化水準の維持・発展に貢献する教養ある市民をつくり出すという任務を負っています。

こうした大学の役割を果たすために、本学では、みなさんが専門的知識・技能を身につけた教養ある市民となるために必要な授業科目を数多く設置しています。また授業以外でも、講演会、課外講座等を開催したり、サークル活動を援助したりするなど、もろもろの課外活動・自治活動の場を設け、それに必要な組織や施設を用意しています。

(1) 大学の授業

大学の授業には、講義形式のものとゼミナール（演習）形式のものがあります。

講義形式の授業は、基本的に、教員が教壇に立ち、学生に対して学問上の知見や研究成果などを教授するという形をとります。学生のみなさんは、教員の話聞いて理解したりノートをとったりすることが中心となりますが、教員の話を一方向的に聞くだけではなく、講義中に質問をすることもできます。一般に、学生からの質問は歓迎されますが、講義の内容、受講者の人数、担当する教員の方針などによって、どのような場合に質問ができるかが異なりますので、質問するきっかけが分からない場合は、授業を担当する教員に問い合わせてください。また、講義は、学生が予習をして、その日の授業で取り上げる内容について、ある程度の知識を有していることを前提として行われます。したがって、全く予習をせずに授業に望むと、教員の話す内容がよく理解できない、または全く理解できないという可能性があります。予習をして授業に臨むことが強く望まれます。高校時代は予習をあまりしなくても授業が理解できたという人でも、大学の授業では予習・復習が大変重要になります。

ゼミナール（演習）形式の授業は、教員と少人数の学生によって構成され、学生が教員や他の学生と対話や議論を重ねることにより、知識を深め識見を高めようとするものです。学修の方法には、専門書などの書物を輪読する、論文を読んで議論をする、特定の問題について調査して報告するなど様々なものがあり、個々のゼミナール（演習）において、適切な方法が選択されます。ゼミナール（演習）では、自分の意見を述べたり、よく理解できない部分について質問したりするなど、積極的に発言することが求められます。

(2) 学期（セメスター）制

本学の授業は、1年を2学期に分けて行う、いわゆるセメスター制がとられており、それぞれを前期・後期と呼んでいます。

2. 単位制と授業科目

(1) 単位制とは何か

大学での学修の成果を計る基準として、単位制がとられています。すべての授業科目には一定の単位が定められています。みなさんは、その科目の履修登録をし、授業に出席し、そして試験を受ける、課題を提出するなどして合格点に達した場合に当該科目の単位が与えられます。

(2) 単位の考え方と算定基準

大学の授業は、講義、演習、実験、実習、実技などによって行われます。そして、単位とは、授業の受講に加え、事前の準備や事後の展開という学修の過程に要する時間を加味したもので、学修の量を数字で表した学修成果の指標といえます。単位数は、それぞれの科目により異なります。

大学設置基準において「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成すること」とされていますので、大学での2単位の講義科目であれば、授業を含めて90時間の学修が必要とされていることとなります。毎週1時限の教室での授業が1学期行われて30時間分の学修をしたものとみなしています。したがって、2単位科目の場合、残りの60時間分を教室外で学修しなければなりません。漫然と授業を受けるだけでなく、事前の準備や事後の展開にも力を入れるように心がけてください。

みなさんは、まずこの単位制度を充分理解して、学期や学年ごとに配当されている授業科目を計画的に、かつコンスタントに修得していく努力が求められます。

(3) 授業科目の類別

本学の授業科目は、「**転換・導入科目**」「**教養科目**」「**外国語科目**」「**専門科目**」の4つの区分から成り立っています。

「**転換・導入科目**」は、専修大学の入門・基礎科目として位置づけられています。大学の学びや生活にスムーズに転換できるようにし、大学や社会で求められる知識や技能、能力を伸ばしていこうとするものです。高等学校段階の教育と大学での教育を接続させるための初年次教育としての目的を重視して、少人数演習形式の「専修大学入門ゼミナール」を配置し、みなさんが、社会知性の開発を目指す専修大学の学生としての自覚と心構えを持ち、大学での学修に求められる最低限の読解力・思考力・プレゼンテーション力・文章力などの技能や能力を身につけることを目標としています。

また、専門的な知識・技能とそれに基づく思考方法や地球的視野からの視点をもつための基礎となる内容を学修すると同時に、大学で学ぶときだけではなく、生涯学ぼうえで社会においても必要とされる基礎的な力を身につけるために、中央教育審議会答申などで指摘されている「学士力」を意識し、「キャリア入門」、「あなたと自然科学」など、日本語学科3科目6単位、異文化コミュニケーション学科5科目10単位を配置しています。

「**教養科目**」は、「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」、「融合領域科目」、「保健体育系科目」から構成しています。各学部・学科の専門教育を相対化し、専門教育の範囲を超えた広い領域の知識・技能を学び、異なる視点から問題にアプローチすることを目的としています。つまり、自分の学部の分野とは違う分野から物事を見ることで、自分の専門分野を違う角度から捉えることができることとなります。したがって、個人の興味と関心に応じて履修できるものです。

「人文科学基礎科目」、「社会科学基礎科目」、「自然科学系科目」では、特に、文化・歴史・社会、自然など幅広い教養を身につけることを目的としています。また、「融合領域科目」は、基礎的な知識や技能

を背景として、専門教育以外の異なる視点からの総合的な学習経験と創造的思考力の涵養を目指すものです。「保健体育系科目」は、自身の健康やスポーツへの理解を深める目的にとどまらず、自己管理能力やチームワークなども養成する目的を有しています。これらの科目は、学部・学科を超えた普遍性の理解を基本理念とし、多面的なものの見方の基礎を養成することから、日本語学科87科目182単位、異文化コミュニケーション学科88科目184単位を配置しています。

「外国語科目」は、英語をはじめとする外国語の運用能力を獲得し、適切なコミュニケーションを行うことで、世界の文化や社会について理解を深め、幅広い視野からさまざまな問題に取り組む力を身につけることを目的としています。日本語学科の場合、英語のうち、1年次及び2年次に履修する、外国語の基礎的な運用能力の獲得と適切なコミュニケーション能力の養成を目的とした科目は、入学時に行うプレイスメント・テストに基づいた習熟度別の少人数クラスを編成し、レベル別の授業とすることで、能力の向上を目指しています。英語以外の外国語については、多くの学生が初めて学ぶ科目であることを踏まえ、初級・中級・上級とそれぞれの学習段階での到達目標を明確にしたレベル別の授業としています。異文化コミュニケーション学科の場合、「外国語科目」の語学科目は選択科目として履修できるため、専門科目として学ぶ言語以外を修得したいときには、個人の関心と目標にあわせて履修することができます。

また、異文化・多文化への理解を深めるために、講義形式で世界の諸地域の言語とその背景となる文化を学ぶ科目を含めて、日本語学科181科目263単位、異文化コミュニケーション学科86科目150単位を配置しています。

「専門科目」は、学部・学科の専攻に深く関わる科目であり、あるひとつの個別科学の立場を中心にして、ものの見方や考え方を訓練し、それぞれの学問分野に固有な考え方や方法論を学修することを目的としています。

基礎・基本を重視し、専門の骨格を正確に把握するとともに、科目間の関係や履修の順序、単位数等に配慮し、系統性と順次性のある教育課程を編成しています。「基礎科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「応用科目」、「関連科目」の科目群から成る4年間の体系的な科目履修を通して、知識と能力を身につけることが可能となるよう配慮し、専門的な知識・技能とそれに基づく思考方法や、主体的に問題の解決に取り組む能力を身につけることとなります。詳細は、「Ⅵ 専門科目」を参照してください。

また、このほかに、教育職員免許状（日本語学科のみ）、司書・司書教諭（日本語学科のみ）・学校司書および学芸員資格の取得を希望する学生のために、「資格課程科目」として、教職課程科目（日本語学科のみ）、司書・司書教諭（日本語学科のみ）・学校司書課程科目、学芸員課程科目が置かれ、転換・導入、教養、専門科目と並行して履修することができます。

（4）必修科目と選択科目

大学で履修する授業科目には、必ず履修しなければならない**必修科目**、複数の科目の中からいくつかの科目を必ず履修するように決められている**選択必修科目**、多くの科目の中から自分の学びたいものを自由に選択して履修できる**選択科目**があり、学部・学科によって、修得すべき科目や単位数が異なります。詳細は、「5. 卒業要件」(pp.22～23) および「科目一覧」(pp.27～30)を参照してください。

必修科目……卒業までに必ず修得しなければならない科目（授業科目一覧では○印で示す）

選択必修科目……決められた科目群の中から指定された方式で選択し、卒業までに必ず修得しなければならない科目（授業科目一覧では◎印で示す）

選択科目……個人の関心に合わせて選択履修できる科目（授業科目一覧では△印で示す）

(5) 自由選択修得要件単位への算入要件

自由選択修得要件単位は、学生の多様な学修目的の達成を可能にするために、卒業要件単位の一区分として設けられたものです。この単位は、特に必修科目として指定された科目を除き、科目区分にとらわれずに学生が自由に授業科目を選択し、修得することができるものです。なお、科目区分によっては、算入される単位数が異なりますので留意してください。

具体的には、以下のとおりです。

- a. 転換・導入科目のうち、所定の卒業要件単位数を超えた単位。
- b. 教養科目のうち、所定の卒業要件単位数を超えた単位。
- c. 外国語科目のうち、所定の卒業要件単位数を超えた単位。
- d. 専門科目のうち、選択必修科目・選択科目の修得単位数が所定の卒業要件単位数を超えた単位。
- e. 教職（日本語学科のみ）、司書・司書教諭（日本語学科のみ）・学校司書課程科目の修得単位（対象となる科目は、『教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック』参照）。
- f. 学部間相互履修制度によって修得できる全学公開科目の単位。

3. 専修大学の科目ナンバリング

科目ナンバリングとは、授業科目に適切な番号を付し分類することで、学修の段階や順序等を表し、教育課程の体系的性を明示する仕組みのことです。専修大学では科目ナンバリングを、6桁のアルファベットと数字で構成される「コースコード」で表すこととし、2019年度から全ての学部で導入しています。コースコードを用いることで、学びたい分野で開講されている科目とそのレベルを参照することができます。学びたい科目の詳細な授業内容は講義要項（シラバス）で確認することができますので、みなさんの興味関心を最大限に活かした、より体系的な履修計画を立てることができます。

なお、コースコードは講義要項（シラバス）に表示されるほか、単位修得学業成績証明書（和文・英文）および二種複合証明書に記載されます。コースコードは、年度毎に付番するのではなく、原則として授業科目に固定したものと付されます。

(1) 「科目ナンバリング」の意義

みなさんが、履修する授業科目を検討する際に、授業科目の分類、標準的な学修の段階や順序を理解し、たうてで選択することができます。

また、コードの構成は全学部で統一されているため、全学公開科目のように他学部で開講されている科目を履修する際に、学問分野や科目の水準など、開講科目の位置づけを理解することが容易になるので、主体的な学修を進めるうえでの助けとなります。

さらに、コースコードは学外にも公開されますので、国際交流協定校で修得した単位を専修大学で認定する際や、在学中・卒業後に海外の大学・大学院に入学する場合の単位互換等を円滑に進められることが期待できます。

(2) 「コースコード」の構成

「コースコード」は、「①分野コード（科目の学問分野を表す）」「②水準コード（科目のレベル、水準や難易度を表す）」「③科目開講学部等コード（開講学部や科目区分等）」から構成され、授業科目毎にコー

ドが付されます。

例えば、転換・導入科目の「専修大学入門ゼミナール」の場合、次のようなコースコードが付されま

す。

SEM 0 01

分野コード

水準コード

科目開講学部等コード

<各コードの意味>

①分野コード 専修大学で開講されている科目を111の分野に分け、3桁のアルファベットで表します。

科目の分野	分野コード	科目の分野	分野コード	科目の分野	分野コード
会計学	ACC	ドイツ語	GER	経営学	MAN
アラビア語	ARA	地理学一般	GGR	数理科学	MAT
考古学	ARC	情報学一般	GIN	学芸員課程	MCP
芸術一般	ARL	心理学一般	GPS	経営情報学	MNI
地域研究	ARS	ギリシャ語	GRK	金融・ファイナンス	MOF
美学・芸術諸学	ASA	アジア史・アフリカ史	HAA	新領域法学	NFL
文化財科学・博物館学	CAS	ヨーロッパ史・アメリカ史	HEA	自然科学一般	NSC
中国語	CHI	人文学一般	HMN	海外語学研修	OSS
中国文学	CHL	思想史	HOT	財政・公共経済	PFP
民事法学	CIL	史学一般	HSG	哲学一般	PHE
臨床心理学	CLP	人文地理学	HUG	自然地理学	PHG
商学	CME	人間情報学	HUI	計算基盤	POI
キャリア科目	CRE	人体病理学	HUP	政治学	POL
刑事法学	CRL	情報通信技術	ICT	精神神経科学	PSS
文化人類学・民俗学	CUA	国際開発問題	IDG	公法学	PUL
発達心理学	DEP	融合領域科目	IDS	地誌学	REG
デザイン学	DES	国際経済政策	IEP	宗教学	RES
経済史	ECH	国際法学	ILA	ロシア語	RUS
経済政策	ECP	インドネシア語	IND	社会科学一般	SCS
経済統計	ECS	国際関係論	INR	ゼミナール	SEM
理論経済学	ECT	情報システム	INS	空間情報科学	SIS
教育心理学	EDP	イタリア語	ITL	学校司書課程	SLP
教育工学	EDT	日本文化	JAC	特別支援教育	SNE
教育学	EDU	日本文学	JAL	社会学	SOC
英語一般	ENG	日本語教育	JLE	社会情報学	SOI
英語学	ENL	日本語学	JLI	社会法学	SOL
経済学・政治経済学	EPE	日本史	JPH	社会心理学	SOP
環境政策・環境社会システム	EPS	日本語	JPN	特殊講義	SPL
英語 読む・聴く	ERL	ジャーナリズム	JRN	スペイン語	SPN
英語 話す・書く	ESW	コリア語	KOR	スポーツ科学	SPS
倫理学	ETH	ラテン語	LAT	社会システム工学	SSE
実験心理学	EXP	司書課程	LCP	統計科学	STS
美術史	FAH	図書館情報学・人文社会情報学	LHS	SWP 科目	SWP

科目の分野	分野コード	科目の分野	分野コード	科目の分野	分野コード
外国語教育	FLE	英米・英語圏文学	LIE	教職課程	TCP
フランス語	FRE	文学一般	LIG	卒業論文・卒業研究	THE
基礎法学	FUL	言語学	LIN	司書教諭課程	TLP
ジェンダー	GDE	論理学	LOG	世界の言語と文化・言語文化研究	WLC

- ②水準コード 学士課程4年間におけるそれぞれの科目の位置づけ（学修段階）に基づいて、1桁の数字で表します。科目の配当年次とは異なりますので、3・4年次に水準の低い科目を履修することも、1・2年次に高い水準の科目を履修することもあります。

水準コード	学修段階
0	転換教育および導入教育を目的とした科目
1	学問分野の初級レベル，入門的位置づけの科目 (主に大学1年次を想定したレベル)
2	学問分野の中級レベル，基礎的位置づけの科目 (主に大学2年次を想定したレベル)
3	学問分野の上級レベル，発展的・応用的位置づけの科目 (主に大学3・4年次を想定したレベル)
4	学士課程で学修する最高水準の科目 (主に4年次を想定したレベル)

- ③科目開講学部等コード 科目を開講している学部等を2桁の数字で表します。

科目開講学部等コード	科目開講学部等
01	転換・導入，教養，外国語科目
02	資格課程科目
03	SWP科目
11	経済学部
12	法学部
13	経営学部
14	商学部
15	文学部
16	ネットワーク情報学部
17	人間科学部
18	国際コミュニケーション学部

4. 専修大学のデータサイエンス教育

平成28年に発表された第5期科学技術基本計画では、人間（ホモ・サピエンス）が誕生して以降20万年間の人間社会の段階を、ソフトウェアのバージョンのアップデートに例え、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）と表現し、今後、目指すべき未来社会の姿を超スマート社会（Society 5.0）として定義しました。

Society 5.0は「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」であり、IoT（Internet of Things）でモノとモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、こ

これらの課題や困難を克服するとされています。サイバー空間では、人工知能（AI）により、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、それがフィジカル空間におけるロボットや自動運転技術などで、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題が克服されることが期待されるとされています。

フィジカル空間でのロボットなどの技術革新も必要となりますが、Society 5.0を支えるのはサイバー空間におけるビッグデータの収集と解析、解析結果のフィジカル空間へのフィードバックです。そのため、大学では所属学部 of 文系理系を問わず、必要とされる数理・データサイエンスの基礎的な素養を持つ人材から高度な技術を持つ専門的な人材まで、様々なレベルに対応した戦略的な人材育成を推進することが必要です。これらの素養や技術を用いて社会の諸課題を解決し、一人一人の人間が中心となる社会、すなわち Society 5.0を実現するという目標は、専修大学の教育目標である「社会知性の開発」にも通じるものです。

専修大学では、転換・導入科目で、データを扱う基本的な力であるデータリテラシーを身につける「**データ分析入門**」と表計算ソフトウェア等を使って統計データなどの情報を加工・分析し、分析結果などをプレゼンテーションや Web を通して表現する能力を身につける「**情報入門 1・2**」を設置しています（異文化コミュニケーション学科のみ設置の科目です。日本語学科では、これらに代えて「**日本語情報処理 1・2**」を設置しています）。また教養科目では統計学をさらに深く学ぶ「**数理科学 3 a・3 b**」を設置しています。

このように、「社会知性の開発」を目標とする専修大学の学士課程教育では、これからの新しい社会 Society 5.0に通用する力を確実につけることができる科目を設置しています。

5. 卒業要件

(1) 卒業要件

大学を卒業するためには、(1)4年以上（休学の期間を除いて8年以内）在学すること、(2)所定の授業科目の単位を修得すること、の2要件が必要です。卒業要件を充たした者は、学位記が授与され、日本語学科では「学士（文学）」、異文化コミュニケーション学科では「学士（言語文化）」の学位が与えられます。

卒業までに最低限修得しなければならない単位を**卒業要件単位**といいます。「大学設置基準」にその最低基準が示されており、大学が定める卒業要件単位を修得しなければその大学を卒業することはできません。

国際コミュニケーション学部における卒業要件単位は124単位で、詳細は次のとおりです。

《日本語学科》卒業要件単位一覧表

区 分		卒業要件単位		備 考
転換・導入科目	専修大学入門科目【必履修】		2	自由選択修得要件単位には、所定の卒業要件単位数を超えて修得した転換・導入科目、教養科目、外国語科目、専門科目、資格課程の一部の科目、全学公開科目の単位が算入されます。
	専門入門ゼミナール	2		
	キャリア基礎科目			
	基礎自然科学【必履修】			
教養科目	人文科学基礎科目	8	10	
	社会科学基礎科目			
	自然科学系科目			
	融合領域科目			
	保健体育系科目			
外国語科目	英語	4	8	
	英語以外の外国語	4		
	海外語学研修			
専門科目	基礎科目	16	72	
	基幹科目	32		
	発展科目	12		
	応用科目	12		
	関連科目			
自由選択修得要件単位		32		
卒業要件単位		124		

《異文化コミュニケーション学科》卒業要件単位一覧表

区 分		卒業要件単位		備 考
転換・導入科目	専修大学入門科目【必履修】			自由選択修得要件単位には、転換・導入科目及び外国語科目で修得した単位のほか、所定の卒業要件単位数を超えて修得した教養科目、専門科目、資格課程の一部の科目及び全学公開科目の単位が算入されます。
	データリテラシー【必履修】			
	キャリア基礎科目			
	情報リテラシー科目			
	基礎自然科学【必履修】			
教養科目	人文科学基礎科目	8	10	
	社会科学基礎科目			
	自然科学系科目			
	融合領域科目			
	保健体育系科目			
外国語科目	英語			
	英語以外の外国語			
	海外語学研修			
専門科目	基礎科目	14	88	
	基幹科目	48		
	発展科目	12		
	応用科目	14		
	関連科目			
自由選択修得要件単位		26		
卒業要件単位		124		

(2) 卒業要件単位の区分

卒業要件単位は、転換・導入科目の学修によって修得すべき「転換・導入科目修得要件単位」、教養科目の学修によって修得すべき「教養科目修得要件単位」、外国語科目の学修によって修得すべき「外国語科目修得要件単位」、専門科目の学修によって修得すべき「専門科目修得要件単位」、また科目の区分を特定せず、学生自らの学修の目的にしたがって自由に選択し、修得することができる「自由選択修得要件単位」に区分されます。

6. 卒業見込証明書発行条件

就職活動などで必要となる卒業見込証明書は、3年次までの修得単位が86単位以上であり、なおかつ卒業に必要な科目の単位を修得可能な状況であることが発行の条件です。卒業見込証明書が発行されないことで、就職活動に支障が生じる場合もありますので、履修計画を立てる際には、十分留意してください。

7. 授業科目の履修について

(1) 履修計画の立て方

みなさんは、「転換・導入科目、教養科目、外国語科目一覧」および「専門科目一覧」(pp.27~30)をよく見て、必修科目・選択必修科目および選択科目を組み合わせ、卒業要件単位の124単位を卒業までに完全に充足する必要があります。以下の点に留意して4年間の履修計画を立ててください。

- ① 必修科目を必ず修得すること。
- ② 科目の年次配当を充分考慮し、後に悔いを残さない履修をすること。
- ③ 各年次に相応の単位を修得すること。
- ④ 講義要項(シラバス)を熟読すること。

それぞれの個性と志向に応じて、4年間の大学生活全体の大枠を考えたいうえで、各年度の具体的な履修計画を立て、これに基づいてそれぞれの履修時間割を作り、履修手続をしてください。手続きを怠ると授業に出席することも、試験を受けることもできず、当然のことながら単位を修得することもできません。

4年間の履修計画とはいっても、入学当初から、上級年次にどの科目を履修するかを全て決めておくことは難しいかもしれません。学修の段階が進むにしたがって、何を選択すればよいかという判断もできるようになるからです。しかし、各年次でどのくらいずつ単位を修得していったらよいかはあらかじめ考えておく必要があります。この際、下級年次で比較的多く単位を履修し、上級年次で履修科目がなるべく少なくなるよう計画するのが賢明です。とくに4年次には卒業論文・卒業研究に取り組みながら、就職活動をするようになりますので、あまり卒業要件単位を残しておかないほうがよいでしょう。そうすることで、上級年次になってから余裕を持って広い範囲から科目を選ぶことができ、また自主的な学修を深く進めることができるようになります。

科目の選択に際しては、「Ⅲ 転換・導入科目」、「Ⅳ 教養科目」、「Ⅴ 外国語科目」、「Ⅵ 専門科目」を参考にしてください。

各科目の講義内容は、講義要項(シラバス)に示されています。講義要項(シラバス)には、講義の概要、講義計画、準備学習・事後学習について、使用される教科書、成績評価の方法・基準などが書かれています。履修する科目については、必ず講義要項(シラバス)を読んで内容を確認しておいてください。履修科目を選ぶ際には、講義要項(シラバス)が重要な情報源となります。講義要項(シラバス)は、Web上で公開されています。閲覧するには、専修大学ホームページ内の「Web 講義要項(シラバス)」を選択して検索してください。

(2) 専門科目履修上の注意

卒業要件単位を超えて修得した選択必修科目および選択科目の単位は、自由選択修得要件単位として算入されます。

(3) 各年次における履修上限単位数

各年次における履修上限単位数

	日本語学科	異文化コミュニケーション学科
1年次	44単位	44単位
2年次	44単位	40単位
3年次	44単位	44単位
4年次	48単位	48単位

各年次における履修上限単位数は上記のとおりです（資格試験により認定される科目、資格課程科目、海外語学短期研修1・2の単位は除く）。前年度の履修上限単位の中で修得できなかった単位を、翌年度に持ち越して履修することはできません。

つまり、2年次終了時に32単位未満、3年次終了時に76単位未満しか単位を修得していない場合は、必然的にその後の学年で履修上限単位を修得しても、4年間で卒業することができません。

さらに、3年次以降は、授業内容の専門性がより高まり、学修に必要な時間が増加したり、就職活動等に費やす時間も必要になったりするため、上限単位まで履修しても全ての単位を修得することが難しい場合もあります。

また、履修上限単位数には、再履修する科目も含まれることになります。このため、1・2年次の時から、計画的に単位を修得していくことが必要となります。

(4) オンライン授業による修得単位の上限について

令和2年度から続くコロナ禍において、本学を含む多くの大学では、インターネット等を介して教室以外の場所でも授業を受講することができる「オンライン授業」が取り入れられ、普及してきました。

本学では、卒業の要件として修得すべき単位数のうち、オンライン授業とする授業科目（総授業回数の半数以上をオンラインで行う授業科目）から修得することができる単位数の上限を、専修大学学則（第5条の4第2項）において60単位と定めています。

各授業科目の授業運営方法（対面・オンライン）は、講義要項（シラバス）などに掲載しますが、ガイダンスでのお知らせや、年度ごとに配布する時間割などの資料を確認のうえ、各自でこの上限単位数を踏まえた学修計画を立ててください。

(5) 科目の再履修とは

配当の年次が指定された科目の単位は、配当された年次で必ず修得するようにしなければなりません。万が一やむを得ない理由で必修科目および選択必修科目の単位を修得できなかった場合には、原則として次の年次にそれらの科目を再履修することになります。もちろん、次の年次に進級すると、その年次に配当されている必修科目や選択必修科目があり、それらと再履修科目が時間割の上で重複し、両方を同時に履修できない場合があります。もし、そのような場合は、まず**再履修科目を優先して履修しなければなりません**。したがって、必修科目や選択必修科目の再履修は極力さけるように努力することが求められます。不明な点は、教務課の窓口にお問い合わせください。

(6) 履修登録について

- 1) 履修科目の登録は、みなさんが考えた履修計画に基づいて、その年度の授業科目の単位を修得する意思を表示する手段になります。みなさんはこの学修ガイドブックや年度初めに行われるガイダンスを参考に、その年度に履修する科目を前期・後期それぞれ定められた期日までに登録することが必要になります。これを本学では履修登録といいます。
- 2) 所定の期日までに履修科目の登録を行わなかった場合、その年度の履修は認められませんので、単位修得はできないことになります。
- 3) 履修登録期間以降の変更は原則として認められませんので、十分に検討して登録してください。
- 4) 各年次の授業時間割はガイダンス期間に配付・公開します。ガイダンスでは、重要事項の説明、各種登録、届出等があるので、欠席しないようにしてください。やむを得ず欠席する場合は、教務課窓口へ届け出てください。
- 5) 科目によっては、履修者数の制限をすることがあります。対象科目、方法等については、ガイダンスまたは in Campus でお知らせします。その他の科目でも、初回授業時に選抜（抽選）や履修制限を行う場合もあるので、必ずガイダンスで説明を受け、履修を希望する科目の初回授業に出席してください。
- 6) ゼミナールは、履修する前の年の10月下旬にテーマ、募集人員、選考方法などについてのガイダンスが実施され、その後担当教員による選考が行われ、履修者が内定します。この時期のお知らせに注意してください。

その他の注意事項

- 7) 同一曜日・同一時限においては、1科目しか登録できません。ただし、前期科目、後期科目のように期間の異なるものは、この限りではありません。
- 8) 前年度までに単位を修得した科目は、指定された科目を除いて再度履修することはできません。
- 9) 学年・学科・クラスが指定されている場合は、それに従って科目を履修しなければなりません。
- 10) 同じ名称をもつ科目は、指定された特定の科目を除いて2つ以上は履修できません。
- 11) 必修科目は、指定された年次で必ず履修しなければなりません。なお、当該年度に修得できなかった場合は、原則として、翌年度再履修しなければなりません。
- 12) 履修を継続する意思のない授業科目が生じた場合に、履修中止申請期間内に所定の申請手続きを行うことにより、当該授業科目の履修を中止することができます。（一部の科目を除く）

国際コミュニケーション学部日本語学科 転換・導入科目、教養科目、外国語科目一覧

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区 分	1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	卒業要件単位	備 考								
転換・導入科目	専修大学入門科目	専修大学入門ゼミナール ▲				2	・卒業要件単位2単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。							
	専門入門ゼミナール	専門入門ゼミナール ○												
	キャリア基礎科目	キャリア入門 △												
	基礎自然科学	あなたと自然科学 ▲												
教 養 科 目	人文科学基礎科目	歴史の視点 △ 倫理学 △ 基礎心理学入門 △ 応用心理学入門 △ 哲学 △	ジャーナリズムと現代 △			8	・卒業要件単位10単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・テーマ科目は、科目名の括弧内に示す表記が異なる場合は、それぞれ履修することができます（同一年度での複数履修も可能）。 ・教養テーマゼミナール論文は、教養テーマゼミナールの単位を修得し、次年度以降に同一教員の教養テーマゼミナールを履修する場合に作成（履修）することができます。 ・アドバンストスポーツは、スポーツライブラリーとスポーツウェルネスの単位を修得しなければ、履修することができません。 ・アドバンストスポーツは、種目にかかわらず、複数履修することができます。							
	社会科学基礎科目	日本国憲法 △ 法と社会 △ 政治学入門 △ 政治の世界 △ 経済と社会 △ 現代の経済 △	地理学への招待 △ 社会学入門 △ 現代の社会学 △ 社会学論 △ 社会学思想 △ 教育学入門 △	子どもと社会の教育学 △ 情報社会 △ はじめての経営 △ マーケティングベーシック △ 企業と会計 △										
	自然科学系科目	生物科学 1 a △ 生物科学 1 b △ 生物科学 2 a △ 生物科学 2 b △ 生物科学 3 a △ 生物科学 3 b △	宇宙地球科学 1 a △ 宇宙地球科学 1 b △ 宇宙地球科学 2 a △ 宇宙地球科学 2 b △ 化学 1 a △ 化学 1 b △	化学 2 a △ 化学 2 b △ 物理学 1 a △ 物理学 1 b △ 物理学 2 a △ 物理学 2 b △ 数学科学 1 a △ 数学科学 1 b △ 数学科学 2 a △ 数学科学 2 b △ 数学科学 3 a △ 数学科学 3 b △	科学論 1 a △ 科学論 1 b △ 科学論 2 a △ 科学論 2 b △									
	融合領域科目		学際科目 1 △ 学際科目 2 △ 学際科目 3 △ 学際科目 4 △	学際科目 5 △ 学際科目 6 △ 学際科目 7 △ 学際科目 8 △	学際科目 9 △ 学際科目 10 △ 学際科目 11 (4) △ 学際科目 12 (4) △			10						
			テーマ科目 △											
			新領域科目 1 △ 新領域科目 2 △	新領域科目 3 △ 新領域科目 4 △ 新領域科目 5 △										
			キャリア科目 1 △ キャリア科目 2 △											
			教養テーマゼミナール 1 (4) △	教養テーマゼミナール 2 (4) △	教養テーマゼミナール 3 (4) △									
				教養テーマゼミナール論文 △										
	保健体育系科目	スポーツリテラシー (1) ○ ◎	スポーツウェルネス (1) ○ ◎					2						
		アドバンストスポーツ ○	スポーツ論 (スポーツライフデザイン論) ○	スポーツ論 (人類とスポーツ) ○										
		スポーツ論 (健康と生涯スポーツ) ○	スポーツ論 (人間とスポーツ) ○	スポーツ論 (トレーニング科学) ○										
		スポーツ論 (スポーツコーチング) ○												
英 語	A 群	Basics of English (RL) 1a (1) ○ ◎ Basics of English (RL) 1b (1) ○ ◎ または Intermediate English (RL) 1a (1) ○ ◎ Intermediate English (RL) 1b (1) ○ ◎				4	・General Englishは、英語「A・B群」の単位を修得できなかった場合に履修する科目です。							
	B 群	Basics of English (SW) 1a (1) ○ ◎ Basics of English (SW) 1b (1) ○ ◎ または Intermediate English (SW) 1a (1) ○ ◎ Intermediate English (SW) 1b (1) ○ ◎												
		General English (1) ○ ◎												
		English Speaking a (1) △ English Speaking b (1) △	Computer Aided Instruction a (1) △ Computer Aided Instruction b (1) △	Computer Aided Instruction for TOEIC a (1) △ Computer Aided Instruction for TOEIC b (1) △										
		Advanced English a △ Advanced English b △ English Language and Cultures a △ English Language and Cultures b △	English Presentation a △ English Presentation b △ English Writing a △ English Writing b △	Screen English a △ Screen English b △		・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・English Speaking a・b, Advanced English a・b, English Language and Cultures a・bは、各科目4単位まで修得することができます。								
外 国 語 科 目	導 入	ドイツ語初級 1 a (1) ○ ◎ ドイツ語初級 1 b (1) ○ ◎ ドイツ語初級 2 a (1) ○ ◎ ドイツ語初級 2 b (1) ○ ◎ フランス語初級 1 a (1) ○ ◎ フランス語初級 1 b (1) ○ ◎ フランス語初級 2 a (1) ○ ◎ フランス語初級 2 b (1) ○ ◎ 中国語初級 1 a (1) ○ ◎ 中国語初級 1 b (1) ○ ◎ 中国語初級 2 a (1) ○ ◎ 中国語初級 2 b (1) ○ ◎ スペイン語初級 1 a (1) ○ ◎ スペイン語初級 1 b (1) ○ ◎ スペイン語初級 2 a (1) ○ ◎ スペイン語初級 2 b (1) ○ ◎ ロシア語初級 1 a (1) ○ ◎ ロシア語初級 1 b (1) ○ ◎ ロシア語初級 2 a (1) ○ ◎ ロシア語初級 2 b (1) ○ ◎ インドネシア語初級 1 a (1) ○ ◎ インドネシア語初級 1 b (1) ○ ◎ インドネシア語初級 2 a (1) ○ ◎ インドネシア語初級 2 b (1) ○ ◎ コリア語初級 1 a (1) ○ ◎ コリア語初級 1 b (1) ○ ◎ コリア語初級 2 a (1) ○ ◎ コリア語初級 2 b (1) ○ ◎				4	・1年次で英語以外の外国語「導入」から同一言語の初級1 a・bと初級2 a・bを履修しなければなりません。 ・同一言語の科目をすべて（4科目4単位）履修している、あるいは履修している場合、他の言語を履修することはできません。							
		英語以外の外国語	基礎	ドイツ語中級 1 a (1) △ ドイツ語中級 1 b (1) △ ドイツ語中級 2 a (1) △ ドイツ語中級 2 b (1) △ フランス語中級 1 a (1) △ フランス語中級 1 b (1) △ フランス語中級 2 a (1) △ フランス語中級 2 b (1) △	中国語中級 1 a (1) △ 中国語中級 1 b (1) △ 中国語中級 2 a (1) △ 中国語中級 2 b (1) △			ロシア語中級 1 a (1) △ ロシア語中級 1 b (1) △ ロシア語中級 2 a (1) △ ロシア語中級 2 b (1) △	コリア語中級 1 a (1) △ コリア語中級 1 b (1) △ コリア語中級 2 a (1) △ コリア語中級 2 b (1) △	8	・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・「基礎」の各科目は、2単位まで修得することができます。ただし、同一年度に同一科目を履修することはできません。 ・「応用」の各科目は、同一年度に2単位、有効を越えてさらに2単位履修することができます。合計4単位まで修得することができます。			
			応用	ドイツ語上級 1 a (1) △ ドイツ語上級 1 b (1) △ フランス語上級 1 a (1) △ フランス語上級 1 b (1) △ 中国語上級 1 a (1) △ 中国語上級 1 b (1) △ スペイン語上級 1 a (1) △ スペイン語上級 1 b (1) △				ロシア語上級 1 a (1) △ ロシア語上級 1 b (1) △ インドネシア語上級 1 a (1) △ インドネシア語上級 1 b (1) △ コリア語上級 1 a (1) △ コリア語上級 1 b (1) △						
				選択ドイツ語 1 a (1) △ 選択ドイツ語 1 b (1) △ 選択フランス語 1 a (1) △ 選択フランス語 1 b (1) △ 選択中国語 1 a (1) △ 選択中国語 1 b (1) △	選択スペイン語 1 a (1) △ 選択スペイン語 1 b (1) △ 選択コリア語 1 a (1) △ 選択コリア語 1 b (1) △ 選択アラビア語 1 a (1) △ 選択アラビア語 1 b (1) △			選択イタリア語 1 a (1) △ 選択イタリア語 1 b (1) △						
				世界の言語と文化 (ドイツ語) △	世界の言語と文化 (中国語) △			世界の言語と文化 (ロシア語) △	世界の言語と文化 (コリア語) △					
				世界の言語と文化 (フランス語) △	世界の言語と文化 (スペイン語) △			世界の言語と文化 (インドネシア語) △						
				言語文化研究 (ヨーロッパ) 1 △ 言語文化研究 (ヨーロッパ) 2 △	言語文化研究 (アジア) 1 △ 言語文化研究 (アジア) 2 △			言語文化研究 (アメリカ) △						
			海外語学研修	海外語学短期研修 1 (外国語) △	海外語学短期研修 2 (外国語) △								2	・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・海外語学短期研修は、夏期留学プログラムを修了した場合に短期研修1に、春期留学プログラムを修了した場合に短期研修2に認定されます。 ・海外語学中期研修は、中期留学プログラムを修了した場合に認定されます。
					海外語学中期研修 1 (外国語) △ 海外語学中期研修 2 (外国語) △ 海外語学中期研修 3 (外国語) △			海外語学中期研修 4 (外国語) △ 海外語学中期研修 5 (外国語) △ 海外語学中期研修 6 (外国語) △	海外語学中期研修 7 (外国語) △ 海外語学中期研修 8 (外国語) △					

国際コミュニケーション学部日本語学科 専門科目一覧

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区 分	1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	卒業要件単位	備 考	
基礎科目	日本文化入門 [○] 日本語学入門1 [○] 日本語学入門2 [○] 日本語学総合 [○] 日本語情報処理1 [○] 日本語情報処理2 [○]				12		
	異文化理解の実践 [△] メディア日本語論1 [△] メディア日本語論2 [△] 日本語表現論1 [△] 日本語表現論2 [△] 言語学概論 [△]				4		・卒業要件単位4単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
基幹科目		ゼミナール1 [○] ゼミナール2 [○]			4		
	文化とコミュニケーション1 [△] 文化とコミュニケーション2 [△] 日本語の歴史的研究1 [△] 日本語の歴史的研究2 [△]	日本語の社会的研究1 [△] 日本語の社会的研究2 [△]			32		・卒業要件単位28単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
	日本語教授法A-1 [△] 日本語教授法A-2 [△]				28		
		日本語の音声1 [△] 日本語の音声2 [△] 日本語の音韻・表記1 [△] 日本語の音韻・表記2 [△] 日本語の語彙・意味1 [△] 日本語の語彙・意味2 [△]	日本語の文法1 [△] 日本語の文法2 [△] 現代日本語の研究1 [△] 現代日本語の研究2 [△] 日本語教材研究1 [△] 日本語教材研究2 [△]	日本語の文法1 [△] 日本語の文法2 [△] 現代日本語の研究1 [△] 現代日本語の研究2 [△] 日本語教材研究1 [△] 日本語教材研究2 [△]	日本語の文献研究1 [△] 日本語の文献研究2 [△] 日本語統計・情報処理 [△] コーパス日本語学1 [△] コーパス日本語学2 [△]		
発展科目			ゼミナール3 [○] ゼミナール4 [○]		4		
		社会言語学1 [△] 社会言語学2 [△] 日本語の語用論1 [△] 日本語の語用論2 [△] 対照言語学 [△] 学習文法研究1 [△] 学習文法研究2 [△]	第二言語習得研究1 [△] 第二言語習得研究2 [△] 日本語習得政策史1 [△] 日本語習得政策史2 [△]		12		・卒業要件単位8単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
			日本語教育実習A (4) [△] 日本語教授法B-1 [△] 日本語教授法B-2 [△]		8		
応用科目				ゼミナール5 [○] ゼミナール6 [○] 卒業論文 (8) [○]	12		
		日本語教育実習C [△] 日本語学応用実習 (1) [△]			12		・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
関連科目	中国文学講義1 [△] 中国文学講義2 [△]						
	日本文学概論 (古典) 1 [△] 日本文学概論 (古典) 2 [△]	日本文学概論 (近現代) 1 [△] 日本文学概論 (近現代) 2 [△]	書道1 [△] 書道2 [△]				・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
		地域研究 (北米) [△] 地域研究 (ラテンアメリカ) [△] 地域研究 (ヨーロッパ) [△] 地域研究 (アジア) [△] 地域研究 (中国) [△]	文化の衝突と融合 [△] 移動と交流の文化史 [△] 比較文化 [△] 宗教と文化 [△] 思想と文化 [△]	多文化共生論 [△]			
			越境する文化 [△] 環境と文化 [△] 資源としての文化 [△] 現代社会と多様性 [△] 植民地と現代世界 [△] 現代文化論 [△]	国際政治の基礎 [△] 国際関係論I [△] 国際関係論II [△] ビジネス英語A [△] ビジネス英語B [△]			
自由選択修得要件単位	自由選択修得要件単位には、所定の卒業要件単位を超えて修得した転換・導入科目、教養科目、外国語科目、専門科目、資格課程の一部の科目、全学公開科目の単位が算入されます。				32		
総 計						124	
年間履修上限単位	44	44	44	48			

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 転換・導入科目、教養科目、外国語科目一覧

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区分	1年次	2年次	3年次	4年次	卒業要件単位	備考		
転換・導入科目	専修大学入門科目	専修大学入門ゼミナール【▲】				・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。		
	データリテラシー	データ分析入門【▲】						
	キャリア基礎科目	キャリア入門【△】						
	情報リテラシー科目	情報入門1【△】 情報入門2【△】						
教養科目	基礎自然科学	あなたと自然科学【▲】				・卒業要件単位10単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・テーマ科目は、科目名の括弧内に示す表記が異なれば、それぞれ履修することができます。（同一年度での複数履修も可能）。 ・教養テーマゼミナール論文は、教養テーマゼミナールの単位を修得し、次年度以降に同一教員の教養テーマゼミナールを履修する場合に作成（履修）することができます。 ・アドバンストスポーツは、スポーツリテラシーとスポーツウェルネスの単位を修得していなければ、履修することができません。 ・アドバンストスポーツは、種目にかかわらず、複数履修することができます。		
	人文科学基礎科目	日本の文学【△】 歴史の視点【△】 専業主権学入門【△】 応用心理学入門【△】	哲学【△】 倫理学【△】 論理学入門【△】 ことばと論理【△】	芸術学入門【△】 ジャーナリズムと現代【△】				
	社会科学基礎科目	日本国憲法【△】 法と社会【△】 政治の世界【△】 経済と社会【△】 現代の経済【△】	地理学への招待【△】 社会学入門【△】 現代の社会学【△】 社会学論【△】 社会思想【△】 教育学入門【△】	子どもと社会の教育学【△】 情報社会【△】 はじめての経営【△】 マーケティングベーシック【△】 企業と会計【△】				
	自然科学系科目	生物科学1 a【△】 生物科学1 b【△】 生物科学2 a【△】 生物科学2 b【△】 生物科学3 a【△】 生物科学3 b【△】	宇宙地球科学1 a【△】 宇宙地球科学1 b【△】 宇宙地球科学2 a【△】 宇宙地球科学2 b【△】 化学1 a【△】 化学1 b【△】	化学2 a【△】 化学2 b【△】 物理学1 a【△】 物理学1 b【△】 物理学2 a【△】 物理学2 b【△】	数理学1 a【△】 数理学1 b【△】 数理学2 a【△】 数理学2 b【△】 数理学3 a【△】 数理学3 b【△】		科学論1 a【△】 科学論1 b【△】 科学論2 a【△】 科学論2 b【△】	
	融合領域科目		学際科目1【△】 学際科目2【△】 学際科目3【△】 学際科目4【△】	学際科目5【△】 学際科目6【△】 学際科目7【△】 学際科目8【△】	学際科目9【△】 学際科目10【△】 学際科目11【△】(4) 学際科目12【△】(4)			
			テーマ科目【△】					
			新領域科目1【△】 新領域科目2【△】	新領域科目3【△】 新領域科目4【△】	新領域科目5【△】			
			キャリア科目1【△】	キャリア科目2【△】				
			教養テーマゼミナール1【△】(4)	教養テーマゼミナール2【△】(4)	教養テーマゼミナール3【△】(4)			
				教養テーマゼミナール論文【△】				
保健体育系科目	スポーツリテラシー (I)【◎】	スポーツウェルネス (I)【◎】			2	アドバンストスポーツ【◎】 スポーツ論（健康と生涯スポーツ）【◎】 スポーツ論（オリンピックとスポーツ）【◎】 スポーツ論（人類とスポーツ）【◎】		
			アドバンストスポーツ【◎】	スポーツ論（スポーツライフデザイン論）【◎】 スポーツ論（トレーニング科学）【◎】 スポーツ論（スポーツコーチング）【◎】				
外国語科目	英語		Advanced English a【△】 Advanced English b【△】	English Language and Cultures a【△】 English Language and Cultures b【△】		・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・Advanced English a・b、English Language and Cultures a・bは、各科目4単位まで修得することができます。 ・海外語学短期研修は、夏期留学プログラムを修了した場合に短期研修1に、春期留学プログラムを修了した場合に短期研修2に認定されます。 ・海外語学中期研修は、中期留学プログラムを修了した場合に認定されます。		
	英語以外の外国語	導入	ロシア語初級1 a (I)【△】 ロシア語初級1 b (I)【△】 ロシア語初級2 a (I)【△】 ロシア語初級2 b (I)【△】 インドネシア語初級1 a (I)【△】 インドネシア語初級1 b (I)【△】 インドネシア語初級2 a (I)【△】 インドネシア語初級2 b (I)【△】	選択ドイツ語1 a (I)【△】 選択ドイツ語1 b (I)【△】 選択フランス語1 a (I)【△】 選択フランス語1 b (I)【△】 選択中国語1 a (I)【△】 選択中国語1 b (I)【△】	選択スペイン語1 a (I)【△】 選択スペイン語1 b (I)【△】 選択イタリア語1 a (I)【△】 選択イタリア語1 b (I)【△】		選択イタリア語1 a (I)【△】 選択イタリア語1 b (I)【△】	
				選択ドイツ語1 a (I)【△】 選択ドイツ語1 b (I)【△】 選択フランス語1 a (I)【△】 選択フランス語1 b (I)【△】 選択中国語1 a (I)【△】 選択中国語1 b (I)【△】	選択スペイン語1 a (I)【△】 選択スペイン語1 b (I)【△】 選択イタリア語1 a (I)【△】 選択イタリア語1 b (I)【△】		選択イタリア語1 a (I)【△】 選択イタリア語1 b (I)【△】	
	海外語学研修	海外語学短期研修1 (外国語)【△】	海外語学短期研修2 (外国語)【△】		海外語学中期研修7 (外国語)【△】 海外語学中期研修8 (外国語)【△】			

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 専門科目一覽

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区 分	1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	卒業要件単位	備 考	
基礎科目	日本文化入門 [○] 日本語入門 [○] 異文化理解の実践 [▲]				4	卒業要件単位14単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。	
	Readings in Liberal Arts 1 (1) [○] Readings in Liberal Arts 2 (1) [○] Writing with Clarity 1 (1) [○] Writing with Clarity 2 (1) [○] Cross-Cultural Studies (1) [○]				5		
	ドイツ語基礎 A (1) [○] スペイン語基礎 A (1) [○] ドイツ語基礎 B (1) [○] スペイン語基礎 B (1) [○] ドイツ語基礎 C (1) [○] スペイン語基礎 C (1) [○] ドイツ語基礎 D (1) [○] スペイン語基礎 D (1) [○] ドイツ語基礎 E (1) [○] スペイン語基礎 E (1) [○] フランス語基礎 A (1) [○] コリア語基礎 A (1) [○] フランス語基礎 B (1) [○] コリア語基礎 B (1) [○] フランス語基礎 C (1) [○] コリア語基礎 C (1) [○] フランス語基礎 D (1) [○] コリア語基礎 D (1) [○] フランス語基礎 E (1) [○] コリア語基礎 E (1) [○] 中国語基礎 A (1) [○] 中国語基礎 B (1) [○] 中国語基礎 C (1) [○] 中国語基礎 D (1) [○] 中国語基礎 E (1) [○]				5		
	Academic Skills (1) [○] Talking Tasks 1 (1) [○] Talking Tasks 2 (1) [○] ドイツ語コミュニケーション A (1) [○] ドイツ語コミュニケーション B (1) [○] ドイツ語コミュニケーション C (1) [○] フランス語コミュニケーション A (1) [○] フランス語コミュニケーション B (1) [○] フランス語コミュニケーション C (1) [○] 中国語コミュニケーション A (1) [○] 中国語コミュニケーション B (1) [○] 中国語コミュニケーション C (1) [○] スペイン語コミュニケーション A (1) [○] スペイン語コミュニケーション B (1) [○] スペイン語コミュニケーション C (1) [○] コリア語コミュニケーション A (1) [○] コリア語コミュニケーション B (1) [○] コリア語コミュニケーション C (1) [○]						14
専門科目	世界の文化を知る (北米) [△] 文化研究の視点 [△] 世界の文化を知る (ラテンアメリカ) [△] ことば・身体・映像 [△] 世界の文化を知る (ヨーロッパ) [△] 世界の文化を知る (アジア) [△]				6	卒業要件単位6単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。	
		異文化交流ワークショップ [○]	ゼミナール1 [○] ゼミナール2 [○]	ゼミナール3 [○] ゼミナール4 [○] 卒業研究 (8) [○]	18		
		海外研修 (リーディング) [△] 海外研修 (リスニング) [△] 海外研修 (ライティング) [△] 海外研修 (スピーキング) [△] 海外研修 (リサーチ) [△] 海外研修 (プレゼンテーション) [△] 海外研修 (ディスカッション) [△] 海外研修 (異文化理解) [△]					48
		Big Reading for Speed [△] ドイツ語総合 A [△] フランス語実践 A [△] スペイン語総合 A [△] コリア語実践 A [△] Critical Reading [△] ドイツ語総合 B [△] フランス語実践 B [△] スペイン語総合 B [△] コリア語実践 B [△] Verbal Communication [△] ドイツ語実践 A [△] 中国語総合 A [△] スペイン語実践 A [△] Talking Points [△] ドイツ語実践 B [△] 中国語総合 B [△] スペイン語実践 B [△] Presentation & Research [△] フランス語総合 A [△] 中国語実践 A [△] コリア語総合 A [△] Critical Writing [△] フランス語総合 B [△] 中国語実践 B [△] コリア語総合 B [△]					24
			Topics in English A [△] 中国語表現 A [△] Topics in English B [△] 中国語表現 B [△] ドイツ語表現 A [△] スペイン語表現 A [△] ドイツ語表現 B [△] スペイン語表現 B [△] フランス語表現 A [△] コリア語表現 A [△] フランス語表現 B [△] コリア語表現 B [△]				
発展科目	地域研究 (北米) [△] 地域研究 (ヨーロッパ) [△] 地域研究 (中国) [△] 地域研究 (ラテンアメリカ) [△] 地域研究 (アジア) [△]				2	発展科目の各区分から2単位を修得したうえで、合計12単位を修得しなければなりません。 発展科目の卒業要件単位12単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。	
	文化の衝突と融合 [△] 比較文化 [△] 思想と文化 [△] 移動と交流の文化史 [△] 宗教と文化 [△] 多文化共生論 [△]				2		
	ことばのしくみ [△] 身体とコミュニケーション [△] ことばの習得 [△] 映像とコミュニケーション [△]				2		
応用科目			テーマ研究 (北米) [△] テーマ研究 (イギリス) [△] テーマ研究 (ラテンアメリカ) [△] テーマ研究 (アジア) [△] テーマ研究 (西ヨーロッパ) [△] テーマ研究 (中国) [△] テーマ研究 (中東欧・ロシア) [△]		2	応用科目の各区分から2単位を修得したうえで、応用科目と関連科目から合計14単位を修得しなければなりません。 応用科目と発展科目の卒業要件単位14単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。	
			越境する文化 [△] 現代社会と多様性 [△] 環境と文化 [△] 植民地と現代世界 [△] 資源としての文化 [△] 現代文化論 [△]		2		
			ことばと心 [△] 身体文化論 [△] ことばと社会 [△] 映像文化論 [△] メディア文化論 [△]		2		
関連科目			身体系特殊講義 [△] メディア日本語論 2 [△] 国際政治の基礎 [△] 映像音楽系特殊講義 [△] 日本語表現論 1 [△] 国際関係論 I [△] チェコ語 1 [△] 日本語表現論 2 [△] 国際関係論 II [△] チェコ語 2 [△] 日本語教授法 A-1 [△] ビジネス英語 A [△] ベトナム語 1 [△] 日本語教授法 A-2 [△] ビジネス英語 B [△] ベトナム語 2 [△] 日本語言語政策史 1 [△] メディア日本語論 1 [△] 日本語言語政策史 2 [△]				
自由選択修得要件単位	自由選択修得要件単位には、転換・導入科目及び外国語科目で修得した単位のほか、所定の卒業要件単位数を超えて修得した教養科目、専門科目、資格課程の一部の科目及び全学公開科目の単位が算入されます。				26		
	総 計				124		
年間履修上限単位	44	40	44	48			

8. 全学公開科目

(1) 全学公開科目とは

みなさんの多様な履修要求に応じて、他学部で開講されている専門科目を卒業要件単位として履修できるようにする「学部間相互履修制度」が設けられています。この制度で履修できる科目が「全学公開科目」です。

(2) 公開される科目

各学部で開講するすべての専門科目が公開されるわけではありません。どの科目を「全学公開科目」とするか、何年次に担当するかは科目を開講している各学部で定めます。

卒業するまでにどのような科目が履修できるかは、専修大学ホームページでお知らせします。

ただし、「学部間相互履修制度」は他学部の専門科目を履修する際に適用される制度であり、国際コミュニケーション学部で開講される専門科目については、公開されている科目であっても「専門科目一覧」（日本語学科 p.28, 異文化コミュニケーション学科 p.30）に記載されていなければ履修できません。

(3) 講義内容

「全学公開科目」の講義内容は、講義要項（シラバス）に示されています。講義要項（シラバス）には、講義の概要、講義計画、使用される教科書、成績評価の方法・基準などが書かれています。講義要項（シラバス）は、ホームページに公開されています。閲覧する方法は、「7.（1）履修計画の立て方」（p.24）を参照してください。

(4) 履修手続

「全学公開科目」は、公開している学部での履修に支障をきたさないよう、履修者数の制限を行うことがあります。このため、履修を希望する学生は、その科目担当者の履修許可を得なければならないことになっています。

履修手続・選考等の詳細は、ガイダンスやホームページでお知らせします。

(5) 単位の取扱い

「全学公開科目」を履修して修得した単位は、卒業要件単位のうち自由選択修得要件単位として算入されます。

9. 試験について

試験は、日常の学修成果を問うものです。したがって試験には厳正な態度で臨まなければなりません。遅刻はもちろんのこと、自己の健康管理を怠り欠席することのないよう注意しなければなりません。定期試験は、「専修大学定期試験規程」(pp.119～122)に基づいて実施されますので、規程を熟知し、さらに次の事項についても十分理解しておいてください。

(1) 定期試験の種類

1) 前期試験

前期のみの半期授業科目について7月から8月の間に実施します。

2) 後期試験

後期のみの半期授業科目及び通年の授業科目について1月から2月の間に実施します。

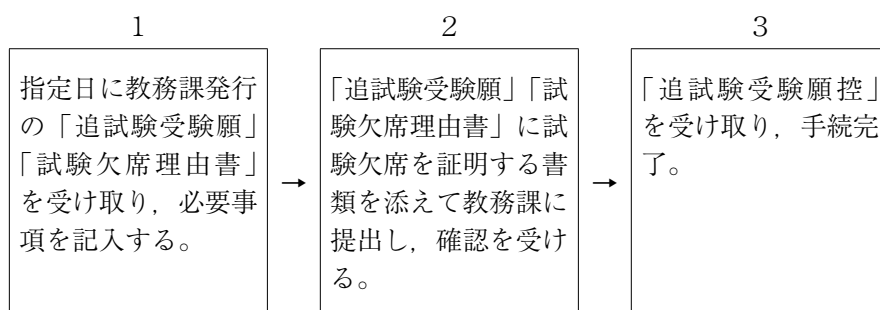
3) 追試験

前期試験または後期試験をやむを得ない理由で受験できなかった場合、当該授業科目について前期追試験を8月、後期追試験を2月に実施します。なお、本学では、「やむを得ない理由」が拡大解釈されることのないよう、厳しい基準を設けています。医師の診察を要しない程度の病気や寝坊による遅刻等は、「やむを得ない理由」とはみなされませんので注意してください。

① 追試験受験手続

追試験の受験希望者は、指定された期間に追試験受験願と試験欠席理由を証明する書類を教務課(国際コミュニケーション学部)に提出し、受験許可を得なければなりません。

<追試験受験手続の手順>



② やむを得ないと認める試験欠席理由および提出しなければならない書類は、次のとおりです。

- ・教育実習……………教育実習参加を証明するもの
- ・就職試験……………就職試験受験を証明するもの
- ・公式試合……………公式試合参加を証明するもの
- ・天災その他の災害……………被災を証明するもの
- ・二親等以内の危篤又は死亡……………危篤又は死亡を証明するもの
- ・本人の病気又は怪我……………医師の診断書
- ・交通機関の事故……………遅延又は事故を証明するもの
- ・その他当該学部長が

やむを得ない理由と認めた事項……………学部長の承認を得た本人記載の理由書

(2) 受験上の注意

受験上の注意については、定期試験規程にも定められていますが、さらに次の点にも十分注意を払う必要があります。

- ① 同じ名称の授業科目がいくつも開講されている場合があるので、自分の履修登録した科目の授業曜日・時限および担当者を試験時間割で確認し、間違いのないようにすること。
- ② 同一科目でも、試験教室が複数に分かれている場合が多いので十分注意すること。
- ③ 試験監督から配布された答案用紙以外の用紙を使用しないこと。
- ④ 答案用紙の再交付は行わない。
- ⑤ 試験教室内での私語は、不正行為とみなされるので絶対にしないこと。また、廊下等での私語は、受験中の学生の迷惑となるので慎むこと。

【注意】

定期試験規程により、学生証不携帯者は定期試験を受験できません。

ただし、当該試験開始時刻までに学生証臨時発行所に申し出た場合は、当日のみ有効の「臨時学生証」の交付を受けて受験することができます。また、試験開始時刻前に試験教室で学生証不携帯に気づいた場合は、所定の手続きをすることにより臨時学生証の交付を認めることがあります。

試験当日は、不測の事態に備えて試験開始30分前には登校し、学生証の携帯と試験教室を必ず確認してください。

なお、臨時学生証の交付を受けた場合も、受験が認められるのは、試験開始後20分までに試験教室に到着した場合です。

(3) 試験時間割

試験時間は、授業時間とは異なり、原則として60分です。試験時間割は、試験実施前に in Campus でお知らせします。

(4) 定期試験規程に定められた筆記試験によらない成績評価

実技や演習を主とする授業については、一般に平常点、口頭試問、レポート等をもって成績評価が行われるため、前期試験、後期試験は実施されず、したがって追試験も実施されません。

これら平常点で評価される科目の場合、各科目の授業期間を通しての、授業への貢献度や授業での発表内容、レポート、授業の中で実施されるテスト等 **注** によって総合的に成績評価が行われます。

注1 授業の中で実施されるテストは、期末テスト、授業内テスト、中間テスト、小テスト等と呼ばれ、定期試験規程に定められた試験ではないため、追試験は実施されません。

注2 ただし、授業期間の最終週に実施されるテストの中には、担当教員の判断によって定期試験規程を準用して実施するものもあります（「定期試験規程準用試験」）。この場合は、定期試験と同様の手続きを経て、追試験を受験することができます。

(5) レポートについて

レポート提出が課せられた場合は、テーマ・枚数・提出期限および提出先（担当教員または教務課）等を確認し、指定された期限までに提出してください。

レポートを提出する際は、次の事項に留意してください。

- ① 特に指示のない場合、A4の用紙を使用し、横書きとします。
- ② 装丁は、必ず表紙をつけて袋とじとします。

※提出先が教務課になっている場合は、1号館地下1階の購買会で販売している表紙をつけてください。

- ③ 表紙には必ず授業曜日・時限、授業科目名、授業担当者名、学籍番号および氏名を記入してください。

10. 卒業論文・卒業研究

(1) 卒業論文

日本語学科の学生は卒業論文が必修科目になっています。卒業論文は4年次で提出し、その審査に合格しなければなりません。卒業論文は、専門的かつ自主的な研究の中核であり、指導教員の指導を受け、その指導による学修の成果として提出するものです。

1) 論文提出

提出締切日は12月中旬頃です。日時・場所など詳細についてはin Campusで発表します。余裕のもてる時期から意識して確認し、期限を厳守しなくてはなりません。

2) 論文の規格

規格・様式等が定められているので、詳細については学科の指示に従ってください。

3) 提出時に携行すべきもの

学生証、卒業論文題目届（題目届、論文の題目及び中表紙は完全に一致していることが必要です。）

4) 口述試験

1月中旬～1月下旬

欠席すると単位は与えられません。この期間はスケジュールを空けておくことが必要です。

(2) 卒業研究

異文化コミュニケーション学科の学生は4年次に「卒業研究」を履修し、その成果を提出しなくてはなりません。「卒業研究」は、指導教員のもと、各自の4年間の学修・研究の成果をまとめるものであり、それぞれの成果にふさわしい形式に対応できるようにしています。詳しくはp.90の「6)ゼミナール」および「7)卒業研究」を参照してください。

11. 成績評価と通知

(1) 成績評価の方法について

学業成績は、授業科目ごとに行う試験（筆記試験、口述試験、実技試験またはレポート）によって評価されますが、科目によっては、それに学修の状況等を平常点として加味し評価する場合や、平常点だけで評価する場合があります。

成績評価は、100点を満点とし、60点以上を合格とします。また、授業科目ごとの成績に対してグレードポイントを付与し、G P A（Grade Point Average）を算出します。

(2) 成績評価の区分

評点	評価	G P ※	内 容
100～90	S	4.0	抜群に優れた成績
89～85	A +	3.5	特に優れた成績
84～80	A	3.0	優れた成績
79～75	B +	2.5	良好な水準に達していると認められる成績
74～70	B	2.0	妥当と認められる成績
69～65	C +	1.5	一応の水準に達していると認められる成績
64～60	C	1.0	合格と認められるが最低限度の成績
59～ 0	F	0.0	不合格
認定	N	なし	留学等で修得した単位を本学の単位として認定
履修中止	W	－	所定の期日までに履修中止の手続きを行った場合

※G P = グレードポイント

(3) G P A（Grade Point Average）制度について

G P A制度は、国内外の大学で一般的な成績評価方法として使用されているもので、授業科目ごとの成績評価（本学ではSからFの8段階）に対してグレードポイントを付与し、この単位当たりの平均を算出した値がG P Aです。具体的な算出方法は次のとおりとなります。

$$\frac{(S \text{ の修得単位数} \times 4.0) + (A + \text{ の修得単位数} \times 3.5) + (A \text{ の修得単位数} \times 3.0) + (B + \text{ の修得単位数} \times 2.5) + (B \text{ の修得単位数} \times 2.0) + (C + \text{ の修得単位数} \times 1.5) + (C \text{ の修得単位数} \times 1.0) + (F \text{ の単位数} \times 0.0)}{\text{総履修単位数 (F 評価の授業科目の単位数を含む)}}$$

【G P Aに関する各種要件】

- ・ G P Aの算出対象となる科目は、卒業要件にかかわる科目（全学公開科目など、自由選択修得要件単位となる科目を含む）となります。
- ・ G P Aは、小数点第3位を四捨五入し、小数点第2位まで表示します。
- ・ 留学、資格試験などの結果により単位認定された科目（N）は、G P Aに算入されません。また、履修中止した科目についても、G P Aに算入されません。
- ・ 不合格（F）の科目を再度履修した場合、成績の可否にかかわらず、G P Aには最新の評価が反映されます。
- ・ 一度単位を修得した科目を、次学期以降に再度履修することはできません（カリキュラムの設定上、同一科目の単位を複数回修得することができる科目を除く）。

(4) 履修中止について

「履修中止」とは、履修を継続する意思のない授業科目が生じた場合に、履修中止申請期間に所定の手続きを行うことにより、当該授業科目の履修を中止することができる制度です。履修中止申請期間は、前期（対象科目：前期および通年科目）と後期（対象科目：後期科目）にそれぞれ設定されます。日程、手続方法、その他詳細については、in Campusでお知らせします。

なお、履修中止申請をする際には、以下の点に注意を払う必要があります。

- ① 履修中止した授業科目については、当該授業への出席、定期試験の受験、単位の修得はできません。
- ② 履修中止した授業科目の単位は、年間の履修上限単位に含まれます。また、履修中止単位数分の新たな履修登録は認められません。
- ③ 履修中止した授業科目は、GPAに算入されません。
- ④ 履修中止により、当該年度の履修登録科目がなくなる場合は、履修中止申請は認められません。
- ⑤ 履修中止申請した授業科目について、履修中止申請期間後に申請を取り下げることができません。

(5) 成績通知について

学業成績の結果は点数で表し、前期終了科目については9月上旬に、後期および通年科目については、3月下旬にお知らせします。ただし、4年次以上の後期および通年科目の成績通知は、卒業発表日（2月下旬予定）にお知らせします。

就職活動等で使用することになる「単位修得学業成績証明書」には、単位を修得した授業科目のみをSからCの評価で記載します（留学、資格試験などの結果により単位認定された科目は、「N」と記載されます）。併せて、通算のGPAを記載します（GPAには不合格科目も算入されます）。

12. オフィス・アワー

国際コミュニケーション学部専任教員は、週に1回以上のオフィス・アワーを設けています。各教員が設定するオフィス・アワーの曜日時限、研究室番号、連絡先は、ガイダンス等でお知らせします。

授業内容に関する質問、レポート指導、進学についての質問といった学習に直結する問題のほか^{注1}、学生生活全般にわたる相談にも対応します^{注2}。

オフィス・アワー以外の時間帯でも、質問や相談に対応できることがありますので、必要に応じて教員に確認してみてください。オフィス・アワーには他の学生が訪問していることも多く、その日の質問には対応できないという可能性もあります。訪問の重複を避け、確実に相談したい時には、事前に連絡しておくといいでしょう。

注1 履修登録やノートの取り方といった授業内容そのものに関するものではない質問については、専修大学入門ゼミナールにてきちんと学修するようにしてください。他の先生が担当している授業や資格講座に関わる質問には対応できません。

注2 学習相談とは違い、生活に関わる相談事や質問などには、必ずしも教員が適切に対応できるとは限りませんが、相談事項に十分に耳を傾けた上で、必要に応じて、専門の部署につなぐ媒介役を果たします。

13. 卒業発表

- ① 卒業が決定した学生については、2月下旬に第1次卒業決定者として専修大学ホームページ上で発表します。
- ② 2月下旬に行われる追試験の結果、卒業が決定した学生については、3月下旬に第2次卒業決定者として郵送にて発表します。
- ③ 卒業の可否は、必ず本人が確認してください。電話での問い合わせには一切応じません。

14. 学期末卒業制度

学期末卒業制度とは、卒業認定の対象となる年次において、卒業に必要な単位を修得することができなかったために引き続き在学している学生が、卒業を希望する年度の前期において卒業要件を満たし、所定の学費を納め、かつ、所定の手続きを行うことにより卒業することができる制度です。

詳細は、「専修大学国際コミュニケーション学部学期末卒業に関する取扱内規」(p.125)を参照してください。

15. 卒業延期制度

卒業延期制度は、さまざまな事由により、卒業要件単位を修得してもなお、更なる自己のキャリアアップや資格取得をめざすという明確な目標を持って、本学での勉学を継続したいという強い意思を持った学生に対し、その道を開く制度です。

詳細は「専修大学卒業延期の取扱いに関する内規」(pp.126~127)を参照してください。

16. 授業評価

国際コミュニケーション学部では、前期・後期の2回授業評価を実施し、その結果等をin Campusなどで公開しています。

授業評価は、専修大学が教育改革の一環として実施しているものです。設問の中に国際コミュニケーション学部独自の項目も設けられています。そのねらいは、授業評価を通じて、教員一人ひとりが自らの授業について学生からどのように受け止められているのかを知り、より望ましい授業のあり方を模索することによって置かれています。

授業評価の結果を受け、教員は授業を改善するよう努力しています。また、学生のみなさんにとっては、授業評価によって自らの現状を振り返り、授業に対する真剣な態度や積極的な意欲を喚起させていくための機会になります。

良好な環境のもとで良質な授業が行われることは、学生のみなさんが順調に単位を修得するための前提です。みなさんの率直で真剣な意見をぜひ聞かせてください。

Ⅲ 転換・導入科目

転換・導入科目

大学における学修では、高校までとは異なり、授業に出席して講義を聴くことや、教科書や参考文献などの基礎文献を読むことに加え、みなさんが、自らの問題関心や勉学の目的に沿って、自主的に勉強に取り組まなければなりません。そのためには、図書館を利用し、パソコンを駆使するなどして、勉学に必要な資料を収集すること、専攻によっては実態調査などのフィールドワークを行うこと、そして自ら学んだ内容をまとめて教員や他の学生に報告すること、その成果を論文やレポートにまとめることなど、みなさんの積極的な勉学が求められます。

転換・導入科目は、大学で学ぶための基本的な技法（アカデミックスキル）を身につける「専修大学入門科目」に加え、専門科目への導入としての役割を持つ「専門入門ゼミナール」（日本語学科のみ）を学ぶことで、アカデミックスキルを定着させます。さらに、大学、そして社会で求められる知識や技能・能力を伸ばし、教養科目、外国語科目、専門科目を学ぶための基本的な力を養う科目が置かれています。その力とは、情報を分析し活用する力（データリテラシー、情報リテラシー科目）（異文化コミュニケーション学科のみ）、自分の将来を切り開いていく力（キャリア基礎科目）、複合的な視点で観察し思考する力（基礎自然科学）です。これらは基礎となる科目ですから、1年次に履修することになります。

ここに設置されている科目を学ぶことで、みなさんはアカデミックスキルを修得しつつ、情報化・複雑化が進む社会で活躍するために必要とされるさまざまな力を伸ばすことができ、社会知性を身につけるのに役立つことでしょう。

1. 専修大学入門科目

「専修大学入門科目」には、**専修大学入門ゼミナール**が設置されています。この科目は、みなさんが、高校生活から大学生活への転換を図り、専修大学の学生としての自覚を持ち、大学での学修に求められる基本的なスキル（技法）を身につけることが目標であり、具体的な目的として、以下の点をあげることができます。

第1に、大学で学ぶことの意味を充分理解することです。大学の学修では、みなさんが、将来的な展望も踏まえ、積極的に学修を深めることが求められます。

第2に、専修大学の学生としての自覚を持つために、専修大学の歴史を学ぶことです。みなさんが、これから4年間勉学に励む「学びの庭」である専修大学の成り立ちと歴史を支えた先人たちの努力の歩みを知ることは、専修大学で学修することの意義を理解することでもあります。

第3に、アカデミックスキルを修得することです。すなわち「講義をどのように聞くか」「どのように資料を収集するか」「学修の成果をどのように相手に伝えるか」「どのように討論するか」「学修の成果をどのようにまとめるか」について学ぶこと、より具体的には「講義でのノートのとり方」「資料の収集方法」「報告の方法（レジユメの作成方法）」「討論の方法」「論文・レポートの書き方」など、大学における学修の方法を修得することです。

専修大学入門ゼミナールは、みなさんが、これらの目的を達成できるよう、おおよそ1クラス20名前後の少人数により実施されます。

また、**専修大学入門ゼミナール**は、学修のための入門科目ということだけにとどまらず、みなさんが、新入生として専修大学という同じ「学びの庭」に集った友人や教員との交流を通じて、大いに語り、励ま

し合いながら、大学生活を満喫するための基礎作りの場ともなります。

なお、専修大学入門ゼミナールは、単位の修得は義務づけられていませんが、必ず履修しなければならない「必履修」科目です。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできません。

2. 専門入門ゼミナール

専門入門ゼミナールは2年次以降学ぶ専門科目への導入的な役割を担っています。それぞれの学科で専門的に学ぶ学問には特有の考え方や研究の仕方があります。どのように文献を読み、どのように分析し、どのように研究したことを形にするかという一連の研究方法の基礎を学んでいきます。

なお、この科目は、日本語学科に設置されている必修科目です。

3. データリテラシー

大学の講義では分野によらず、データを根拠として推論された結果が語られることが多くあります。そして、社会ではさまざまな意思決定にデータの分析結果が用いられます。みなさんも、新聞やテレビの報道などでさまざまな調査データについての分析結果を、見たり聞いたりすることがあるでしょう。犯罪の件数、内閣の支持率、ある病気による死亡率、企業の売上高、さらにそれらの経年変化など、多くの調査結果が報道で取り上げられます。データによって示される結果は、私たちと身近なところで関係があることから、一見すると関係がないとも思えることまであります。たとえば、読んで味わう文学作品でさえ、作品中の表現の頻度や表現の間の関係をもとに数量的に分析されることがあります。

発表されたデータに基づく指標や表・グラフを見聞きして驚くことがあるかもしれません。もし発表が自分の感覚とずれている場合、自分が持っている指標のイメージが実は間違っていたり、そもそも発表する側が間違った印象を与える指標や表・グラフを（時には故意に）用いていたりにしている可能性があります。

したがって、データが示すことを正しく読み取る力を身につけておかななくてはなりません。他者が発表した分析結果を批判的に評価する力も重要です。さらに、自分がデータに基づいた報告を行う立場になったときに、相手にその内容を効果的に伝える表・グラフを作成することができれば、報告書やプレゼンテーションはより良いものになるでしょう。このようにデータを扱う基本的な力をデータリテラシーと呼びます。データリテラシーを身につけるために、**データ分析入門**が設置されています。

なお、**データ分析入門**は、異文化コミュニケーション学科に設置された科目であり、単位の修得は義務づけられていませんが、1年次に必ず履修しなければならない「必履修」科目です。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできません。

4. キャリア基礎科目

「キャリア基礎科目」は、「大学生活において、さまざまな選択肢の中から自分の生き方を主体的に考え行動する力を身につけること」を目的としています。大学生活をどのように送るか、卒業後の進路をどの

ように選択するかといったことは誰も簡単に決めることはできません。これを解決するには、将来どのような働き方をしたいか、そのために大学4年間をいかに過ごすかなど、自分のキャリアについてさまざまな視点から検討し、デザインすることが必要です。

そもそも、「キャリア (career)」の語源はラテン語で、「車道」や「車輪の跡 (轍)」などを意味しています。ですから、ある人のキャリアとは、その人が歩んできた人生の軌跡ということになります。こうした語源から、キャリアは「個人のさまざまな立場・役割・職務の連鎖」と一般に定義されています。一方、「デザイン」は、「設計」とか「構想」を指します。したがって、キャリアをデザインするとは、「自分の立場や役割を認識し、それにふさわしい己の有り様について構想を練る」ということになります。言い換えれば、過去の人生を踏まえながら、未来の自分の生き方、働き方や学び方について深く考え、そのために現在自分は何をすべきかを認識すること、となります。

1年次にキャリアデザインに対する基本的な考え方を身につけることで、将来に対する漠然とした不安感を取り除き、自分の将来像や課題をより具体的にしていきます。そしてそれを解決・実現するために自分が身につけるべき能力を明確にし、充実した学生生活に向けた具体的な第一歩を踏み出すこともこの科目のねらいのひとつです。

キャリア基礎科目に設置される**キャリア入門**は、自分の性格や価値観を知ることから始め、社会の成り立ちや具体的な仕事の内容、働くことにまつわる法律などを知ること、さらには自分の目標を実現するためにはどのような能力が必要かなどについて理解することが、主な目的です。そして、その後の学生生活において、どのように専門知識を学んでいけばいいかといった「大学内での学習」と、ボランティアやインターンシップなど実際の経験を積み重ねる「大学外での学習」を総合的に組み立てることができるようになります。

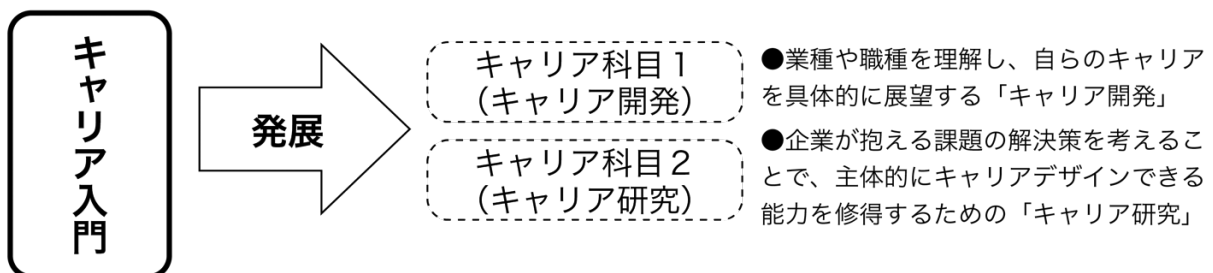
授業では一方的に話を聴くのではなく、自分の言葉で語る機会を大切にしています。授業で学んだ知識をグループワークなどで表現し、先生や仲間、大学外からのゲストスピーカーから意見をもらうことで、自分の考えを客観的に見つめ、少しずつキャリアに関する視点を身につけていくことができます。さらに、授業で取り扱ったことについて発展的に学習できるよう、キャリアデザインセンターでは各種講座を授業の進捗に合わせて展開しています。これに加え、授業期間中にキャリアカウンセリングを受けると、よりいっそう自分に適したキャリアを見つけられるでしょう。

このように**キャリア入門**を受講すると、キャリアに関わる意識や能力がどの程度身についたか認識できるようになり、大学内外での学びを意識しながら、キャリアに対する知識を獲得し、職業選択の段階へとスムーズに移行することが可能になります。あるべき自分を早い段階で意識し、己の進むべき道を主体的に選択できるよう、キャリアの考え方をしっかり修得してください。

なお、**キャリア入門**は、1年次の選択科目です。1年次に履修しなかったり、履修して単位を修得できなかった場合でも、次年度以降に履修することはできません。

転換・導入科目
キャリア基礎科目

教養科目・融合領域科目・キャリア科目



5. 情報リテラシー科目

大学での学修は、単に知識を覚えるのではなく、なぜそうなるのかを自分で考えることが必要です。そのためには、自分でデータを分析し、表現することが必要になります。そのため情報リテラシー科目では、PC等の情報技術を使って科学的・論理的な思考をするのに必要な基礎的な事項を学修します。

「情報リテラシー科目」として設置される**情報入門1**、**情報入門2**では、専修大学から利用できるさまざまな知的資源の検索・収集方法を学修し、表計算ソフトウェア等を使って情報を加工・分析します。また、統計データを実際にPCを使って分析します。分析結果などをプレゼンテーションやWebを通して表現する能力を身につけます。さらに、コンピュータ処理の特徴を理解し、どのようにコンピュータに指示を与えるのかを学修します。詳しくは、専修大学 情報入門で検索してください。テキストなどを参照できます。

なお、**情報入門1**、**情報入門2**は異文化コミュニケーション学科に設置されている1年次の選択科目です。1年次に履修しなかったり、履修して単位を修得できなかった場合でも、次年度以降に履修することはできません。

情報入門1の学修内容

- 専修大学の情報システムの利用法
- 情報倫理についての理解
- 検索サイトやCiNiiなどのデータベースを使ったデータ検索
- 文書作成
- 表計算
 - データ分析
 - 計算式によるデータ分析
 - グラフによる可視化
 - 絶対参照・相対参照の概念
 - 統計資料を使った分析

情報入門2の学修内容

- プレゼンテーションソフトウェアによるスライド作成・表現法の学修
- 表計算ソフトウェアを使った高度な処理
- HTML文を記述することによるWeb（ホームページ）の作成
- アンケート集計（クロス集計など）
- プログラミング（どのようにコンピュータへ処理方法の指示を与えるか）
- シミュレーション

6. 基礎自然科学

専修大学における自然科学系の講義は、みなさんが『社会の抱える諸問題に対する総合的な科学的思考力を育むことができるようになること』を目的としています。なぜ文科系の学部を専攻するみなさんが、自然科学系科目を受講する必要があるのでしょうか。

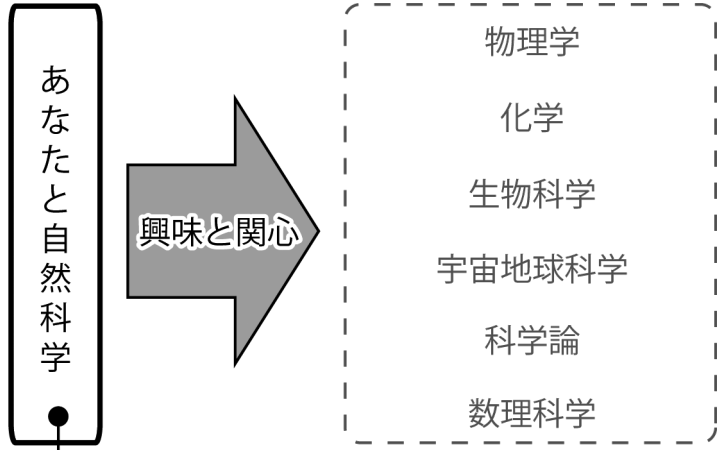
現在、私たちは、地球温暖化、エネルギー問題、安全性や倫理性に関する問題（遺伝子操作、放射能など）に直面しています。みなさんが、将来どのような職業に就いたとしても、自然科学的な考え方や知識、結論の根拠を自分で判断する力や科学的に論述する力は必要になるでしょう。

「基礎自然科学」に設置された科目である**あなたと自然科学**は、みなさんの自然科学的な思考力・探究力・論述力を高め、みなさんと自然科学の関係を知るための導入として設置されます。ここで学んだことは、卒業までに学んでいく教養科目の自然科学系科目につながっていきます。この科目で興味・関心を深め、教養科目で学びたい自然科学の分野を見つけるのが良いでしょう。

なお、**あなたと自然科学**は、単位の修得は義務づけられていませんが、1年次に必ず履修しなければならない「必履修」科目です。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできません。

転換・導入科目
基礎自然科学

教養科目
自然科学系科目



「あなた」と自然科学はどのような関係にあるのだろうか？
自然科学はどうやってモノゴトを解決しているの？
『科学的』に考えて、明らかにする」ってどんなこと？

IV 教 養 科 目

教養科目

教養科目の位置づけと目的

教養科目は専門科目と併せて、転換・導入科目で身につけた基本的な力を用いて、さらに知識を広げ、それぞれの分野の理解をいっそう深めることを目的としています。また、専門科目で展開される科目を別の視点から捉えることができるようになることも大きな目的です。教養科目は専門科目とともに専修大学の学士課程教育の大きな柱となっています。

教養科目を学ぶ意義

現代社会には情報があふれ、ストレスも多くなっています。このような時代には、バランスの取れた人間性を涵養することがますます重要になってきます。文化や社会、身体や自然への知識と理解、またそこから得られる国際的な広い視点は、複雑な社会で生きるための基礎となります。

教養科目の学び方

教養科目のうち、「人文科学基礎科目」と「社会科学基礎科目」は、1・2年次で履修します。科目ナンバリング、講義要項（シラバス）を参考にしながら、自分の学部・学科の専門性を考慮して、履修することが望まれます。「自然科学系科目」と「保健体育系科目」は、講義要項（シラバス）の配当学部・配当年次に従って履修します。「融合領域科目」は、2・3・4年次で履修します。ただし、教室定員によって履修者を抽選で決定することがあります。

自然科学系科目については、転換・導入科目で展開されている科目において、入門的な内容や科目の大きな目標・目的を学んでいます。それを基礎とし、さらなる学修によって、これらの分野をより深く理解することができます。

1. 人文科学基礎科目

人文科学基礎科目を学ぶ意義と目的

人文科学の領域にはさまざまな学問が含まれています。本学においては別表に示すように、大きい枠組みでは、文学・歴史学・哲学・芸術学・文化人類学・ジャーナリズム学・心理学に分かれています。これらの学問はさらに細かい分野に分けられているので、みなさんは多種多様な領域を持つ人文科学に驚くかもしれません。では、これらの学問分野はどうして人文科学としてひとくくりにまとめられているのでしょうか。それは、これらの学問がいずれも、人間の行い、これまで人間がやってきたことにかかわっているからです。人文科学は、具体的で個別的でもある人間のさまざまな営みを研究対象とし、そこから人間というものがどういう生き物であるのかを理解しようとする、そのような領域です。そして、人間の営みはさまざまですから、それに応じて多種多様な学問が生まれるのです。

人文科学の領域からは複数の科目を履修してみることを推奨します。そうすることによって、さまざまな人間観や世界観、歴史、多文化、異文化についての関心を広げること、そして、多面的なもの見方に立ち、日常生活での人間性に関わる諸問題の解決に取り組むことができるようになります。ここに人文科学領域の、単なる知識にはとどまらない最大の面白さがあり、これらの科目を学ぶ目的があります。

人文科学基礎科目の学び方

- ① 人文科学基礎科目は、1・2年次に履修します。
- ② 科目名が同じでも、担当する教員が異なる場合、扱う内容が異なることもあります。しかし、場合でもその科目の目標は同じです。
- ③ 個々の科目内容については、講義要項（シラバス）を参照してください。
- ④ 自分の所属する学部・学科の専門分野に隣接する教養科目を学ぶことは大変意義があります。一方、人間の営みのさまざまな側面を知り、自分とは違った観点をもつことができるようになるためには、一見すると関連のない分野を学ぶことも必要です。このことは、学びを深める上での基本です。したがって、どの学科に所属していても、複数の学問領域から履修することが望まれます。

人文科学の学問領域と人文科学基礎科目の設置科目

人文科学の学問領域	人文科学基礎科目の設置科目
文学	日本の文学（異文化コミュニケーション学科のみ）
歴史学	歴史の視点
哲学	哲学 倫理学 論理学入門 ことばと論理
芸術学	芸術学入門
ジャーナリズム学	ジャーナリズムと現代
心理学	基礎心理学入門 応用心理学入門

2. 社会科学基礎科目

社会科学基礎科目を学ぶ意義と目的

人びとは何らかの社会的な組織や集団（企業、国家、家族、地域など）の一員として生きています。何気ないふるまいや考え抜いた選択も、自分自身から一歩離れて観察すると、社会的な組織や集団、各種制度の影響をうけていることに気がきます。社会科学とは、社会を構成する組織や集団、制度の内容を知り、それぞれがどのような影響を与えあっているのかを理解することで知識を深めることができます。

自分が生きている社会ですから、理解できていると思い込んでしまったり、先入観にとらわれて誤認したりすることもあります。それを防ぐには、「自分自身から一歩離れて観察する視点」（＝客観的な基準）が重要です。しかし、この視点は唯一無二のものが存在するわけではありません。多様な視点があり、学問領域によって異なる基準が用意されています。この点を踏まえ、社会科学基礎科目では、学問領域ごとに得意としている社会の観察眼を学べるよう、そして、多面的なものの見方に立って、一市民として、社会生活上の諸課題の解決に取り組むことができるよう、表にあるような科目を設置しています。

社会科学基礎科目の学び方

- ① 社会科学基礎科目は、1・2年次に履修します。
- ② 開講されている科目で扱う具体的な内容については、講義要項（シラバス）で確認してください。
- ③ 自分の所属する学部・学科の専門分野に隣接する教養科目を学ぶことは大変意義があります。一方、

固定観念に縛られずに社会で生じている出来事や課題への観察眼を養うことも大切で、そのためには、一見すると関連のない分野を学ぶことも必要です。このことは、学びを深める上での基本です。したがって、どの学科に所属していても、複数の学問領域から履修することが望まれます。

社会科学の学問領域と社会科学基礎科目の設置科目

社会科学の学問領域	社会科学基礎科目の設置科目
社会科学全般	社会科学論 社会思想
経済学	経済と社会 現代の経済
法学	日本国憲法 法と社会
政治学	政治学入門 政治の世界
経営学	はじめての経営
商学	マーケティングベーシックス 企業と会計
教育学	教育学入門 子どもと社会の教育学
地理学	地理学への招待
社会学	社会学入門 現代の社会学
情報学	情報社会

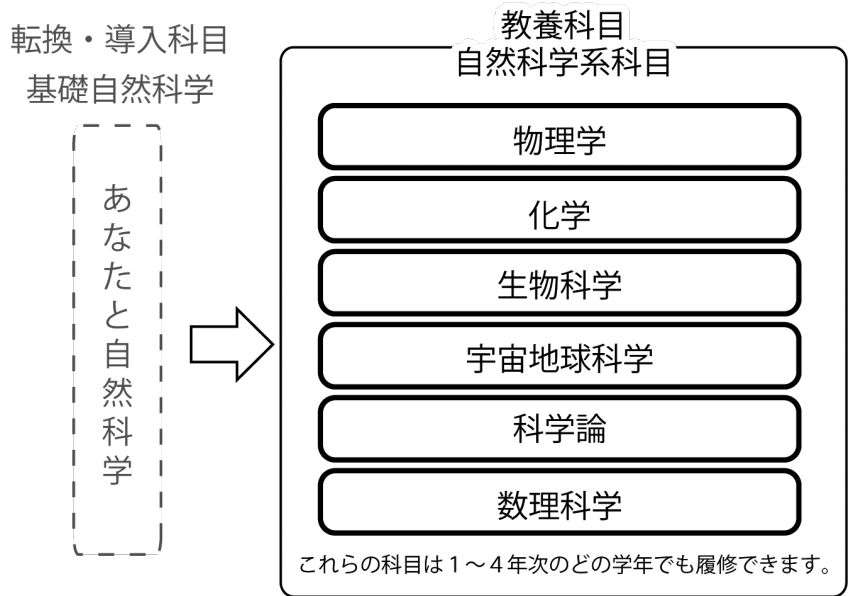
3. 自然科学系科目

自然科学系科目を学ぶ意義と目的

「自然科学系科目」として、物理学、化学、生物科学、宇宙地球科学、科学論、数理科学が設置されています。転換・導入科目「基礎自然科学」のあなたと自然科学でその一端に触れた科学的思考力をそれぞれの科目を通じて深化させます。

そのために次のような目的で科目を設置しています。

- ① 自然や物質の成り立ちと人間の存在に関する普遍的な原理の理解：現在では、宇宙の創成から人類の誕生に至るまでの科学的な理解が進んでいます。「地球に生きる私たち」という位置づけができる力を養います。
- ② 現代社会を生き抜くための多角的な視野の形成：人文・社会科学系の学問と異なる、実験や観察に基づいたアプローチをする自然科学的な発想や視点を身につけ、客観的な思考力を養います。
- ③ 現代社会が抱える課題を解決する能力の育成：科学技術の著しい発展は、人類に恩恵をもたらす一方で環境問題や遺伝子操作などの数々の問題も生み出してきました。これらの問題に対する適切な判断力や深く広い生命観を培います。



自然科学系科目の学び方

それぞれの自然科学系科目が扱う内容に関する代表的なキーワードは、次の表のとおりです。「物質」や「環境」、「宇宙」といった広いテーマに関連するキーワードは、複数の科目に含まれていることが分かります。各自の学修目的に合わせて履修科目を選択してください。

科目名	それぞれの科目が扱う内容を表す代表的なキーワード
生物科学1 a・1 b	細胞, 遺伝子, DNA
生物科学2 a・2 b	生物と環境の科学, 生態学, 進化学
生物科学3 a・3 b	ホメオスタシス, 脳・神経, 内分泌, 感覚, 細胞
宇宙地球科学1 a・1 b	恒星, 銀河, 太陽系, 天体の運動, 天体の観測
宇宙地球科学2 a・2 b	プレートテクトニクス, 地震, 火山, 地球史, 環境変動
化学1 a・1 b	物質の理解, ものづくりの基本, 元素と周期表, 物質の多様性, 生体関連物質
化学2 a・2 b	エネルギー資源, 自然環境, リサイクル, 有機化合物, 生体分子
物理学1 a・1 b	力学, 波動, 量子論, 電磁気学
物理学2 a・2 b	現代物理, 宇宙論, 相対論, 素粒子論, 統計熱力学
数理科学1 a・1 b	代数
数理科学2 a・2 b	解析・幾何
数理科学3 a・3 b	統計
科学論1 a・1 b	進化論, 大きすぎて見えないもの, 小さすぎて見えないもの
科学論2 a・2 b	科学と技術, 科学史, 人間と科学

- ① 興味のあるキーワードを中心に関連する科目を履修するのも一つの方法です。
- ② 「環境」に興味がある → 宇宙地球科学2 a・2 b と 生物科学2 a・2 b, および 化学2 a・2 b を履修する。
- ③ 「宇宙」に興味がある → 宇宙地球科学1 a・1 b と 物理学2 a・2 b を履修する。
- ④ 分野を超えて幅広く、そして深く履修する。 → 数理科学で「数学」を学び、この知識を生物科学2 a・2 b の「生態学」の学修に活かす。

- ② 「〇〇1 a」など番号+アルファベットまでが科目名です。また、「〇〇1 a」と「〇〇1 b」は別科目です。
- ③ 「〇〇1 a」, 「〇〇2 a」, 「〇〇3 a」は科目のテーマ・内容を区別する番号であり、難易度を意味するものではありません。「〇〇3 a」から履修しても構いません。
- ④ いずれの科目も、年次に関わらず自由に履修することができます。
- ⑤ 開講されている科目で扱う具体的な内容については、講義要項（シラバス）で確認してください。
- ⑥ 科目名が同じでも、担当する教員が異なる場合、扱う内容が異なることもあります。

4. 融合領域科目

融合領域科目を学ぶ意義と目的

「融合領域科目」は、各学部における専門科目とは異なり学際的なテーマを扱います。また一つのテーマについて多方面からのアプローチが存在することをみなさんに示しながら、どんな社会現象や自然現象にも複数の側面（多面性）があり、それらの間に複雑な関係性があることを理解させ、みなさんの思考力に総合的な分析力や判断力が加わることを主な目的としています。

融合領域科目に設置される科目	科目の目的や内容
学際科目	学際的なテーマを扱い、原則として複数の教員やゲストスピーカーが共同で講義を行います。広い視野からの多面的・学際的な検討により、総合的な判断力を育成します。
テーマ科目	新しく注目を集めている学問領域やテーマについて深く掘り下げて講義します。
新領域科目	学際科目やテーマ科目が扱うような特定の学問領域に属さない特殊領域の科目に対応し、講義します。
キャリア科目	業種や職種を理解し、自らのキャリアを具体的に展望することを目的とした キャリア科目1（キャリア開発） と、企業が抱える課題の解決策を考えることで、主体的にキャリアデザインできる能力を修得する キャリア科目2（キャリア研究） により構成されています。転換・導入科目の キャリア入門 を基礎として、より進んだキャリア形成を目指します。
教養テーマゼミナール	少人数の相互コミュニケーションによるゼミナール形式の科目です。担当教員の専門分野に関連したテーマを設定し、発表・討論を中心に進め、深く研究を行います。
教養テーマゼミナール論文	同じ担当教員の 教養テーマゼミナール を2年間以上履修する場合に履修することができます。設定したテーマについて深く研究し、論文を作成します。

融合領域科目の学び方

- ① 融合領域科目は、2・3・4年次に履修します。
- ② 開講されている科目で扱う具体的な内容については、講義要項（シラバス）で確認してください。

注意事項

- ◎**教養テーマゼミナール**は1・2・3に区分され、1は2年次、2は3年次、3は4年次配当の科目です。連続して同じ教員が担当する**教養テーマゼミナール**を履修することもできますし、年度毎に別の教員が担当する**教養テーマゼミナール**を履修することもできます。
- ◎同一年度に**教養テーマゼミナール**と専門科目のゼミナールを履修できます。
- ◎同一教員の**教養テーマゼミナール**を2年間以上履修する場合、**教養テーマゼミナール論文**を履修することが可能です。
- ◎**教養テーマゼミナール**は、毎年11月頃、次年度の履修者の募集を行います。募集要項は教務課で配付します。

5. 保健体育系科目**スポーツリテラシーを学ぶ**

スポーツリテラシーとは、「スポーツ実践を通じて、その過程における経験をスポーツ文化に関する知を活用しながら分析・鑑賞・評価し、スポーツによるコミュニケーションを創り出す能力」を言います。「**スポーツリテラシー**」では、スポーツが有するさまざまな可能性に触れて身体知を養い、スポーツを通じた学士力の養成と心身の健康の維持増進に取り組みます。また、共に学ぶ仲間作りの場としてのスポーツを実践し、スポーツを媒介にして学生間の意思疎通能力を育みながら豊かな人間性や倫理観を養います。

スポーツウェルネスを学ぶ

スポーツウェルネスとは、「スポーツ実践を通じて、積極的に心身の健康維持・増進を図ろうとする生活態度・行動」のことを言います。**スポーツウェルネス**では、スポーツを通じた身体活動が、健康なライフスタイルの創造に貢献することを体感し、「学びの力」の土台となる心身の健康の維持増進を果たすとともに、将来における健康面の課題を解決するための運動習慣の醸成を図ります。

スポーツリテラシーおよび**スポーツウェルネス**での取り組みは、**アドバンストスポーツ**での実践的な身体活動や**スポーツ論**で学ぶスポーツが有する多角的な価値の理解につながっていきます。

アドバンストスポーツを学ぶ

アドバンストスポーツでは、スポーツを専門的レベルから学びます。対象スポーツにおける幅広い知識と専門性の高い技術の獲得とともに、トップアスリートとの交流、審判法やマッチメイク等のマネジメントについての学習などにより、スポーツをライフスタイルの中に取り込み、生涯にわたり身体的、精神的、社会的に健康で豊かな生活を送る能力を身につけることを目的にしています。

スポーツ論を学ぶ

スポーツ論は理論科目です。スポーツが有する多角的な価値について、社会科学、自然科学、人文科学などの視点から学び、世界共通の人類の文化であるスポーツに関する教養を深めるとともに、在学時およ

び卒業後において日常的にスポーツに親しみ、スポーツを通じて地域社会と積極的に関わりながら心身の健全な発達、明るく豊かな生活の形成に繋げることのできる能力の醸成を目指します。

スポーツリテラシー（1単位）、スポーツウェルネス（1単位）、スポーツ論（2単位）およびアドバンススポーツ（2単位）の中から計2単位の修得が卒業要件単位として設定されています。

1年次	2～4年次
スポーツリテラシー	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツの持つ様々な可能性にふれ、その理解を進めるとともに、スポーツを通じたコミュニケーションの場を提供します。
スポーツウェルネス	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツを通じた心身の変化に触れ、将来における心身の健康維持や健康の増進を図る方法について理解を深めます。 ・シーズンスポーツの集中授業も展開されています。
	アドバンススポーツ <ul style="list-style-type: none"> ・「スポーツリテラシー」と「スポーツウェルネス」の2科目2単位を修得した場合に履修できる科目です。 ・「する・見る・支える」スポーツの楽しさを広げ、スポーツをライフスタイルに取り入れていけるようなスキルを身につけます。 ・シーズンスポーツの集中授業も展開されています。
	スポーツ論 <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ論は理論科目です。 ・スポーツを様々な視点から捉えた6つの科目が展開されています。 スポーツ論（健康と生涯スポーツ） スポーツ論（オリンピックとスポーツ） スポーツ論（スポーツコーチング） スポーツ論（スポーツライフデザイン論） スポーツ論（人類とスポーツ） スポーツ論（トレーニング科学） ・同一科目を重複して履修することはできません。

注意事項

- ◎スポーツリテラシー、スポーツウェルネスおよびアドバンススポーツを履修する際は、事前に健康診断を受ける必要があります。
- ◎同一年度にスポーツリテラシーとスポーツウェルネスの同一種目を履修することはできません。
- ◎疾病、身体虚弱および肢体不自由など、運動を制限されている場合は、教務課窓口もしくは第1回目の授業時に申し出てください。
- ◎個々の科目および種目内容については、講義要項（シラバス）を参照してください。
- ◎2年次以降から、アドバンススポーツとスポーツ論が履修できます。
- ◎2年次以降のアドバンススポーツは、スポーツリテラシーとスポーツウェルネスの単位を修得した場合に履修できます。
- ◎アドバンススポーツは同一種目を重複履修、また複数種目を履修する事ができます。
- ◎スポーツ論は、「スポーツ論（健康と生涯スポーツ）」のように（ ）までが科目名です。
- ◎スポーツウェルネス（集中）およびアドバンススポーツ（集中）は、4年次では履修できません。

V 外国語科目

外国語科目

外国語科目には、「英語」と「英語以外の外国語」、「海外語学研修」があります。

「英語」では、高校時代までで学んできた英語を土台としつつ、日本を含めた世界を意識した英語の学習に取り組みます。急速なグローバル化の時代、みなさんが将来どの分野に進もうとも、英語は不可欠です。ぜひ目的意識をもって英語の学修を続けていきましょう。

「英語以外の外国語」では、ことばそのものを修得すると同時に、その背景にある社会の考え方や文化（Cultures）に触れます。そこから、未知の人たちとのコミュニケーション（Communication）が始まります。新しいことばは、英語だけでは知ることのできない世界とつながる（Connections）、異文化への新鮮な窓口です。

「海外語学研修」は、実践的に語学力を伸ばす絶好の機会であると同時に、異文化圏での生活を肌で体験することによって、机上の学習では決して得ることのできない感動や刺激を受けることができます。

◎「CALL 自習室」と「語学相談」の紹介

生田・神田キャンパス1号館地下にはCALL自習室とCALLライブラリーがあり、各種語学の視聴覚教材をはじめ、検定試験対策教材や雑誌等が視聴、閲覧できます。また、生田10号館1階情報コアゾーンにもCALL自習スペースは設けられていて、こちらではDVDを中心とした教材が利用できます。専任教員による語学相談も受け付けているので、積極的に利用しましょう。

なお、インターネットブラウザ上で学習を行えるe-learning教材（ALC NetAcademy NEXT）もあります。専修大学の学生なら、手続きなしで活用することができ、英語資格試験対策などの学習を学内のみならず学外でも行うことができます。

1. 英語

英語を学ぶ意義

外国語科目の「英語」では、高等学校までで学んできた英語を土台としつつ、新たに大学生として英語や英語を取り巻く社会状況を理解し、学修することを目指します。コミュニケーションの手段として、また情報収集、発信の手段として不可欠な英語力をさらに伸ばしていくことを目指しましょう。また、実用的な面のみならず、異文化への関心や理解を深め、人間としての視野を広げることも大変重要です。

必ず履修する英語科目に加え、英語の4技能（Reading, Listening, Speaking, Writing）をさらに高め、グローバル化時代の多様なニーズにこたえられるよう、様々な選択科目の英語が用意されています。幅広く用意された選択科目を積極的に履修することでさらなる英語力の向上を目指すとともに、異文化への理解を深めましょう。

① 英語の履修方法

国際コミュニケーション学部日本語学科では、1年次で、外国語科目の英語4科目（4単位）を履修することとなっています。

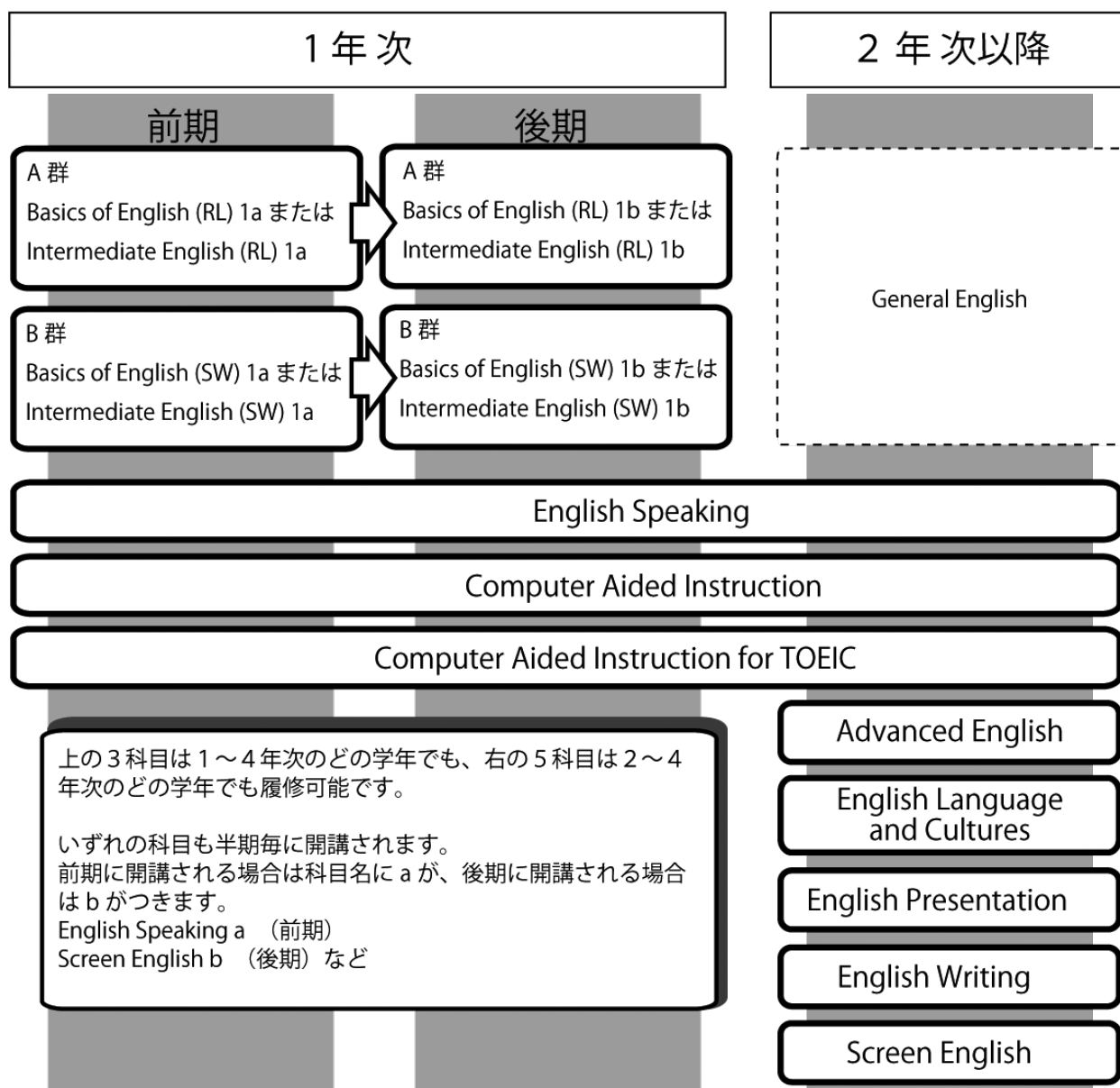
（A群）Basics of English (RL) 1a, 1b または Intermediate English (RL) 1a, 1b の2科目と、（B群）Basics of English (SW) 1a, 1b または Intermediate English (SW) 1a, 1b の2科目を履修しま

す。

RLはリーディングとリスニングが中心、SWはスピーキングとライティングが中心の科目です。BasicsとIntermediateの違いについては、次の②を見てください。

科目名にaがつく科目は前期、bがつく科目は後期開講で、これらの科目は半期1単位で半期ごとにそれぞれ成績がつきます。

これらの科目の単位を修得できなかった場合には、General Englishを履修して不足分の単位を修得しなければなりません。General Englishは半期科目として実施されます。



外国語科目

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科では、英語を専門科目として学修します。

ただし、選択科目のうち、Advanced English a, b または English Language and Cultures a, b を履修することができます。

② 英語の特徴

国際コミュニケーション学部日本語学科では、習熟度別クラスで学修します。入学時の「英語科目プレースメントテスト」によって、Basics of English と Intermediate English のどちらを履修するかが決定します。

基礎的な学修が必要な場合は Basics of English、基礎が修得されている場合は Intermediate English を履修します。

Intermediate English はさらに Mid と High にわかれています。特に希望すれば、英語科目プレースメントテストによって指定されたクラスより、1 レベル上 (Basics of English → Intermediate English (Mid), Intermediate English (Mid) → Intermediate English (High)) のクラスの履修を許可されることもあります。レベル変更の申請は、1 年次の新入生ガイダンス期間と 2 年次のガイダンス期間のみ受け付けています。

③ 選択科目について

外国語科目の英語では、みなさんのニーズにこたえられるよう幅広い選択科目を用意しています。

◎ 1 年次から履修できる選択科目 (日本語学科のみ設置)

1 年次から選択できる英語の選択科目は次の 3 種類です。これらは 2～4 年次でも履修できます。選択科目で修得した単位は、**自由選択修得要件単位**として、卒業要件単位に含まれます。

English Speaking a, English Speaking b

ネイティブスピーカーの指導のもと、会話を中心にコミュニケーション力を養います。この科目は、a、b それぞれ 4 単位まで履修することができます。

Computer Aided Instruction a, Computer Aided Instruction b

e-learning 教材を使用し、基礎的な英語力を強化します。

Computer Aided Instruction for TOEIC a, Computer Aided Instruction for TOEIC b

e-learning 教材を使用し、TOEIC® で 600 点以上のレベルの英語力獲得を目指します。

これらの科目は半期 1 単位です。

◎ 2年次から履修できる選択科目

2～4年次は、1年次から選択できる上記の3種類の科目に加えて、さらに5種類の選択科目を履修することができます。

Advanced English a, Advanced English b

発展的な内容を学修し、英検、TOEFL[®]、TOEIC[®]等の資格試験に対応できる英語力を目指します。この科目は、a、bそれぞれ4単位まで履修することができます。

English Language and Cultures a, English Language and Cultures b

英語圏の文化、言語、コミュニケーションのあり方を、様々な題材を使って掘り下げていきます。この科目は、a、bそれぞれ4単位まで履修することができます。

English Presentation a, English Presentation b (日本語学科のみ設置科目)

プレゼンテーションの技法を身につけ、聞き手にわかりやすく説明する能力を養います。

English Writing a, English Writing b (日本語学科のみ設置科目)

正しい文章を書き、正確に情報を伝達する能力を養います。

Screen English a, Screen English b (日本語学科のみ設置科目)

映画で使用される口語英語の文法・表現・音声について、基礎的な知識を学びます。

これらの科目は半期2単位です。

④ 資格試験による単位認定 (英語)

英検、TOEFL[®]、TOEIC[®]において、一定の基準を満たしている学生には一定水準以上の英語力を有するものとみなし、下記の表のとおり単位を認定します。

	検定試験の種類	認定基準	認定 単位数	認定科目群	認定科目名 (単位数)	
上位 基準	英検 TOEFL iBT ^{®*} TOEIC	準1級 83点以上 730点以上	4	*必修科目	A群	Intermediate English (RL) 1 a または Basics of English (RL) 1 a (1)
						Intermediate English (RL) 1 b または Basics of English (RL) 1 b (1)
					B群	Intermediate English (SW) 1 a または Basics of English (SW) 1 a (1)
						Intermediate English (SW) 1 b または Basics of English (SW) 1 b (1)
				選択科目	Advanced English a (2)	
					Advanced English b (2)	
					English Language and Cultures a (2)	
					English Language and Cultures b (2)	

	検定試験の種類	認定基準	認定 単位数	認定科目群	認定科目名 (単位数)	
下 位 基 準	英検 TOEFL iBT®* TOEIC	— 61点以上 600点以上	2	*必修科目	A群	Intermediate English (RL) 1 a または Basics of English (RL) 1 a (1)
						Intermediate English (RL) 1 b または Basics of English (RL) 1 b (1)
					B群	Intermediate English (SW) 1 a または Basics of English (SW) 1 a (1)
						Intermediate English (SW) 1 b または Basics of English (SW) 1 b (1)
				選択科目		Advanced English a (2)
						Advanced English b (2)
						English Language and Cultures a (2)
						English Language and Cultures b (2)

* TOEFL iBT® = TOEFL Internet-Based Test

注意事項

単位認定の取り扱いについて

- ◎認定単位数の上限は4単位です。下位基準による2単位の認定を受けたものが、その後に上位基準を満たした場合、翌年度以降に追加認定を申請できますが、その際の認定単位数は、上限単位数から既認定単位数を差し引いた2単位となります。
- ◎同一基準において複数の検定試験で基準を満たしている場合も、認定はいずれか一種類の検定試験によります。
- ◎ TOEFL ITP®, TOEIC®-IP は認定対象には含まれません。
- ◎認定科目の成績評価は点数で表さず、「認定」とします。
- ◎認定された単位は、各年次の履修上限単位数には含めません。
- ◎認定科目(群)は原則として、未修得科目のうち必修科目とし、すべての必修科目を修得している場合には、Advanced English a, b または English Language and Cultures a, b を認定します。
- ◎異文化コミュニケーション学科では、Advanced English a, b または English Language and Cultures a, b を認定科目とします (*必修科目の設置はありません)。

申請手続き

- 1) 申請期間内に提出書類を教務課に提出し、「単位認定申請書類受領書」の交付を受けます。
- 2) 申請期間は、当該年度の4月20日(休日の場合は前日)までとします。
- 3) 提出書類は①単位認定申請書と②合格証またはスコアカードの原本です。入学試験出願時に原本を提出した場合は、窓口で申し出てください。
- 4) 合格資格の有効期限は申請日からさかのぼり、2年以内とします。

2. 英語以外の外国語

英語以外の外国語を学ぶ意義

Communication + Cultures + Connection : 3つのCをさらに充実させよう

Communication : 未知の人たちとコミュニケーションしよう！

Cultures : さまざまな国, 地域の社会と文化を理解しよう！

Connections : 国を越えて, 分野を越えて, 人と, 社会とつながろう！

英語以外の外国語には、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語、インドネシア語、コリア語、アラビア語、イタリア語が設置されています。また、あわせて日本語学科では、日本語による講義科目である**世界の言語と文化**と**言語文化研究**を履修することで、さまざまな国や地域の社会とその背後にある文化を勉強することができます。

(1) 日本語学科

① 英語以外の外国語の履修方法

国際コミュニケーション学部日本語学科では、1年次において、英語以外の外国語「導入」の科目（初級1a, 1b, 2a, 2b）の4科目（4単位）を履修することとなっています。科目名にaがつく科目は前期、bがつく科目は後期開講で、これらの科目は半期1単位で、半期ごとにそれぞれ成績がつきます。

② 英語以外の外国語の「導入」以外の科目について

英語以外の外国語では、みなさんのニーズにこたえられるよう幅広い科目を用意しています。

中級1a, 1b : 初級で学んだことの復習 + さらに発展した語学力・コミュニケーション力を養います。年度を越えてそれぞれ2科目まで履修することができます。

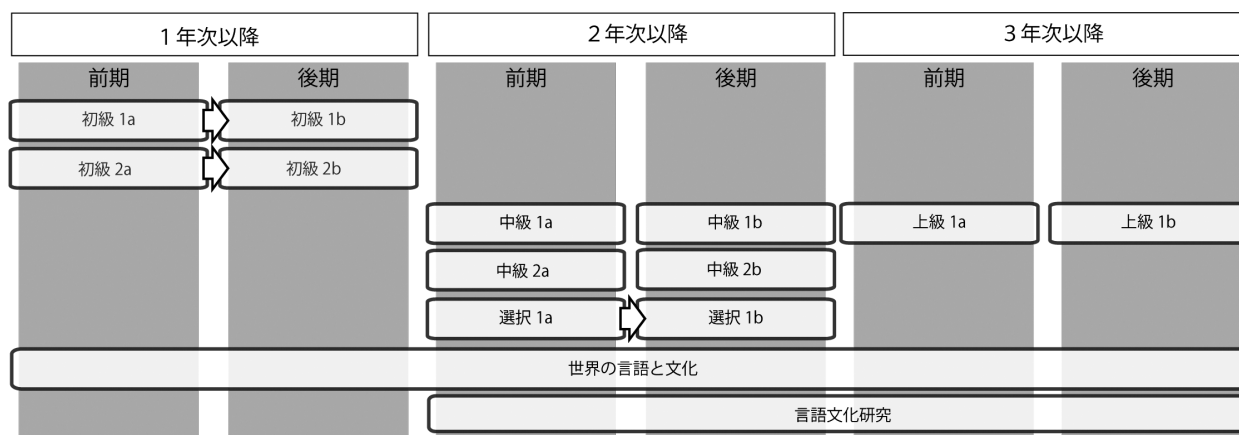
中級2a, 2b : 初級で学んだことの復習 + さらにテーマ別に語学力を養います。年度を越えてそれぞれ2科目まで履修することができます。

上級1a, 1b : 個別のテーマで、中級以上のさらに進んだレベルの語学力を養います。同一年度にそれぞれ2科目まで、年度を越えてさらに2科目、合計で4回履修することができます。

選択1a, 1b : 第三の外国語として、入門的な語学力・コミュニケーション力を養います。

世界の言語と文化 : 各国の言語の背景にある文化を広く学びます。

言語文化研究 : 世界各地のさまざまな文化や社会およびその間の関係を深く学びます。日本語による講義科目です。



⇒で結ばれた科目は、同一曜日・時限、同一担当者の科目をセットで履修します。

注意事項

- ◎英語以外の外国語「導入」の科目（初級 1 a, 1 b, 2 a, 2 b）は、同じ言語を履修しなければなりません。また、4科目（4単位）を修得した場合は、同じ言語の選択 1 a・1 bを履修することはできません。同様に、同じ言語の初級 4科目（4単位）と選択 1 a・1 bを同時に履修することはできません。
- ◎選択 1 a・1 bは外国語科目の英語以外の外国語「導入」の科目（初級 1 a, 1 b, 2 a, 2 b）の4科目（4単位）の単位を修得した後に履修できます。
- ◎必修の外国語として履修した科目の単位が未修得の場合は、再履修しなければなりません。
- ◎中級以上の科目については、開講されない外国語もあります。
- ◎英語以外の外国語に設定された卒業要件単位を超過して修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。

③ 資格試験による単位認定（英語以外の外国語）

高校までに、すでに英語以外の外国語を学修し、指定された資格試験で一定の基準を満たしている場合、入学年度当初に英語以外の外国語の初級1a・1b および初級2a・2b（4科目4単位）の認定を行い、中級の科目に進むことができます。

下表の資格試験の基準を満たしている学生は、初級1a・1b および初級2a・2bの単位認定の申請を行ってください。

検定試験の種類	認定基準	認定 単位数	認定科目（単位数）
ドイツ語技能検定試験	4級	4	ドイツ語初級1a (1)
Goethe-Institut ドイツ語検定試験	A 2	4	ドイツ語初級1b (1)
			ドイツ語初級2a (1)
オーストリア政府公認ドイツ語能力検定試験	A 2	4	ドイツ語初級2b (1)
実用フランス語技能検定試験	4級	4	フランス語初級1a (1)
DELF-DALF フランス語資格試験	A 2	4	フランス語初級1b (1)
			フランス語初級2a (1)
			フランス語初級2b (1)
中国語検定試験	4級	4	中国語初級1a (1)
HSK 漢語水平考試	HSK 4級	4	中国語初級1b (1)
			中国語初級2a (1)
			中国語初級2b (1)
スペイン語技能検定	4級	4	スペイン語初級1a (1)
DELE スペイン語検定試験	A 2	4	スペイン語初級1b (1)
			スペイン語初級2a (1)
			スペイン語初級2b (1)
ロシア語能力検定試験	3級	4	ロシア語初級1a (1)
			ロシア語初級1b (1)
			ロシア語初級2a (1)
			ロシア語初級2b (1)
インドネシア語技能検定試験	D級	4	インドネシア語初級1a (1)
			インドネシア語初級1b (1)
			インドネシア語初級2a (1)
			インドネシア語初級2b (1)
ハングル能力検定試験	5級	4	韓国語初級1a (1)
韓国語能力試験	TOPIK I (1級)	4	韓国語初級1b (1)
			韓国語初級2a (1)
			韓国語初級2b (1)

注意事項

単位認定の取り扱いについて

- ◎同一言語の4科目4単位をセットで認定します。
- ◎同一基準において複数の検定試験で基準を満たしている場合も、認定はいずれか一種類の検定試験によります。
- ◎認定科目の成績評価は点数で表さず、「認定」とします。
- ◎認定された単位は、各年次の履修上限単位数には含めません。
- ◎認定された場合は、所定の手続きを経ることで、1年次に同一言語中級科目の履修が認められます。
- ◎認定された場合は、初級1a・1bおよび初級2a・2bを履修することはできません。別の外国語を学修する場合、2年次以降に選択1a・1bを履修してください。

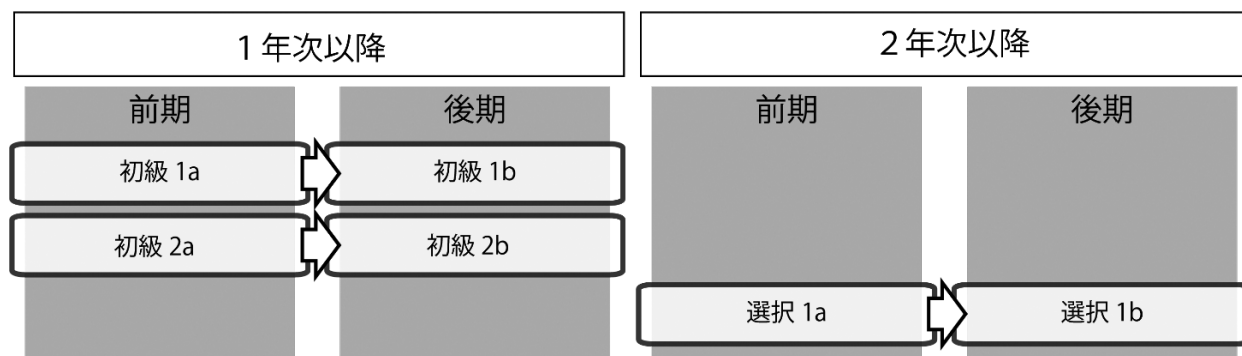
申請手続き

- 1) 申請期間内に提出書類を教務課に提出し、「資格試験による単位認定・既習者科目履修登録申請書類受領書」の交付を受けます。
- 2) 申請期間は、入学年度の4月20日（休日の場合は前日）までとします。
- 3) 提出書類は①資格試験による単位認定・既習者科目履修登録申請書と②合格証またはスコアカードの原本です。

(2) 異文化コミュニケーション学科

① 英語以外の外国語の履修方法

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科では、選択科目として英語以外の外国語を履修することができます。ロシア語またはインドネシア語を履修する場合は、1年次以降で各言語の「導入」の科目（初級1a, 1b, 2a, 2b）の4科目（4単位）をセットで履修します。科目名にaがつく科目は前期、bがつく科目は後期開講で、これらの科目は半期1単位で、半期ごとにそれぞれ成績がつきます。



⇒で結ばれた科目は、同一曜日・時限、同一担当者の科目をセットで履修します。

初級 1a, 1b：基礎となる文型や基礎的な語彙を修得し、「読む・書く・話す・聴く」の四技能を養います。

初級 2a, 2b：総合的な基礎力をつけ、簡単な作文を書いたり、自己紹介など身の回りのことを表

現できる力を養います。

選択 1a, 1b: 第三の外国語として、入門的な語学力・コミュニケーション力を養います。

注意事項

◎外国語科目の英語以外の外国語「導入」の科目（初級 1a, 1b, 2a, 2b）は同じ言語を履修しなければなりません。

② 資格試験による単位認定（英語以外の外国語）

高校までに、すでに英語以外の外国語を学修し、指定された資格試験で一定の基準を満たしている場合、入学年度当初に英語以外の外国語の初級 1a・1b および初級 2a・2b（4科目 4単位）の認定を行います。

下表の資格試験の基準を満たしている学生は、初級 1a・1b および初級 2a・2b の単位認定の申請を行ってください。

検定試験の種類	認定基準	認定 単位数	認定科目（単位数）
ロシア語能力検定試験	3級	4	ロシア語初級 1a (1) ロシア語初級 1b (1) ロシア語初級 2a (1) ロシア語初級 2b (1)
インドネシア語技能検定試験	D級	4	インドネシア語初級 1a (1) インドネシア語初級 1b (1) インドネシア語初級 2a (1) インドネシア語初級 2b (1)

注意事項

単位認定の取り扱いについて

- ◎同一言語の 4科目 4単位をセットで認定します。
- ◎同一基準において複数の検定試験で基準を満たしている場合も、認定はいずれか一種類の検定試験によります。
- ◎認定科目の成績評価は点数で表さず、「認定」とします。
- ◎認定された単位は、各年次の履修上限単位数には含めません。
- ◎認定された場合は、初級 1a・1b および初級 2a・2b を履修することはできません。別の外国語を学修する場合、2年次以降に選択 1a・1b を履修してください。

申請手続き

- 1) 申請期間内に提出書類を教務課に提出し、「資格試験による単位認定・既習者科目履修登録申請書類受領書」の交付を受けます。
- 2) 申請期間は、入学年度の 4月20日（休日の場合は前日）までとします。
- 3) 提出書類は①資格試験による単位認定・既習者科目履修登録申請書と②合格証またはスコアカードの原本です。

3. 海外語学研修

海外語学研修および交換留学

本学の国際交流センターでは、海外の大学等と協定を結び様々な留学プログラムを設け、留学を希望する学生のサポートを行っています。留学は実践的に語学力を伸ばす絶好の機会であると同時に、異文化圏での生活を肌で体験することによって、机上の学習では決して得ることのできない感動や体験を得ることができます。各プログラムの詳細については、国際交流事務課窓口・グローバルカウンターまで問い合わせてください。

留学プログラムを修了することによって単位認定される科目を次に紹介します。

① 海外語学短期研修

海外語学短期研修は、夏期留学プログラムを修了した場合に海外語学短期研修1に、春期留学プログラムを修了した場合に海外語学短期研修2に認定されます。

「夏期・春期留学プログラム」は、夏期・春期休暇を利用して海外の協定校等で約1ヶ月にわたって集中的な語学研修を行うものです。留学プログラム開設コース及び内容については令和3年11月現在のものです。

海外語学短期研修1 [2単位 (1～3年次担当)]

夏期留学プログラム開設コース：

社会知性開発 C I E オックスフォード (英国)

社会知性開発 ウーロンゴン大学 (オーストラリア)

研修期間は約3～5週間で、1日4～5時間程度の初級レベルの語学研修と課外活動を行います。実践的な会話を学修し、ホームステイやフィールドトリップなどとおして現地の文化・歴史・生活習慣を学びます。C I E オックスフォードでは現地学生とプロジェクトワークを行います。また、ウーロンゴン大学では語学研修終了後、シドニーにて2週間のインターンシップを体験します。

海外語学短期研修2 [2単位 (1～3年次担当)]

春期留学プログラム開設コース：

英 語 カルガリー大学 (カナダ)、ワイカト大学 (ニュージーランド)

中 国 語 北京大学 (中国)

コリア語 延世大学 (韓国)

ドイツ語 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク (ドイツ)

フランス語 トゥーレーヌ語学センター (フランス)

スペイン語 アリカンテ大学 (スペイン) / イベロアメリカーナ大学 (メキシコ)

※スペイン語コースはスペインとメキシコにおいて隔年で実施しています。

研修期間は4～5週間で、1日4時間程度の語学研修とアクティビティに参加します。英語コースの応募にはTOEFL®スコアが必要です。また、コースによっては文化施設見学やフィールドトリップ等、様々なプログラムが展開されています。

注意事項

- ◎詳細は年度により異なる可能性があります。各年度の募集要項を確認してください。
- ◎単位は希望者のみに与えられますので、希望者は研修参加が決定した後で定められた期日までに科目履修登録を行ってください。
- ◎評価は各プログラムの習熟度により本学の基準で行い、「認定」として単位を授与します。
- ◎それぞれの言語ごとに各1回単位を自由選択修得要件単位として修得することができます。ただし、4年次生の参加者及び同一留学プログラム同一言語コース2度目の参加者については対象となりません。
- ◎当該科目は留学プログラムに参加した次年度に選考される学術奨学生および卒業時に選考される川島記念学術賞の選考対象科目から除外されます。
- ◎異文化コミュニケーション学科の学生は、海外研修（2年次前期）に向けての準備期間と重複するため1年次の春期留学プログラムは参加できません。

② 海外語学中期研修

海外語学中期研修は、中期留学プログラムを修了した場合に認定されます。

「中期留学プログラム」は、本学協定校あるいは研修校に前期または後期の4～5ヶ月間留学し、外国人留学生を対象に開講されている集中語学コースに参加するプログラムです。留学プログラム開設コース及び内容については令和3年11月現在のものです。

海外語学中期研修1～8 [各2単位 (2～4年次担当)]

中期留学プログラム開設コース：

- 英 語 (前期)：カルガリー大学 (カナダ)、オレゴン大学 (米国)、ウーロンゴン大学 (オーストラリア)、ワイカト大学 (ニュージーランド)
- 英 語 (後期)：ネブラスカ大学リンカーン校 (米国)
- 社会知性開発 (後期)：ワイカト大学+インターンシップ (ニュージーランド)
- ド イ ツ 語 (前期)：ライプツィヒ大学 (ドイツ)
- フ ラ ン ス 語 (後期)：リュミエール・リヨン第2大学 CIEF (フランス)
- 中 国 語 (後期)：上海大学 (中国)
- ス ペ イ ン 語 (後期)：イベロアメリカーナ大学 (メキシコ)
- コ リ ア 語 (後期)：檀国大学 (韓国)

実践的なコミュニケーション能力の習得に加え、大学の正規授業を受けるために必要なアカデミックスキル (プレゼンテーション, ノート・テイキング, リサーチ, 論文の書き方等) や、異文化について学ぶことができます。

注意事項

- ◎詳細は年度により異なる可能性があります。各年度の募集要項を確認してください。
- ◎中期留学プログラムの留学期間は在学期間に算入されます。
- ◎単位は希望者のみに与えられますので、希望者は中期留学プログラムへの参加決定後、所定の期間に教務課で面接の上、中期留学プログラムにおいて修得を希望する科目の履修登録を行ってください。
- ◎学修成果の評価は、当該科目担当教員が「事前授業」、「事後授業」、「留学先の成績表」等に基づいて行い、「認定」として単位を授与します。
- ◎単位は自由選択修得要件単位として、英語では**海外語学中期研修1～8（英語）**（各2単位）、ドイツ語では**海外語学中期研修1～8（ドイツ語）**（各2単位）、フランス語では**海外語学中期研修1～8（フランス語）**（各2単位）、中国語では**海外語学中期研修1～8（中国語）**（各2単位）、スペイン語では**海外語学中期研修1～8（スペイン語）**（各2単位）、コリア語では**海外語学中期研修1～8（コリア語）**（各2単位）で、それぞれ最高16単位まで認定されます。
- ◎当該科目は留学プログラムに参加した次年度に選考される学術奨学生および卒業時に選考される川島記念学術賞の選考対象科目から除外されます。
- ◎異文化コミュニケーション学科の学生は2年次前期及び後期の中期留学プログラムには参加できません。

③ 交換留学

交換留学には、「長期交換留学プログラム」（8ヶ月～1年間）と「セメスター交換留学プログラム」（4～5ヶ月間）の2種類があります。どちらも本学協定校にて、正規授業科目を履修するプログラムです。留学中に修得した単位は、審査のうえ本学の単位に振り替えることができます。ただし、上限単位があります。また、国際交流協定に基づいて留学先大学への学費の一部または全部が免除されます（集中語学研修授業料は除く）。

「長期交換留学プログラム」には、第1期と第2期があり、募集期間・出発時期が異なります（第1期6月下旬募集締切・翌年1～3月出発、第2期11月上旬募集締切・翌年4～6月出発）。

「セメスター交換留学プログラム」の場合は、留学期間が1学期間（9月～12月）に限定されますが、こちらも留学先大学の学費が免除されるため、経済的負担を抑えることができます（集中語学研修はありません）。

長期交換留学プログラム第1期：

英 語：ウーロンゴン大学（オーストラリア）、ワイカト大学（ニュージーランド）
中 国 語：上海大学、西北大学（中国）、国立中山大学（台湾）
モンゴル語：モンゴル国立大学（モンゴル）
コ リ ア 語：檀国大学（韓国）
ド イ ツ 語：マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク（ドイツ）
フ ラ ンス 語：リヨン政治学院（フランス）

長期交換留学プログラム第2期：

英 語：ネブラスカ大学リンカーン校、サスケハナ大学、オレゴン大学（米国）、カルガリー大学（カナダ）、ダブリン大学トリニティカレッジ（アイルランド）、ブリストル大学（英国）
ス ペ イ ン 語：イベロアメリカーナ大学（メキシコ）

 Semester 交換留学プログラム：

英 語：ネブラスカ大学リンカーン校、サスケハナ大学、オレゴン大学（米国）、カルガリー大学（カナダ）、ダブリン大学トリニティカレッジ（アイルランド）

注意事項

- ◎プログラム及び内容については令和3年11月現在のものです。詳細は年度により異なる可能性があります。各年度の募集要項を確認してください。
- ◎交換留学プログラムの留学期間は在学期間に算入されます。
- ◎交換留学プログラムにおける単位認定は、所属学部によって規定が異なります。国際交流事務課窓口・グローバルカウンター及び所属学部の教務課にて確認してください。
- ◎認定された科目は留学プログラムに参加した次年度に選考される学術奨学生および卒業時に選考される川島記念学術賞の選考対象科目から除外されます。
- ◎異文化コミュニケーション学科の学生は2年次の長期交換留学プログラム（第2期）及び Semester 交換留学プログラム、3年次の長期交換留学プログラム（第1期）には参加できません。

VI 専門科目

1. 国際コミュニケーション学部のカリキュラムの特色

国際コミュニケーション学部に入學したみなさんは、さまざまな目的をもち、将来の夢や希望をかなえるため、大学生活での勉学に意欲を燃やしていることでしょう。そして最大の関心は、大学ではどのような方法で授業がなされ、どのような科目を学修できるのかという点だと思います。

国際コミュニケーション学部では、みなさんの学修のために、4年間の修業年限での総合的な教育計画を作成しています。これはカリキュラムとよばれ、大学で学ぶための効果的な学修計画です。国際コミュニケーション学部には、次のような特色があります。

(1) 他学科や他学部との相互交流「関連科目」

国際コミュニケーション学部のカリキュラムの特長は、日本語学科と異文化コミュニケーション学科が姉妹のような関係を築き、相互交流を図っていることです。互いの持ち味をいかした科目を補完的なプログラムとして位置づけ、「日本文化入門」「日本語学入門／日本語入門」「異文化理解の実践」が、それぞれの学科の専門科目の基礎科目に組み込まれています。

また、神田キャンパスに設置されている法学部、商学部と連携し、シナジー効果を図る科目が関連科目として設置されていることも特色です。人文科学系の科目が多い国際コミュニケーション学部にあつて、法学部や商学部設置された社会科学系の専門科目を、法学部や商学部の学生と一緒に受講することで、相互の交流を図っています。

(2) 大学での学修の方法を修得する「転換・導入科目」

1年次においては、「専修大学入門ゼミナール」(前期2単位)が開講されています。少人数制の「専修大学入門ゼミナール」では、高校までの学習から大学における学修への転換を図り、ノートのとり方、資料の収集の仕方、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方といった大学での学修に求められる基本的技法を身につけることを目標としています。またこの科目では、専修大学の学生としての自覚を持つため、専修大学の歴史も学びます。

(3) 一定の科目群を設定し比較的自由に履修科目を選択できる「柔軟な履修科目の選択」

異文化コミュニケーション学科の専門科目では、必修科目が少なく、一定の科目群から比較的自由に履修科目を選択できます。選択必修科目群(基礎科目)の中から一定の単位を修得しなければなりません。必修科目を除けば、すべて選択科目となっており、自分の学修の目的と関心に応じて科目を履修することができます。また、一定の単位を修得しても、選択科目は履修することが可能です。一定の単位数を超えた分の単位は、自由選択修得要件単位として、卒業要件単位に組み込むことができます。(詳しくは、pp.87~91を参照してください。)

(4) 教員と身近に研究・勉学する「少人数教育としての多彩なゼミナールの開設」

国際コミュニケーション学部では、4年間を通して、少人数教育科目を設置しています。詳細については、「3. 日本語学科での学び方」(pp.71~79)「4. 異文化コミュニケーション学科での学び方」(pp.80~91)を参照してください。

2. 日本語学科での学び方

(1) 日本語学科の特色

多くの言語の中で、日本語の世界は一見、他とは隔絶した特異な存在であり、そこで培われた文学や文化も孤立した存在のように思えるかもしれません。しかし日本語は古くから、他の言語や文化からさまざまな要素を取り入れ、そこに新しい生命を吹き込むことにより、豊饒な世界を作り上げてきた言語です。

その日本語を深く考察することは、自らを客観的にとらえ、世界に開かれた視点を得ることにほかならないといえます。

本学科の教育課程は、日本語学（国語学）・言語学を背景とし、本学の教育基本理念である「社会知性の開発」に基づいたカリキュラムによって構成されています。本学科では、バランスの取れた日本語運用能力を培うことを第一の目標とし、そのために日本語の性質や特徴の把握はもとより、他言語との関わりという視点も取り込んだ、網羅的で広汎な日本語の教育、コミュニケーション能力の向上に資する教育を目指しています。

この教育を通じて本学科では、次のような人材の育成を目標とします。

- ① 自国の言語に対する深い理解と認識を持った人材
- ② 情報化社会で活躍できる知識と技術を備えた人材
- ③ 日本語学に関する豊かな知見を身につけ、国際社会でも活躍できる人材

入学後、1年次では、日本語の基本的な性質や構造を理解し、日本語を学問的に分析する方法を学びます。2年次以降は、その知識を盤石のものとし、上記①～③の目標を目指して専門的な知見を身につけていきます。また、授業での考察結果の発表や、ゼミナールで提示される課題についての検討や討論など、実際の日本語運用能力の育成も重視して身につけていきます。

(2) 1年次の学修

- ① 1年次においては、日本語研究の考え方と現状を知るための「日本語学入門1」（前期2単位）、「日本語学入門2」（後期2単位）、「日本語学総合」（前期2単位）、日本語に関する統計データを実際にPCを使って分析する「日本語情報処理1」（前期2単位）、「日本語情報処理2」（後期2単位）を《必修科目》として学びます。

これらの必修科目は、日本語学科での学修の基礎となるものですので、1年次に講義内容を確実にマスターしていきましょう。

また、異文化コミュニケーション学科と共通の科目として、日本文化の理解に関わる科目「日本文化入門」（前期2単位）も《必修科目》として学びます。

- ② このほかに、1年次から履修が可能な《選択科目》には、次のものがあります。

第1に、日本語学科での学修の基礎となるものとしては、「異文化理解の実践」、「言語学概論」、「メディア日本語論1」、「メディア日本語論2」、「日本語表現論1」、「日本語表現論2」を履修できます。

「異文化理解の実践」（後期2単位）は、前期の必修科目である「日本文化入門」で学んだことを土台として、異文化コミュニケーション学科と共通の内容を学びます。「言語学概論」（前期2単位）は、日本語だけでなく世界の言語を広く見渡して研究するための視点を学びます。「メディア日本語論1」、「メディア日本語論2」（ともに後期2単位）は、新聞社校閲部門やテレビ放送の現場から見た日本語の運用について、日本語学の立場から観察・学修するものです。「日本語表現論1」、「日本

「**語表現論2**」は、ナレーションや演劇の業界でプロとして活躍する講師をお招きし、その日本語運用の技について、日本語学の立場から観察・学修するものです。

第2に、日本語学科での学修の**基幹**となる科目としては、「文化とコミュニケーション1」、「文化とコミュニケーション2」、「日本語の歴史的研究1」、「日本語の歴史的研究2」、「日本語の社会的研究1」、「日本語の社会的研究2」、「日本語教授法A-1」、「日本語教授法A-2」を履修できます。

「**文化とコミュニケーション1**」（前期2単位）、「**文化とコミュニケーション2**」（後期2単位）は、文化との関わりという視点をもちながら日本語コミュニケーション論を学びます。「**日本語の歴史的研究1**」（前期2単位）、「**日本語の歴史的研究2**」（後期2単位）は、古代日本語から現代日本語に至るまでの変化の過程を学びます。「**日本語の社会的研究1**」（前期2単位）、「**日本語の社会的研究2**」（後期2単位）は、社会言語学の初歩を学びます。「**日本語教授法A-1**」（前期2単位）、「**日本語教授法A-2**」（後期2単位）は、日本語を母語としない人への日本語教授の初歩を学びます。

第3に、日本語学科での学修に深く**関連**する科目としては、「中国文学講義1」、「中国文学講義2」、「日本文学概論（古典）1」、「日本文学概論（古典）2」、「日本文学概論（近現代）1」、「日本文学概論（近現代）2」、「書道1」、「書道2」を履修できます。これらの科目は、国語の教職課程を履修している人にとっては、特に重要な科目となります（詳しくは、「教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック」をご覧ください）。

「**中国文学講義1**」（前期2単位）、「**中国文学講義2**」（後期2単位）は、日本語に大きな影響を与えてきている中国語とその文学（漢文を含む）について学びます。「**日本文学概論（古典）1**」（前期2単位）、「**日本文学概論（古典）2**」（後期2単位）は、日本語によって表現されてきた古典文学について、文学史も含めて学びます。「**日本文学概論（近現代）1**」（前期2単位）、「**日本文学概論（近現代）2**」（後期2単位）は、日本語によって表現されている近現代の文学について、文学史も含めて学びます。「**書道1**」（通年2単位）、「**書道2**」（通年2単位）は、日本語の文字・表記に深く関連している「書」について実践的に学びます。

（3）2年次の学修

- ① 2年次からの専門科目の特徴の一つ目は、《**必修科目**》として**ゼミナールが始まる**ということです。

ゼミナールは、2年次から4年次まで同じ教員のゼミナールに所属することを原則としています。そして、卒業論文は、4年次のゼミナールの担当教員に指導を受けることになっています。ゼミナールは、日本語学科の全教員が開講しており、どの教員のゼミナールに所属するかは、みなさんが深く追求したい分野を自分で考えた上で申し込むこととなります。ゼミナールへの申し込み時期は、1年次の後期です。ゼミナールを選ぶための「ゼミ見学」や具体的な申し込み方法については、別途in Campus等で案内を出しますので見逃さないようにしてください。

2年次で、《**必修科目**》として履修するのは、「**ゼミナール1**」（前期2単位）、「**ゼミナール2**」（後期2単位）です。

- ② 2年次からの専門科目の特徴の二つ目は、《**選択科目**》となっている**専門科目が増える**ことです。

第1に、日本語学科での学修の**基幹**となる科目としては、「日本語の音声1」、「日本語の音声2」、「日本語の音韻・表記1」、「日本語の音韻・表記2」、「日本語の語彙・意味1」、「日本語の語彙・意味2」、「日本語の文法1」、「日本語の文法2」、「現代日本語の研究1」、「現代日本語の研究2」、「日本語の文献研究1」、「日本語の文献研究2」、「コーパス日本語学1」、「コーパス日本語学2」、「日本語統計・情報処理」、「日本語教材研究1」、「日本語教材研究2」を履修できます。

「日本語の音声1」（前期2単位）、「日本語の音声2」（後期2単位）、「日本語の音韻・表記1」（前期2単位）、「日本語の音韻・表記2」（後期2単位）、「日本語の語彙・意味1」（前期2単位）、「日本語の語彙・意味2」（後期2単位）、「日本語の文法1」（前期2単位）、「日本語の文法2」（後期2単位）は、それぞれ、1年次の《必修科目》であった「日本語学入門1」,「日本語学入門2」で学んだことを土台として、日本語学の中核的な分野について、基幹となる知識を身に付けるものです。「現代日本語の研究1」（前期2単位）,「現代日本語の研究2」（後期2単位）,「日本語の文献研究1」（前期2単位）,「日本語の文献研究2」（後期2単位）,「コーパス日本語学1」（前期2単位）,「コーパス日本語学2」（後期2単位）は、それぞれ、日本語学をより実践的に研究する方法について、その基幹となる知識・技能を身に付けるものです。「日本語統計・情報処理」（前期又は後期で2単位）は、1年次の《必修科目》であった「日本語情報処理1」,「日本語情報処理2」で学んだことを土台として、より高度な日本語に関する統計データをPCを用いて分析します。「日本語教材研究1」（前期2単位）,「日本語教材研究2」（後期2単位）は、日本語を母語としない人への日本語教授について基幹となる知識と技能を身に付けます。

第2に、日本語学科での学修の**発展**となる科目としては、「社会言語学1」（前期2単位）,「社会言語学2」（後期2単位）,「日本語の語用論1」（前期2単位）,「日本語の語用論2」（後期2単位）,「対照言語学」（後期2単位）,「学習文法研究1」（前期2単位）,「学習文法研究2」（後期2単位）,「第二言語習得研究1」（前期2単位）,「第二言語習得研究2」（後期2単位）,「日本語言語政策史1」（前期2単位）,「日本語言語政策史2」（後期2単位）を履修できます。

これらの科目は、日本語学という学問を実社会の様々な場面や、研究分野、教育分野に応用する際の「礎」となる発展的な内容を学修するものです。なかでも、「学習文法研究1」,「学習文法研究2」,「日本語言語政策史1」,「日本語言語政策史2」は、専修大学の日本語学科が世に先駆けて開講した科目です。

第3に、日本語学科での学修の**応用**となる科目としては、「日本語教育実習C」,「日本語学応用実習」を履修できます。

「日本語教育実習C」（2単位）は、海外（英語圏）での日本語教育実習（6週間以上）に参加した学生に対して、参加の翌年度に単位認定するものです。「日本語学応用実習」（1単位）は、国内外での日本語学の応用に関わる実習（30時間以上）に参加した学生に対して、参加の翌年度に単位認定するものです。

第4に、日本語学科での学修に**関連**する科目として、異文化コミュニケーション学科の専門科目と共通のものを履修できるようになることです。具体的には、「地域研究（北米）」,「地域研究（ラテンアメリカ）」,「地域研究（ヨーロッパ）」,「地域研究（アジア）」,「地域研究（中国）」,「文化の衝突と融合」,「移動と交流の文化史」,「比較文化」,「宗教と文化」,「思想と文化」,「多文化共生論」（いずれも後期2単位）を履修できます。

（4）3年次の学修

- ① 3年次で、《必修科目》として履修するのは、「ゼミナール3」（前期2単位）,「ゼミナール4」（後期2単位）です。
- ② 3年次からの専門科目の特徴の一つ目は、《選択科目》として、日本語を母語としない人への日本語教授に関する科目のうち、より実践的な科目が履修可能になることです。

第1に、日本語学科での学修の**発展**となる科目として、「日本語教育実習A」,「日本語教授法B-1」,

「日本語教授法B-2」を履修できます。

「日本語教育実習A」（4単位）は、通年で授業に出席することに加え、後期に日本国内の日本語学校等での日本語教育実習（30時間以上）に参加した学生に対し単位認定するものです。「日本語教授法B-1」（前期2単位）、「日本語教授法B-2」（後期2単位）は、日本語を母語としない人への日本語教授法について発展的な内容を学修します。

第2に、日本語学科での学修の応用となる科目として、「日本語教育実習B」を履修できます。

「日本語教育実習B」（通年4単位）は、通年の授業を受けながら、夏休みに海外（英語圏以外）での日本語教育実習に参加するものです。

- ③ 3年次からの専門科目の特徴の二つ目は、日本語学科での学修に関連する科目としての《選択科目》の中で、異文化コミュニケーション学科の専門科目と共通のものが2年次よりも増えるとともに、法学部、商学部の専門科目の一部が履修できるようになることです。

異文化コミュニケーション学科と共通の専門科目については、2年次から履修可能な科目に加えて、「越境する文化」、「環境と文化」、「資源としての文化」、「現代社会と多様性」、「植民地と現代世界」、「現代文化論」（いずれも前期2単位）が履修可能になります。また、法学部の専門科目の中から「国際政治の基礎」（前期2単位）、「国際関係論Ⅰ」（前期2単位）、「国際関係論Ⅱ」（後期2単位）、商学部の専門科目の中から「ビジネス英語A」（前期2単位）、「ビジネス英語B」（後期2単位）を履修することができます。

（5）4年次の学修

- ① 4年次で、《必修科目》として履修するのは、「ゼミナール5」（前期2単位）、「ゼミナール6」（後期2単位）、「卒業論文」（通年8単位）です。
- ② 4年次の学修の最大の特徴は、《必修科目》としての「卒業論文」に取り組むことです。

4年次のゼミナールの担当教員が、「卒業論文」の指導教授になります。

日本語学科では、「卒業論文」を4年間の専門学修の集大成と位置付けています。とりわけ、2年次からのゼミナールでの学修において身に付けた様々な能力を発揮しながら、自分の興味あるテーマについて深く研究し、論理性のある学術論文として取りまとめます。提出後は、指導教員による面談形式の「口述試験」を受け、試験に合格したと判断されると、8単位を修得したことになります。

「卒業論文」の指導時間は、時間割上では曜日や時限を指定していません。「定時外」といって、必要ときに指導教員にアポイントメントをとって、教員の研究室等でマンツーマンの論文指導を受けることを原則としています。

なお、卒業論文の分量、体裁、提出方法等は、卒業年度に提示しますので、参照してください。

（6）履修モデル例

日本語学科では、みなさんの将来の進路や学ぶ目的に合わせて、専門科目を組み合わせることができるように、履修モデル例を提示しています。p.79の「日本語学科 履修モデル例」を参照してください。

なお、これらはいくまでも履修科目の組み合わせの一例であり、ほかの組み合わせで履修することも可能です。

- ① 将来の進路に合わせた履修モデル例

◇「国語教員」指向型

中学校、高等学校の国語教員免許取得をめざすモデルです。教職課程の単位修得と並行しながら

ら、古典語・現代語の幅広い教養を身につけ、日本語の奥深さと面白さを生徒に伝える能力を磨きます。

◇「日本語教師」指向型

国内や海外で日本語を学ぶ人々に、ことばの意味や文法、表記などをわかりやすく伝える技術を学びます。一定以上の単位を修得すると、専修大学からの修了証明書を発行します。この修了証明書は、国の定める日本語教育に必要な「言語と教育」領域を含む一定数以上の専門科目単位を取得していることを証明するものです（法務省告示校である日本語学校等の教壇に立つ際の資格審査で必ず提示を求められます）。

◇「高度日本語専門職」志向型

日本語の深い理解と造詣を背景にした専門職をめざすモデルです。校閲、ナレーション、放送、演劇など活躍の道は多彩。協力講座で見聞する第一線の人々のことばにも大きな学びがあるはずです。

② 学ぶ目的に合わせた履修モデル例

◇「社会言語学」重点型

誰もが使うようになった業界ことば、交通網の発達によって広がったことばなど、言語と社会の驚くべき関係性をひも解くのが社会言語学。音声学や統計学の手法も駆使し、科学的に探究していきます。

◇「コーパス日本語学」重点型

例えば、“卵”“玉子”“たまご”の使い分けとは？膨大なデータを蓄積した日本語コーパスを活用し、古典から現代に至ることばの変遷を探究。日本語の全体像を知るとともに情報処理能力もつきます。

◇「古典日本語」重点型

古代から現代に至る日本語がどのようなメカニズムで変化してきたのかに関心を持つ人向けのモデル。文法の変化や、発音の変化による仮名遣いの混乱などを考察します。

◇「多言語学修」重点型

日本語の言語学的な探究とともに、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・スペイン語・中国語・アラビア語など多様な言語の学びを選択。語学力をつけると同時に、比較文化的な視点も養います。

(7) 卒業後の進路

日本語学科の卒業生の進路は、多岐にわたっています。就職先は、一般企業が最も多く、それに、国家公務員・地方公務員が続きます。専門職としては、中学校・高等学校教員（国語科）、図書館司書、日本語教師として就職した卒業生も多くいます（従来の文学部日本語学科での実績です）。

また、日本語学や日本語教育学をより専門的に研究するために大学院に進学する人や、言語聴覚士を目指して専門学校に進む人もいます。

就職についての相談は、学内の「キャリア形成支援課」で個別相談に応じているほか、各種就職支援プログラムを用意しています。

また、日本語学科主催の「日本語教師キャリアガイダンス」も実施しています。

(8) 卒業要件と科目の履修方法

以下では、大学を卒業するために必要な諸要件と科目の具体的な履修方法について概説します。以下の説明をよく読み、それに沿って履修計画を立ててください。

1. 卒業要件

一般に大学を卒業するためにはいくつかの要件が必要ですが、それに加えて、日本語学科の学生には、p.23の表に示した要件を充たすことが要求されます。次項「科目の履修方法」を読み、具体的な履修方法を理解した上でこの表を改めて見直し、要求されるものが何であるかを確認してください。

2. 科目の履修方法

日本語学科の学生は、卒業までに転換・導入科目から必修科目2単位、教養科目10単位、外国語科目8単位、専門科目72単位、自由選択修得要件単位32単位、合計124単位以上を修得しなければなりません。

なお、履修にあたっては、上記に加え、以下の二点にも注意を払ってください。

第一は、配当年次が指定されている科目については、その年次に履修しなければならないという点です。また、指定された配当年次が複数の学年にわたる科目や、配当年次の指定がない科目でも、履修上限単位数（1～3年次44単位、4年次48単位）を超えない範囲で、なるべく低年次で履修するようにしてください。

第二は、同一名称の科目は原則として一つしか履修できないという点です。一度に同一名称の科目を二つ以上履修登録することはできないし、一度単位を修得した科目をもう一度履修することもできません。

上記の点を考慮し、各人の興味と関心に従って自由に独創的な時間割を組んでください。具体的な履修方法については以下に詳説しますが、まず pp.27～28の表を概観し、カリキュラムの大枠を頭に入れておいてください。

(1) 転換・導入科目、教養科目、外国語科目の履修方法

転換・導入科目、教養科目、外国語科目にはそれぞれ必修科目として指定されている科目があるので、履修に際しては注意しなければなりません。転換・導入科目は pp.40～44に、教養科目は pp.46～52に、外国語科目については pp.54～67に詳しい説明があるので、それを参考にして以下を確認してください。

1) 転換・導入科目

① 専門入門ゼミナール

「専門入門ゼミナール」は、1年次に後期2単位を必ず修得しなければなりません。

② 上記以外の転換・導入科目

上記以外の転換・導入科目は「必修」科目のほか選択科目として履修することができます。修得した単位は自由選択修得要件単位に算入することができます。

2) 教養科目

① 人文科学基礎科目・社会科学基礎科目・自然科学系科目・融合領域科目

人文科学基礎科目・社会科学基礎科目・自然科学系科目・融合領域科目の中から8単位修得しなければなりません。ただし各科目群の配当年次はそれぞれ異なるので、履修する際には注意してください。

人文科学基礎科目と社会科学基礎科目は1、2年次にしか開講されていません。したがって人文科学基礎科目と社会科学基礎科目は3、4年次で再履修することはできません。また、融合領域科目は2年次以降にしか開講されていません。自然科学系科目は1年次から4年次まで開講されています。

② 保健体育系科目

保健体育系科目は、2単位を必ず修得しなければなりません。

③ 10単位を超えて修得した教養科目の単位は自由選択修得要件単位に算入することができます。

3) 外国語科目

① 英語

1年次で英語4科目を履修し、前期2単位・後期2単位の計4単位を必ず修得しなければなりません。A群の Basics of English (RL) 1a (前期), 1b (後期) または Intermediate English (RL) 1a (前期), 1b (後期) の2科目と、B群の Basics of English (SW) 1a (前期), 1b (後期) または Intermediate English (SW) 1a (前期), 1b (後期) の2科目を履修します。

② 英語以外の外国語

1年次でドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語、インドネシア語、コリア語の7つの言語の中から1つを選択して、前期2単位・後期2単位の計4単位を必ず修得しなければなりません。初級 1a (前期), 初級 1b (後期) の2科目と、初級 2a (前期), 初級 2b (後期) の2科目を履修します。

③ 上記以外の外国語科目は選択科目として履修することができます。修得した単位は自由選択修得要件単位に算入することができます。

(2) 専門科目の履修方法

専門科目として開講される科目名称等については p.28 の「国際コミュニケーション学部日本語学科専門科目一覧」をご覧ください。科目の中には、必ず修得しなければならない必修科目（上記専門科目一覧で○印のついた科目）、多くの科目の中から自分の学びたいものを自由に選べる選択科目（△印のついた科目）の2通りがあります。なお、科目の中には、年間を通して授業を行う通年科目と、半年で完了する半期科目があるので注意してください。

① ゼミナール

ゼミナールは、教員と学生が同じテーブルを囲み、設定されたテーマにとりくむ少人数の専門的な演習科目です。そのテーマや内容は年度ごとに示され、その運び方は教員によって異なるので、自分が何を勉強したいのかよく自覚した上で、複数展開されるゼミナールの中から、自分にもっともふさわしいものを選んでください。

2年次から4年次に開講されるゼミナールは、すべての学生にとって必修です。したがってゼミナールを計6科目（12単位）修得しなければ卒業できません。ゼミナールの再履修については、「(4) 再履修について」を参照してください。

② 「日本語教育実習A」および「日本語教育実習B」「日本語教育実習C」

「日本語教育実習A」は、3・4年次生が対象となっています。履修者は、日本語教育機関の協力によって実習を行うことになっており、日本語を母語としない人たちとの間のコミュニケーションスキル向上も目指しています。

「日本語教育実習B」は、3・4年次生を対象とした、日本語教育のための実習形式での授業です。授業の一環として、毎年夏休み後半の9月に、韓国の提携校において教育実習を行っています。また、韓国での実習までに模擬授業を行ってより効果的な授業を模索したり、帰国後には実習の様子を撮影したビデオを見ながら、改善すべき点などについて議論を行い、日本語教育についてより深く考える機会としています。

そのほかに、春休み中の1月末または2月初めからの6週間、英語圏の提携校において日本語教育実習を行い、その成績に応じて単位を読み替えて「日本語教育実習C」が認定されるという単位取得の道も開かれています。「日本語教育実習C」は、2・3年次生を対象としたもので、募集人数は年度によっても異なりますが、毎年数名を募集しています。例年、前期に説明会を開き、7月初旬頃に募集開始となります。

③ 卒業論文

卒業論文は、4年次生が大学生生活の総決算として制作する論文です。4年次生は卒業論文のために特に指導教員の指導を受けますが、早い人は1年次の終り頃から題目の選定にかかり、精進してとりかかる一大事業です。レポートとはちがって、たとえわずかにせよ、学問のレベルを突破しようとする学生の野心作でなければなりません。それだけに苦労も多いので、4年次はほとんどこれに専心できるような態勢をととのえておく必要があります。

所定の単位を修得し、この卒業論文を提出し、論文についての口述試験に合格して、はじめて学士(文学)の学位が与えられることになります。

(3) 自由選択修得要件単位となる科目の履修方法

自由選択修得要件単位となる科目とは、上記の卒業要件単位をすべて修得した上で、さらに履修する科目の総称です。したがって自由選択修得要件単位に算入されるものは以下の7つです。

- a. 転換・導入科目のうち卒業要件単位を超えて修得した科目の単位。
- b. 教養科目のうち卒業要件単位を超えて修得した科目の単位。
- c. 外国語科目のうち卒業要件単位を超えて修得した科目の単位。
- d. 卒業要件単位を超えて修得した日本語学科開講の専門科目の単位。
- e. 教職・司書・司書教諭・学校司書課程科目の単位。ただし8単位まで。(詳しくは『教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック』参照)
- f. 日本語学科の学生に受講が認められている全学公開科目の単位。

自由選択修得要件単位となる科目の履修方法は、原則として完全に学生各自の裁量に委ねられます。それぞれの興味と関心に応じ、自由に独創的な時間割を組むことができます。ただし、卒業までに自由選択修得要件単位数が32単位に達していなければならないことを忘れないでください。

(4) 再履修について

① 必修科目の再履修

日本語学科の学生に課されている専門科目の必修単位数は13科目32単位です。何らかの理由でこれらの単位を修得できなかった場合、必ず次の年次で同一名称の科目を再履修しなければなりません。再履修科目はすべてに優先して履修しなければならない点を銘記しておいてください。

ゼミナールは、2年次で「ゼミナール1・2」、3年次で「ゼミナール3・4」、4年次で「ゼミナール5・6」がそれぞれ必修科目となっており、同一年次に複数のゼミナールを履修することは原則として認められていないことから、例えば2年次で「ゼミナール1」の単位が修得できなかった場合、その単位は5年次に再履修することになります。この点は注意を要します。

② 選択科目の再履修

選択科目の単位を修得できなかった場合は、必ずしも同一名称の科目を再履修する必要はなく、別の科目の単位を修得して卒業要件を充たすことも可能です。

日本語学科 履修モデル例

科目区分	科目名	将来の進路に合わせた履修モデル例			学ぶ目的に合わせた履修モデル例				
		「国語教員」志向型	「日本語教師」志向型	「高度日本語専門職」志向型	「社会言語学」重点型	「コーパス日本語学」重点型	「古典日本語」重点型	「多言語学習」重点型	
		必修科目：○、選択科目：☆							
基礎科目	日本文化入門	○	○	○	○	○	○	○	
	日本語学入門1	○	○	○	○	○	○	○	
	日本語学入門2	○	○	○	○	○	○	○	
	日本語学総合	○	○	○	○	○	○	○	
	日本語情報処理1	○	○	○	○	○	○	○	
	日本語情報処理2	○	○	○	○	○	○	○	
	メディア日本語論1			☆	☆	☆		☆	
	メディア日本語論2			☆	☆	☆		☆	
	日本語表現論1	☆		☆			☆		
	日本語表現論2	☆		☆			☆		
	言語学概論		☆		☆	☆		☆	
	異文化理解の実践		☆		☆	☆		☆	
	基幹科目	ゼミナール1	○	○	○	○	○	○	○
		ゼミナール2	○	○	○	○	○	○	○
		文化とコミュニケーション1			☆	☆			
		文化とコミュニケーション2			☆	☆			
		日本語の歴史的研究1	☆					☆	
		日本語の歴史的研究2	☆					☆	
		日本語の社会的研究1			☆	☆	☆		☆
		日本語の社会的研究2			☆	☆	☆		☆
		日本語の文献研究1						☆	
		日本語の文献研究2						☆	
		日本語統計・情報処理				☆	☆		
		コーパス日本語学1	☆	☆			☆		☆
		コーパス日本語学2	☆	☆			☆		☆
		日本語の音声1	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆
日本語の音声2		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
日本語の音韻・表記1		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
日本語の音韻・表記2		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
日本語の語彙・意味1		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
日本語の語彙・意味2		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
日本語の文法1		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
日本語の文法2		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
現代日本語の研究1		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
現代日本語の研究2		☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	
日本語教材研究1			☆						
日本語教材研究2			☆						
日本語教授法A-1			☆						
日本語教授法A-2		☆							
発展科目	ゼミナール3	○	○	○	○	○	○	○	
	ゼミナール4	○	○	○	○	○	○	○	
	社会言語学1			☆	☆			☆	
	社会言語学2			☆	☆			☆	
	日本語教育実習A		☆						
	日本語の語用論1			☆	☆	☆		☆	
	日本語の語用論2			☆	☆	☆		☆	
	対照言語学		☆			☆		☆	
	学習文法研究1	☆					☆		
	学習文法研究2	☆					☆		
	第二言語習得研究1		☆		☆	☆		☆	
	第二言語習得研究2		☆		☆	☆		☆	
	日本語言語政策史1	☆					☆		
	日本語言語政策史2	☆					☆		
日本語教授法B-1		☆							
日本語教授法B-2		☆							
応用科目	ゼミナール5	○	○	○	○	○	○	○	
	ゼミナール6	○	○	○	○	○	○	○	
	卒業論文	○	○	○	○	○	○	○	
	日本語教育実習C		☆						
	日本語教育実習B		☆						
	日本語学応用実習			☆	☆	☆			
関連科目	日本文学概論(古典)1	☆					☆	☆	
	日本文学概論(古典)2	☆					☆		
	日本文学概論(近現代)1	☆					☆		
	日本文学概論(近現代)2	☆					☆		
	中国文学講義1	☆					☆		
	中国文学講義2	☆					☆		
	書道1	☆							
	書道2	☆							
	地域研究(中国)			☆	☆	☆	☆	☆	
	比較文化		☆				☆	☆	
	資源としての文化	☆		☆	☆	☆	☆		
	現代文化論	☆	☆	☆	☆		☆		
	ビジネス英語A			☆		☆		☆	
	ビジネス英語B			☆		☆		☆	

専門科目

3. 異文化コミュニケーション学科での学び方

(1) 異文化コミュニケーション学科の特色

私たちの生活は、さまざまなコミュニケーションにあふれています。人が生まれてから死を迎えるまで、日常の生活では朝起きてから夜寝るまで、社会生活やプライベートな生活を送るにあたり、私たちはコミュニケーションから逃れることはできません。

また、コミュニケーションは文化と密接な関係を持っています。ですから、コミュニケーションは一様ではありえないのですが、私たちの住む地域では日本語のほか、外国語は大半の人びとが英語を学んできました。

しかしながら、e-mail や SNS 等の情報通信テクノロジーの発達により、今や私たちは、場所や時間に制約されることなく、ほんのわずかな時間で、世界の出来事を知り、また自らのメッセージを世界に向けて発信することができるようになりました。それはまた、私たちが多言語的な国際社会につながっているという意識を強めるとともに、言語だけでなく、それらの言語と結びついた異文化が日常生活の細部にまで入り込んでいるという状況をデフォルトとせざるをえなくしています。

したがって、コミュニケーションを学ぶということは、世界と世界の文化を学ぶことにもつながるのである。その意味において、異文化コミュニケーション学科は、グローバル化の進む社会の中で行動し、活躍できる人材を育てることを目標としています。しかしながら、地球的規模で国際化が進むなか、世界のどここの片隅にいたとしても、英語や英語以外の言語に関する知識やコミュニケーションのあり方を修得し、世界中にいる他者への思いを抱くようになること、そしてグローバルな視点による思考を身につけることは、みなさんにとって、国際性やグローバル化に関係する仕事に就くか否かにかかわらず、一市民として日常生活を送るにあたって、生涯にわたる大きな財産になることは間違いありません。

私たちが共に学ぼうとしている異文化とは、現代社会のさまざまな地域における文化が、邂逅し交流して生じる事態や状況について、そしてそこから生まれる問題のありかを的確に把握・理解し、自らの立場のみを考えるのではなく、他者のことばに耳を傾け、最善と考えられる問題解決策を見つけることのできる意識、つまり、地球市民（グローバル・シチズン）としての意識を養成するものなのです。

そうした目的を効果的な学修により達成するために、異文化コミュニケーション学科では、〈地域〉〈文化〉〈コミュニケーション〉の3つを柱として科目を設置しています。〈地域〉は、言語とその言語が使用される地域を中心として、それらの地域の特性などを学修していく枠組を成しています。〈文化〉は、言語別による学修を離れ、文化の意味、文化の特性などを学修することによって、文化を学ぶことの意義を修得していく枠組です。〈コミュニケーション〉は、言語そのものの特質や、言語と言語の相違、あるいはことばを用いる言語活動だけではなく、非言語的なコミュニケーションへのまなごしを培う枠組として設けられています。

それぞれの枠組に組み込まれた科目群の基本的な理解と基礎知識の修得とともに、そうした知識を応用できる幅広く柔軟な思考力を身につけるために、専門科目を、基礎・基幹・発展・応用と分けて学修の指針を示しています。これらの階層は必ずしも年次と関連するものではなく、みなさんが学修計画を立て、自分なりの学修を進めていくための指針です。たとえば、基幹科目の「世界の文化を知る（北米）」を受講したあと、それに関連する発展科目の「地域研究（北米）」を履修し、さらに応用科目の「テーマ研究（北米）」という科目を履修していくことで、段階を踏みつつ、北米地域の英語文化圏にまつわる文化事象を学修することが可能となっています。また、発展科目と応用科目は半期ごとに配置されていますので、2年次後期に学修したものと異なるものを、3・4年次にも発展・応用と学修することができるように

なっています。さらに学問的な緊張感のなかで密度の高い学修を実現するために、教員によるきめ細かい指導を重視した少人数制のゼミナールを3年次・4年次に開講しています。

そして、なによりも異文化コミュニケーション学科の特色となるのは、2年次前期に実施する全員留学です。本学科の特色は、この留学を軸にして、留学前と留学後に学修すべきものとしてカリキュラムが設計されていることなのです。したがって、入学時に選択する英語以外の言語の選択、そして留学する言語文化圏の選択は、時間をかけて考えておくことが重要です。みなさんがこれまでに修めてきたこと、これから異文化コミュニケーション学科で学びたいこと、そして将来の希望を考慮しながら、言語・留学先を選択するようにしてください。

(2) 1年次の学修

- ① 大学での学修を始めるうえで基礎となる重要な科目を、1年次に必履修科目として配当してあります。異文化コミュニケーション学科で必履修科目となるのは、「専修大学入門ゼミナール」(前期2単位)、「データ分析入門」「あなたと自然科学」の3科目です。これらの科目は、単位の修得は義務づけられていませんが、必ず履修しなければならない「必履修」科目です。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできません。

「専修大学入門ゼミナール」(前期2単位)とは、大学における講義の受け方や、研究のノウハウなどの基本を学ぶための科目です。この科目は、必修科目ではありませんが、1年次生を対象に全学部で導入されている必履修科目となっていますので、異文化コミュニケーション学科の全学生は必ず受講してください。高校の勉強の仕方と大学の勉強の仕方は異なることが多くあり、大学に入ってからその違いにうまく対応できないと、講義などを理解することができず、途中で挫折することにもなりかねません。そこで、「専修大学入門ゼミナール」において、みなさんは大学での学修の基礎となるアカデミック・スキルを身につけることとなります。たとえば、大学での勉強の仕方、本や文献の読み方や読解力の育成、レジユメの書き方やプレゼンテーションの方法、ディスカッションの仕方、図書館の利用法、情報検索の方法、レポートの書き方など、4年間大学で勉強するために必要な技術を身につけることとなります。

これらの技術を修得してもらうために、「専修大学入門ゼミナール」は1クラス20名程度の履修者で構成し、ゼミナール形式で授業が進められます。1年次生は、こうした転換・導入科目での予習・復習を中心に学生生活を送り、学修に主体的に取り組み、情報を「受信」するだけでなく、自らの視点で分析した内容を「発信」する訓練を積むことが求められています。

「専修大学入門ゼミナール」の内容は、語学の演習的学修に役立つばかりでなく、きちんと修得するように心がければ、2年次後期以降の専門科目の理解や3年次から始まる専門ゼミナールでの学修に役立つこととなりますので、必ず1年次に修得してください。

「データ分析入門」「あなたと自然科学」は、学籍番号により前期ないし後期に履修することとなります。詳しくは、pp.40~44を参照してください。

- ② 異文化コミュニケーション学科のみなさんにとってもう一つ大切なことは、1年次において、日本に関わる科目「日本文化入門」(前期2単位)と「日本語入門」(後期2単位)を学ぶことです。これらの科目は必修科目として設置しており、異文化との出会いを学ぶための必須科目です。また、姉妹学科である日本語学科の学生とも共通する科目を学ぶことによって、学科間の交流を図っています。

後期には、「日本文化入門」における知識をもとに継続される「異文化理解の実践」(後期2単位)が開講されています。これは、異文化との出会いかたについて学ぶ科目であり、その意味では、留学

準備とも言える講義です。渡航先での真の相互理解に結びつくよう、講義内容は確実にマスターしていきましょう。この科目は、単位の修得は義務づけられていませんが、必ず履修しなければならない「必修」科目です。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできませんので注意してください。

- ③ 異文化コミュニケーション学科1年次生のみなさんにとって最も重要な課題は、1年次において、学修の基礎と英語と英語以外の言語の運用能力を高めることです。1年次生は全員が、英語と英語以外の外国語（入学後に選択した言語）を学びます。

英語は、プレイスメント・テストによって、習熟度別に編成されたクラスで学んでいきます。

listening, speaking, reading, writing の4技能に実践的にかかわる多様な科目を履修して、足りない部分を補強し得意な部分をより一層伸ばすことを目指します。「Readings in Liberal Arts 1」（前期1単位）と「Readings in Liberal Arts 2」（後期1単位）においてreadingの力を、「Writing with Clarity 1」（前期1単位）と「Writing with Clarity 2」（後期1単位）において、文法項目を含んだwritingの力を伸ばしていきます。「Cross-Cultural Studies」（前期1単位）では、英語ネイティブの専任教員による英語での授業を受講し、listeningとspeakingの技能を実践していきます。これらの科目は異文化コミュニケーション学科1年次生全員が必修科目として履修しなければなりません。

後期になると、これらの基礎的な言語系科目に加えて、留学準備を意識した科目が開講されます。英語では、「Academic Skills」、「Talking Tasks 1」、「Talking Tasks 2」（各1単位）を選択必修科目として履修することになります。「Academic Skills」は、英語ネイティブの専任教員の指導のもと、英語文化圏の留学先で学ぶ際に必要となる基礎的なアカデミック・スキルを英語にて身につけることを目標とします。「Talking Tasks 1」、「Talking Tasks 2」は、ベルリッツの英語ネイティブ講師による指導のもと、日常的会話からスタートして対話やディスカッションまでの言語的スキルと応用を学修していきます。

1年次でこれらの科目の単位を履修できない場合、2年次前期での留学も厳しいものになりますし、また2年次後期以降に、希望の時間割編成が困難になることがあるので、十分注意してください。

英語以外の外国語（入学後に選択した言語）は、初めて学修する言語としてスタートします。前期に「〇〇語基礎A」「〇〇語基礎B」「〇〇語基礎C」（各1単位）と後期に「〇〇語基礎D」「〇〇語基礎E」（各1単位）を学修し、選択した言語の発音・語彙・文法などの初歩を学び、基本となる文型を理解したり、簡単な日常会話ができるようになることを目指します。これらの科目は異文化コミュニケーション学科1年次生全員が選択必修科目として履修しなければなりません。

英語以外の外国語でも、後期になると、これらの基礎的な言語系科目に加えて、2年次の留学を想定した科目が開講されます。すなわち、現地で通用する実践的な運用能力を養うために、「〇〇語コミュニケーションA」「〇〇語コミュニケーションB」「〇〇語コミュニケーションC」（各1単位）を選択必修科目として履修することになります。これらの後期科目では、専任教員による指導のもと、英語以外の言語文化圏の留学先で学ぶ際に必要となる基礎的なアカデミック・スキルを身につけるほか、多彩な場面に応じた日常会話以外にも、対話やディスカッションまでの言語的スキルと応用の修得を目標とします。

1年次でこれらの科目の単位を履修できない場合、2年次前期での留学も厳しいものになりますし、また2年次後期以降に、希望の時間割編成が困難になることがあるので、十分注意してください。

④ このほかに専門科目として、次の基幹科目の履修ができます。＜地域＞に関わるものは、「世界の文化を知る（北米）・（ラテンアメリカ）・（ヨーロッパ）・（アジア）」（後期各2単位）、＜文化＞に関わるものは、「文化研究の視点」（前期2単位）、＜コミュニケーション＞に関わるものは、「ことば・身体・映像」（前期2単位）が開講されています。これらの科目は、1年次から4年次まで開かれています。留学先の言語文化圏に近い地域の「世界の文化を知る」を1年次に履修するとよいでしょう。

⑤ 教養科目（人文科学基礎科目・社会科学基礎科目）の履修について

異文化コミュニケーション学科では、上にみたように、1年次のかなりの時間を語学や基礎科目の学修に割かなくてはなりません。しかしながら、大学生として他分野の知識を学修することも大切です。全学で開講されている教養科目のうち、とりわけ人文科学基礎科目と社会科学基礎科目については、1年次と2年次にしか履修できませんので、個人としての関心に加えて、余裕のある場合には、これらの科目を1年次と2年次のうちに学修することを勧めます。

⑥ 留学先言語文化圏の選択について

異文化コミュニケーション学科の学生は、1年次前期の終了前に、最終的な留学先希望を提出する必要があります。留学先は、入学時に選択した英語以外の言語文化圏あるいは英語文化圏のいずれかを選択することになります。希望調査は入学時と1年次前期終了時の2回行います。言語文化圏については、基本的に希望する文化圏に留学することができますが、留学先の大学や教育機関は、希望者が20名を超えた時には選抜が行われることがあります。

（3）2年次の学修

2年次前期は、みなさんがそれぞれ選択した言語文化圏の留学先へと出発します。留学先によって期間が異なりますので、みなさんの出発時期も帰国時期も異なります。1年次後期に始まる出発前の事前研修には必ず参加して、自分の選択した留学先の詳細を正確に理解しておくことが必要です。

留学から帰国後の2年次後期からは、留学先言語文化圏で学修した言語の運用能力をさらに高める語学科目とともに、その文化圏の文化現象にかかわる専門性の高い講義科目を受講していきます。

言語科目で言えば、英語では、「Critical Reading」「Talking Points」「Critical Writing」、英語以外の言語では、例えば、「ドイツ語総合A」「ドイツ語実践A」が開講されます。留学先で培った語学運用能力をさらに高めるために、留学先で使用した言語と同じ言語を継続して履修していくことが求められるほか、それ以外の言語も履修することが望ましいと言えます。

2年次後期から発展科目に分類される講義科目が展開されます。発展科目（そして3年次から始まる応用科目）は、＜地域＞＜文化＞＜コミュニケーション＞の3区分を柱としています。発展科目の卒業要件単位は12単位ですが、それぞれの区分から1科目2単位（合計3科目6単位）を必ず修得しなくてはなりません。まず、このようにして、異文化コミュニケーション学科で求められる3区分それぞれへの知識・理解をバランスよく修得することになります。残りの6単位（3科目）は、どの区分から履修してもかまいません。基幹科目に置かれた「世界の文化を知る」の延長にあたる、各言語文化圏の「地域研究」などの科目群や、文化にかかわる現象をさまざまな視野から学修する科目群から、みなさんの関心に合わせて選択し、履修してください。＜地域＞＜文化＞＜コミュニケーション＞の3区分のうち、自分の関心のある区分に集中して専門性をさらに高めてもかまいませんし、3区分をまんべんなく履修することで幅広い知識を身につける姿勢をとってもかまいません。

これは後に述べるように、応用科目についてもあてはまります。つまり、みなさんそれぞれが異なっているのが当然のように、どのように履修するかは人それぞれが異なってもよいという方針でカリキュ

ラムを作成しています。将来どのような進路を選択しようとも、それに対応できるようなカリキュラムとなっているのです。

発展科目の講義の大まかな内容は、専修大学のホームページにある Web 講義要項（シラバス）を見ると、知ることができます。

講義を受け、その内容をしっかり理解するためには、講義ごとに予習を行い、講義を受けた後は復習をすることが必要です。学修においては、一人で本を読んだりノートをまとめたりすることも重要ですが、これと合わせて、友達と講義で取り上げられた内容に関して議論をすると、より高い効果が得られます。

なお、3・4年次に配当されている「ゼミナール1～4」のプレゼミナールとして、「異文化交流ワークショップ」（後期2単位）が設置されています。この科目は、みなさんの留学体験をもとにしながら、異文化とは何かを議論し、それぞれの考えをまとめていくことで、みなさんの関心がどこにあるのかを見定め、異文化研究の基礎を固めるためにゼミナール形式で進められる少人数教育の必修科目です。ここで得た知見をもとにして、＜地域＞＜文化＞＜コミュニケーション＞という3つの柱からなる、発展科目・応用科目の履修への指針とするほか、3年次から始まる専門ゼミナールの方向性を固めます。

（4）3・4年次の学修

1・2年次に設置されている科目より、さらに専門性を高めた応用的な内容を扱う科目が増えてきますから、予習・復習の必要性がさらに増してきます。発展科目と応用科目のバランスを考えながら、学修していくとよいでしょう。

3年次前期から応用科目と関連科目に分類される講義科目が展開されます。

発展科目と同様に、応用科目は、＜地域＞＜文化＞＜コミュニケーション＞の3区分を柱としています。応用科目の卒業要件単位は（関連科目の科目を含め）14単位ですが、それぞれの区分から1科目2単位（合計3科目6単位）を必ず修得しなくてはなりません。発展科目と同様に、応用科目でも、異文化コミュニケーション学科で求められる3区分それぞれへの知識・理解をバランスよく修得することになります。残りの8単位（4科目）は、どの区分から履修してもかまいません。＜地域＞＜文化＞＜コミュニケーション＞の3区分のうち、自分の関心のある区分に集中して専門性をさらに高めてもかまいませんし、3区分をまんべんなく履修することで幅広い知識を身につける姿勢をとってもかまいません。

また、4年次には大学での学修の最終的な成果として卒業研究に取り組むことになります。異文化コミュニケーション学科では、みなさんの創造性に応えることができるよう、従来の論文形式に加えて、プレゼンテーションなどの多様な形式にも対応できるようにしています。

（5）ゼミナール

3・4年次になると、専門ゼミナールに所属して学ぶことになります。少人数で議論を行っていくクラスという点では、1・2年次に受けた「専修大学入門ゼミナール」や「異文化交流ワークショップ」の延長線上にあります。専門ゼミナールは、自分の興味のあるテーマに即したゼミを選択し、さらに専門的にテーマを突き詰めていく場です。合宿を行って集中的に研究発表・討論をしたり、ゼミ論文を執筆したりといった、1・2年次の少人数クラスとは一味違った勉強をしていきます。

レポートや面接などによる選抜を実施し、少人数クラスとしての適正規模を保つようにしていますので、2年次後期までに培った実力が試されます。ゼミナールでの学修こそが、大学生活の醍醐味であり、1・2年次の学修は、ゼミナールでさらにコミュニケーション能力をはじめとした各種技能能力を高め、培うための準備作業だとさえ言うこともできます。そしてまた、ゼミナールで培う力こそが、社会に出て

活躍するために必要な力です。ゼミナールへの取り組み次第で、今後の職業人としての人生が左右される側面さえありますので、真剣に取り組んでください。

3年次後半頃から就職活動が始まってきますが、しっかりとした勉学なしには就職活動の成功はのぞけません。就職活動と学業との両立をはかるよう、スケジュールを調整することもまた、3・4年次生の重要な課題となるでしょう。

(6) 卒業後の進路

異文化コミュニケーションを学ぶことが即座に就職に有利になるわけではありません。異文化コミュニケーションという学科のテーマは、国際社会における「知性」という意味で本学全体の理念の一翼を担うものであり、就労活動という目標だけに限定されたものではないからです。しかしながら、「異文化」と「コミュニケーション」を軸に学修することで、みなさんが身につける、人を思いやる気持ちや姿勢は、様々な社会集団（地域社会、NPO、企業、学校、趣味で集まるサークルなど）の自治的な運営をも含めた広い集団・社会のなかで、重要なスキルとして捉えられるようになってきています。また、グローバル化した社会において、訪日外国人との交流には、このようなスキルは欠かせないものです。

したがって、異文化コミュニケーション学科を卒業するみなさんの進路は、様々な分野に開かれていると言っても過言ではないでしょう。海外からの訪問者とのふれあいが必要な旅行業界（CAやグランドスタッフなど）だけでなく、例えば、食品業界や製造業などの民間企業に勤務したとしても、海外出身の勤務員も増えてきていることに鑑みるなら、ある集団を円滑に組織し運営するための工夫やリーダーシップ、センスなど、異文化コミュニケーション学科で学び、身につけたことは、必ず自らの血となり肉となり、あなたの職業人生に貢献するはずで

(7) 卒業要件と科目の履修方法

以下に大学を卒業するために必要な要件と、科目の具体的な履修方法について概説します。説明をよく読み、それに沿って履修計画を立ててください。

1. 卒業要件

一般に大学を卒業するためにはいくつもの要件がありますが（一般的な要件については、p.22「5. 卒業要件」を参照）、それに加えて、異文化コミュニケーション学科の学生には、p.23にある表に示した要件を充たすことが要求されています。次項「科目の履修方法」を読み、具体的な履修方法を理解した上でこの表を改めて見直し、何が必要か確認してください。

2. 科目の履修方法

異文化コミュニケーション学科の学生は、教養科目10単位（外国人留学生はこれに加え、教養科目の「留学生専修科目」4単位、外国語科目8単位）、専門科目88単位（外国人留学生は81単位）、自由選択修得要件単位となる科目26単位（外国人留学生は21単位）以上、合計124単位以上を修得しなければなりません。

また、各年次に修得する単位の上限（1年次 44単位、2年次 40単位、3年次 44単位、4年次 48単位）が定められていますので、この条件をも充たすよう毎年の履修計画を立てなければなりません。履修にあたっては、さらに以下の2点にも注意を払うようにしてください。

- ① 配当年次が指定されている科目は、その年次に履修しなければなりません。配当年次が複数の学年

にわたって指定されている科目や、指定のない科目については、前期修得単位の目安も考慮しながら、各自が自分に合った履修計画を充分練って、年次ごとの配分を考えてください。その場合に、必ず必修科目を優先的に履修するよう配慮しなければなりません。

- ② 同一名称の科目は原則として1つしか履修できません（一部の教養科目を除く）。また、一度単位を修得した科目をもう一度履修することもできません。

上記の点を考慮し、各自の興味と関心に従って自由に独創的な学修計画を組んでください。

(1) 転換・導入科目、教養科目、外国語科目の履修方法

転換・導入科目、教養科目、外国語科目の中には必修科目として指定されている科目がありますので、履修に際しては注意しなければなりません。転換・導入科目は pp.40～44に、教養科目は pp.46～52に、外国語科目については pp.54～67に詳しい説明があるので、それを参考にして以下を確認してください。

1) 転換・導入科目

① 専修大学入門科目

「専修大学入門ゼミナール」（半期2単位）は、単位の修得は義務づけられていませんが、必ず履修しなければならない「必履修」科目です。1年次前期に、自動的に履修登録されます。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできません。修得した単位は自由選択修得要件単位の算入されます。

② データリテラシー

「データ分析入門」（半期2単位）は、単位の修得は義務づけられていませんが、必ず履修しなければならない「必履修」科目です。1年次の前期あるいは後期に、自動的に履修登録されます。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできません。修得した単位は自由選択修得要件単位の算入されます。

③ 基礎自然科学

「あなたと自然科学」（半期2単位）は、単位の修得は義務づけられていませんが、必ず履修しなければならない「必履修」科目です。1年次の前期あるいは後期に、自動的に履修登録されます。単位を修得できなかった場合でも、次年度に履修することはできません。修得した単位は自由選択修得要件単位の算入されます。

④ 上記以外の転換・導入科目

上記以外の転換・導入科目は選択科目として履修することができます。修得した単位は自由選択修得要件単位の算入されます。

2) 教養科目

① 人文科学基礎科目・社会科学基礎科目・自然科学系科目・融合領域科目

人文科学基礎科目・社会科学基礎科目・自然科学系科目・融合領域科目の中から8単位修得しなければなりません。ただし各科目群の配当年次はそれぞれ異なるので、履修する際には注意してください。

人文科学基礎科目と社会科学基礎科目は1、2年次にしか開講されません。したがって人文科学基礎科目と社会科学基礎科目は3、4年次で再履修することはできませんので注意が必要です。

また、融合領域科目は2年次以降にしか開講されません。自然科学系科目は1年次から4年次まで

開講されています。

8単位を超えて修得した単位は自由選択修得要件単位に算入されます。

② 保健体育系科目

保健体育系科目である「スポーツリテラシー」、「スポーツウェルネス」、「スポーツ論」および「アドバンストスポーツ」の中から、それぞれ半期1単位、合計2単位を必ず修得しなければなりません。2単位を超えて修得した単位は自由選択修得要件単位に算入されます。

3) 外国語科目

異文化コミュニケーション学科では、外国語科目という名称の区分に配置されている語学科目はすべて選択科目として履修できます。個人の関心と目標に合わせて履修してください。専門科目として学ぶ2つの言語以外の言語を修得したいときには、これらの科目群から履修し始めるとよいでしょう。修得した単位は自由選択修得要件単位に算入されます。

原則として、大学では、一度単位を修得した科目は、同一名称のもので履修登録することはできませんが、「Advanced English a・b」、「English Language and Cultures a・b」は、各科目4単位まで修得することができます。

(2) 専門科目の履修方法

専門科目は、基礎科目、基幹科目、発展科目、応用科目、関連科目の5つの科目群から構成されています。それぞれの科目群に開講される科目名称等についてはp.30の「国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 専門科目一覧」を参照してください。各科目は、必修科目（○のついた科目）、選択必修科目（◎のついた科目）、選択科目（△のついた科目）、必修修科目（▲のついた科目）のいずれかに指定されています。

1) 基礎科目

① 基礎科目の履修

基礎科目は、異文化コミュニケーション学科のみなさんにとって必要不可欠な科目群であり、すべての科目が1年次に配置されています。したがって、1年次でこれらの科目の単位を修得できない場合、2年次前期での留学も厳しいものになりますし、また2年次後期以降に、希望の時間割編成が困難になることがあるので、十分に注意しつつ、以下に合わせて、履修・学修をしていくようにしてください。

「日本文化入門」（前期2単位）「日本語入門」（後期2単位）は、必修科目です。異文化コミュニケーション学科のみなさんにとっては、異文化を知る前に自らを知るというコンセプトのもとで、日本語・日本文化に対する造詣を深めることが求められています。

また、「異文化理解の実践」（後期2単位）は、単位の取得が義務づけられていない必修修科目ですが、「日本文化入門」を履修したあとの継続的学修科目として、履修しなくてはなりません。

それら以外は、言語系科目です。高校までに修得した英語をもとに、英語の4技能（listening, speaking, reading, writing）の基礎的かつ実践的な運用能力を養うために、多様な科目を履修して、足りない部分を補強し得意な部分をより一層伸ばすことを目指しています。次の科目は異文化コミュニケーション学科1年次生全員が必修科目として履修しなければなりません。クラスはプレイスメント・テストをもとに習熟度別に編成されたクラスで学びます。また、英語以外の外国語（入学時に選

択した言語)は、初めて学修する言語としてスタートします。

英語以外は、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、コリア語のうちから1言語を選択するという意味において、選択必修科目です。下段は、英語以外の外国語です。

Readings in Liberal Arts 1 (前期1単位) / Readings in Liberal Arts 2 (後期1単位)

Writing with Clarity 1 (前期1単位) / Writing with Clarity 2 (後期1単位)

Cross-Cultural Studies (前期1単位)

〇〇〇〇語基礎A (前期1単位) / 〇〇〇〇語基礎D (後期1単位)

〇〇〇〇語基礎B (前期1単位) / 〇〇〇〇語基礎E (後期1単位)

〇〇〇〇語基礎C (前期1単位)

② 留学先言語の選択

異文化コミュニケーション学科のみなさんは、1年次前期の終了直前に、最終的な留学先希望を提出する必要があります。決定した留学先に合わせ、1年次後期に集中して学ぶ科目が変わります。具体的には、文化圏に応じて下記の科目群を履修する必要があります。

英語文化圏 : 「Academic Skills」, 「Talking Tasks 1」, 「Talking Tasks 2」(各1単位)

英語以外の言語文化圏 : 「〇〇語コミュニケーションA」, 「〇〇語コミュニケーションB」, 「〇〇語コミュニケーションC」(各1単位)

2) 基幹科目

基幹科目は、その名称のとおり、この学科のカリキュラムのコア(基幹)となるものです。

1年次から4年次にかけて、<地域><文化><コミュニケーション>3区分の基幹となる科目を設置しています。前期には、<文化>枠の「文化研究の視点」、<コミュニケーション>枠の「ことば・身体・映像」が、後期には、<地域>枠の「世界の文化を知る(北米、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジア)」が開講されています。

これらの科目は、留学前に知っておくべき知識を修得するという観点から、また、留学から帰国した後の専門科目を学習していく基盤になるという観点から、導入的な科目となるものです。これらの科目から少なくとも3科目6単位を修得しなくてはなりません。

しかしながら、異文化コミュニケーション学科のみなさんは、語学の学修のみならず、上の基礎科目で挙げた科目群も履修する必要があります。基幹科目は帰国後も履修できますから、例えば単位履修の上限に余裕がある場合に、これらの科目を履修するか、もしくは、教養科目で1・2年次にしか履修できない人文科学基礎科目・社会科学基礎科目を履修するか、のあいだで選択をするとよいでしょう。

2年次には、前期に留学があり、留学先での学修は、海外研修8科目(リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング、リサーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、異文化理解)にて16単位が認定されます。

帰国後に、「異文化交流ワークショップ」(後期2単位)をプレゼミナールの科目として履修しなくてはなりません。これらは、3年次から始まる専門の「ゼミナール1~4」, 「卒業研究」と合わせ、必ず単位を修得しなくてはならない必修科目です。「ゼミナール1~4」と「卒業研究」については、以下 p.90の

説明を参照してください。

さて、帰国後にも、留学先文化圏で話される言語の学修を継続していくことが求められます。また、複言語教育という観点から、留学先文化圏以外の言語のさらなる修得も必要です。

これらの言語科目は、英語も含め、すべての言語から自由に選択してよい選択科目です。2年次から履修可能な科目群と3年次から履修可能な科目群にわかれています。3年次から開講の科目群がよりレベルの高い語学運用能力が要求される科目となっています。

基幹科目の言語系科目では、上記の留学による認定単位16単位を含めて24単位修得することが要件です。これらの科目から4科目を履修し、8単位を修得しなければなりません。要件単位を超えた分の単位は自由選択修得要件単位に算入されますので、みなさんの関心に合わせて履修してください。

3) 発展科目

発展科目（後期開講）は、〈地域〉〈文化〉〈コミュニケーション〉の3区分を柱としています。それぞれの区分に属する科目は次の通りです。

〈地域〉

地域研究（北米、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジア、中国）

〈文化〉

文化の衝突と融合、移動と交流の文化史、比較文化、宗教と文化、思想と文化、多文化共生論

〈コミュニケーション〉

ことばのしくみ、ことばの習得、身体とコミュニケーション、映像とコミュニケーション

発展科目の卒業要件単位は12単位ですが、それぞれの区分から1科目2単位（合計3科目6単位）を必ず修得しなくてはなりません。残りの6単位（3科目）は、どの区分から履修してもかまいません。みなさんの関心に合わせて選択し、履修することになります。発展科目の修得単位が12単位を超えた場合、超えた分の単位は自由選択修得要件単位に算入されますので、ここでも履修計画全体をよく確認してください。

4) 応用科目

応用科目（「ことばと社会」を除き、すべて前期開講）も、〈地域〉〈文化〉〈コミュニケーション〉の3区分を柱としています。それぞれの区分に属する科目は次の通りです。

〈地域〉

テーマ研究（北米、ラテンアメリカ、西ヨーロッパ、中東欧・ロシア、イギリス、アジア、中国）

〈文化〉

越境する文化、環境と文化、資源としての文化、現代社会と多様性、植民地と現代世界、現代文化論

〈コミュニケーション〉

ことばと心、ことばと社会（後期2単位）、メディア文化論、身体文化論、映像文化論

応用科目の卒業要件単位は（関連科目の科目を含め）14単位ですが、上記のそれぞれの区分から1科目2単位（合計3科目6単位）を必ず修得しなくてはなりません。残りの8単位（4科目）は、どの区分から履修してもかまいません。応用科目の修得単位が14単位を超えた場合、超えた分の単位は自由選択修得

要件単位に算入されますので、みなさんの関心に合わせて履修してください。

5) 関連科目

関連科目はみなさんの関心の広がりに合わせて選択の幅を広げるために設けられた選択科目群です。異文化コミュニケーション学科が開講している科目のほか、日本語学科や法学部、商学部が開講している専門科目を相互乗り入れ科目として設置してあります。関連科目の履修単位は、上記の応用科目の卒業要件単位に組み込まれます。応用科目と関連科目の修得単位が合計14単位を超えた場合、超えた分の単位は自由選択修得要件単位に算入されますので、みなさんの関心に合わせて自由に履修してください。

6) ゼミナール

「ゼミナール1～4」は必修科目であり、学生はいずれかのゼミナールに所属しなくてはなりません。なお、ゼミナールの履修に当たっては、以下の申告せ事項があるので、注意してください。

- ① 「ゼミナール1, 2」は複数履修することを認めません。
- ② 「ゼミナール3, 4」は複数履修することを認めません。
- ③ 「ゼミナール1～4」のうち1つでも単位が未修得の場合、4年間での卒業が困難になりますので、注意してください。その場合でも、「卒業研究」の履修を4年次に認めます。同じ教員のゼミナールを履修することが原則です。

7) 卒業研究

4年次には「卒業研究」が必修科目として課されます。4年間学んできたことの中で、特に関心のある分野やテーマについて、自分なりにまとめることが求められます。形式は論文形式のほか、さまざまな表現による形式が認められています。詳細については、『時間割冊子』に掲載されている「卒業研究の手びき」を参照の上、それぞれの「卒業研究」の指導教員の指導に従う必要があります。

(3) 自由選択修得要件単位となる科目の履修方法

自由選択修得要件単位となる科目とは、上記の教養科目および専門科目の卒業要件単位をすべて修得した上で、さらに履修する科目の総称です。したがって自由選択修得要件単位に算入されるのは以下の6つです。

- a. 転換・導入科目に配置された科目のうち、修得した科目の単位。
- b. 教養科目に配置された科目のうち卒業要件単位を超えて修得した科目の単位。
- c. 外国語科目に配置された科目のうち、修得した科目の単位。
- d. 基礎科目・基幹科目・発展科目・応用科目（関連科目）にそれぞれ配置された科目のうち、それぞれの枠で指定された卒業要件単位を超えて修得した科目の単位。
- e. 司書・学校司書課程科目の単位。ただし8単位まで。（詳しくは『教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック』参照）
- f. 異文化コミュニケーション学科の学生に受講が認められている全学公開科目の単位。

自由選択修得要件単位となる科目の履修方法は、原則としてみなさんの裁量に任せられています。それぞれの興味と関心に応じ、自由に学修計画を組むようにしてください。いずれにしても、卒業までに必要な自由選択修得要件単位数に達するよう注意を払わなければなりません。

(4) 再履修について

1) 必修科目の再履修

何らかの理由で必修科目の単位が修得できなかった学生は、必ず次の年次で同一名称の科目を再度履修しなければなりません。必修科目の再履修は、他のすべての科目に優先して履修しなければなりません。なお、前述したように、一度単位を修得した科目の再履修はできません。

2) 選択必修科目および選択科目の再履修

選択必修科目および選択科目の単位を修得できなかった場合は、必ずしも同一名称の科目を再履修する必要はなく、別の科目の単位を修得して卒業要件を充たすことも可能です。

(5) 中期留学をした場合の単位認定について

異文化コミュニケーション学科の学生が、本学国際交流センターが主催する国際交流協定校等で所定の中期留学プログラム（外国語）の単位を修得した場合、単位認定は次のように行います。

- ① 中期留学の単位認定においては、異文化コミュニケーション学科の外国語科目（「海外語学中期研修1～8」の最大16単位）のみを読み替えの対象とする。
- ② 中期留学に2回参加する場合、同一国に留学した場合でも単位認定の対象とする。ただし同一の大学に留学した場合は単位認定の対象としない。

※中期留学によって認定される単位は、自由選択修得要件単位に算入されるため、4年間での卒業が困難になる場合もありますから、注意してください。

(6) セメスター交換留学、長期交換留学をした場合の単位認定について

異文化コミュニケーション学科の学生が、本学協定校に長期交換留学した場合には、協定校における履修状況（履修した科目及び成績）を検討した上で、異文化コミュニケーション学科の卒業要件に含まれる単位に読み替えることとします。

※交換留学プログラムを利用して留学する場合、4年間での卒業が困難になる場合もあります。「海外研修」以外の留学を検討する場合、クラス担任あるいはアカデミック・アドバイザーに相談してください。

VII 外国人留学生の履修について

1. 大学卒業の要件

外国人留学生入学試験により入学した国際コミュニケーション学部学生の卒業要件単位は、他の学生と同じ124単位です。ただし、外国人留学生の特例履修科目が設定されており、卒業要件単位の内訳は次の表のとおりです。

なお、外国人留学生入学試験以外の入試制度で入学した日本語を母国語としない学生も、この要件に変更できる場合があります。詳細については、ガイダンスまたは in Campus でお知らせします。

《国際コミュニケーション学部日本語学科・外国人留学生》

区 分		卒業要件単位		備 考
転換・導入科目	専修大学入門科目【必履修】		2	自由選択修得要件単位には、所定の卒業要件単位数を超えて修得した転換・導入科目、教養科目、外国語科目、専門科目、資格課程の一部の科目、全学公開科目の単位が算入されます。
	専門入門ゼミナール	2		
	キャリア基礎科目			
	基礎自然科学【必履修】			
教養科目	留学生専修科目	4	14	
	人文科学基礎科目	8		
	社会科学基礎科目			
	自然科学系科目			
	融合領域科目			
保健体育系科目	2			
外国語科目	日本語	8	8	
	母語以外の外国語			
	海外語学研修			
専門科目	基礎科目	16	72	
	基幹科目	32		
	発展科目	12		
	応用科目	12		
	関連科目			
自由選択修得要件単位		28		
卒業要件単位		124		

《国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科・外国人留学生》

区 分		卒業要件単位	備 考
転換・導入科目	専修大学入門科目【必履修】		自由選択修得要件単位には、転換・導入科目で修得した単位のほか、所定の卒業要件単位数を超えて修得した教養科目、外国語科目、専門科目、資格課程の一部の科目及び全学公開科目の単位が算入されます。
	データリテラシー		
	キャリア基礎科目		
	情報リテラシー科目		
	基礎自然科学		
教養科目	留学生専修科目	4	
	人文科学基礎科目	8	
	社会科学基礎科目		
	自然科学系科目		
	融合領域科目		
保健体育系科目	2		
外国語科目	日本語	8	
	母語以外の外国語	8	
	海外語学研修		
専門科目	基礎科目	7	
	基幹科目	48	
	発展科目	12	
	応用科目	14	
	関連科目		
自由選択修得要件単位		21	
卒業要件単位		124	

2. 外国人留学生の特例履修科目

外国人留学生のみなさんの学修がスムーズに行えるよう、本学では留学生のための科目を次の通り設置しています。

(1) 教養科目・留学生専修科目

1年次（必修科目）

一般日本事情1 一般日本事情2 半期 2科目 4単位

(2) 外国語科目・日本語科目

1年次（必修科目）

日本語文章理解1 → 日本語文章理解2 半期 2科目 2単位

日本語音声理解1 → 日本語音声理解2 半期 2科目 2単位

日本語口頭表現1 → 日本語口頭表現2 半期 2科目 2単位

日本語文章表現1 → 日本語文章表現2 半期 2科目 2単位

注意事項

◎矢印(→)で結ばれた科目(例えば、日本語文章理解1→日本語文章理解2)は、同一曜日・時間、同一担当者の科目をセットで履修します。ただし、前期に単位を修得できなかった場合は、後期の履修登録が削除されます。

2年次以上(選択科目)

応用日本語理解1 応用日本語理解2 半期 2科目 2単位

応用日本語表現1 応用日本語表現2 半期 2科目 2単位

注意事項

◎応用日本語理解1, 2および応用日本語表現1, 2を履修するためには、前年度までに日本語文章理解1, 日本語文章理解2, 日本語音声理解1, 日本語音声理解2, 日本語口頭表現1, 日本語口頭表現2, 日本語文章表現1, 日本語文章表現2の単位を全て修得していなければなりません。

◎応用日本語理解1, 2および応用日本語表現1, 2は、同一年度に同じ科目を重複して履修することはできませんが、年度を変えれば、それぞれの1で3科目3単位, 2で3科目3単位まで履修することができます。

◎母語の科目を、外国語科目(世界の言語と文化, 言語文化研究を除く)として履修することはできません。

国際コミュニケーション学部日本語学科 転換・導入科目、教養科目、外国語科目一覧【外国人留学生】

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必修履修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区 分	1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	卒業要件単位	備 考				
転換・導入科目	専修大学入門科目	専修大学入門ゼミナール【▲】								
	専門入門ゼミナール	専門入門ゼミナール【○】			2	・卒業要件単位2単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。				
	キャリア基礎科目	キャリア入門【△】								
	基礎自然科学	あなたと自然科学【▲】								
留学生専修科目	一般日本事情1【○】 一般日本事情2【○】				4					
教 養 科 目	人文科学基礎科目	歴史の視点【△】 法と社会【△】 基礎心理学入門【△】 応用心理学入門【△】 哲学【△】	倫理学【△】 論理学入門【△】 ことばと論理【△】 芸術学入門【△】	ジャーナリズムと現代【△】 情報社会【△】			・卒業要件単位14単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・テーマ科目は、科目名の括弧内に出す表記が異なる場合は、それぞれ履修することができず（同一年度での複数履修も可能）。 ・教養テーマゼミナール論文は、教養テーマゼミナールの単位を修得し、前年度以降に同一教員の教養テーマゼミナールを履修する場合に作成（履修）することができます。 ・アドバンストスポーツは、スポーツリテラシーとスポーツウェルネスの単位を修得していなければ、履修することができません。 ・アドバンストスポーツは、種目にかかわらず、複数履修することができます。			
	社会科学基礎科目	日本国憲法【△】 政治学入門【△】 政治の世界【△】 経済と社会【△】 現代の経済【△】	地理学への招待【△】 現代の社会学【△】 社会科学論【△】 社会思想【△】 教育学入門【△】	子どもと社会の教育学【△】 はじめての経営【△】 マーケティングベーシック【△】 企業と会計【△】						
	自然科学系科目	生物科学1 a【△】 生物科学1 b【△】 生物科学2 a【△】 生物科学2 b【△】 生物科学3 a【△】 生物科学3 b【△】	宇宙地球科学1 a【△】 宇宙地球科学1 b【△】 宇宙地球科学2 a【△】 宇宙地球科学2 b【△】 化学1 a【△】 化学1 b【△】	化学2 a【△】 化学2 b【△】 物理学1 a【△】 物理学1 b【△】 物理学2 a【△】 物理学2 b【△】	数理解科学1 a【△】 数理解科学1 b【△】 数理解科学2 a【△】 数理解科学2 b【△】 数理解科学3 a【△】 数理解科学3 b【△】	科学論1 a【△】 科学論1 b【△】 科学論2 a【△】 科学論2 b【△】		8		
	融合領域科目		学際科目1【△】 学際科目2【△】 学際科目3【△】 学際科目4【△】	学際科目5【△】 学際科目6【△】 学際科目7【△】 学際科目8【△】	学際科目9【△】 学際科目10【△】 学際科目11【4】(△) 学際科目12【4】(△)			14		
			テーマ科目【△】							
			新領域科目1【△】 新領域科目2【△】	新領域科目3【△】 新領域科目4【△】	新領域科目5【△】					
			キャリア科目1【△】	キャリア科目2【△】						
			教養テーマゼミナール1【4】(△)	教養テーマゼミナール2【4】(△)	教養テーマゼミナール3【4】(△)					
					教養テーマゼミナール論文【△】					
			スポーツリテラシー【1】(○) ◎	スポーツウェルネス【1】(○) ◎						
保健体育系科目		アドバンストスポーツ【○】 スポーツ論(健康と生涯スポーツ)【○】 スポーツ論(オリンピックとスポーツ)【○】 スポーツ論(スポーツコーチング)【○】		スポーツ論(スポーツライフデザイン論)【○】 スポーツ論(人類とスポーツ)【○】 スポーツ論(トレーニング科学)【○】	2					
日 本 語	導 入	日本文学理解1【1】(○) ◎ 日本文学理解2【1】(○) ◎ 日本語音理解1【1】(○) ◎ 日本語音理解2【1】(○) ◎ 日本語口語表現1【1】(○) ◎ 日本語口語表現2【1】(○) ◎ 日本文学表現1【1】(○) ◎ 日本文学表現2【1】(○) ◎				8				
			応用日本語理解1【1】(△) ◎ 応用日本語理解2【1】(△) ◎	応用日本語表現1【1】(△) ◎ 応用日本語表現2【1】(△) ◎			・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・日本語「導入」から8科目8単位を修得していなければ、履修することができません。			
外 国 語 科 目	A 群	Basics of English (RL) 1a【1】(△) ◎ Basics of English (RL) 1b【1】(△) ◎ または Intermediate English (RL) 1a【1】(△) ◎ Intermediate English (RL) 1b【1】(△) ◎					・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・English Speaking a・b, Advanced English a・b, English Language and Cultures a・bは、各科目4単位まで修得することができます。 ・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・同一言語の科目をすべて（4科目4単位）履修している、あるいは修得している場合、他の言語を履修することはできません。 ・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・「基礎」の各科目は、2単位まで修得することができます。ただし、同一年度に同一科目を履修することはできません。 ・「応用」の各科目は、同一年度に2単位、年度を越えてさらに合計4単位まで修得することができます。 ・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・履修するためには、母語以外の外国語「導入」から同一言語の初級1 a・bと初級2 a・bをすべて（4科目4単位）履修していなければなりません。 ・履修する場合には、母語以外の外国語「導入」で4科目4単位を修得した言語とは異なる言語から、同一言語の選択1 a・bをセットで履修してください。 ・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・言語文化研究(ヨーロッパ)1【△】 言語文化研究(ヨーロッパ)2【△】			
	B 群	Basics of English (SW) 1a【1】(△) ◎ Basics of English (SW) 1b【1】(△) ◎ または Intermediate English (SW) 1a【1】(△) ◎ Intermediate English (SW) 1b【1】(△) ◎								
		English Speaking a【1】(△) ◎ English Speaking b【1】(△) ◎	Computer Aided Instruction a【1】(△) ◎ Computer Aided Instruction b【1】(△) ◎	Computer Aided Instruction for TOEIC a【1】(△) ◎ Computer Aided Instruction for TOEIC b【1】(△) ◎						
			Advanced English a【△】 Advanced English b【△】 English Language and Cultures a【△】 English Language and Cultures b【△】	English Presentation a【△】 English Presentation b【△】 English Writing a【△】 English Writing b【△】	Screen English a【△】 Screen English b【△】					
	導 入	ドイツ語初級1 a【1】(△) ◎ ドイツ語初級1 b【1】(△) ◎ ドイツ語初級2 a【1】(△) ◎ ドイツ語初級2 b【1】(△) ◎ フランス語初級1 a【1】(△) ◎ フランス語初級1 b【1】(△) ◎ フランス語初級2 a【1】(△) ◎ フランス語初級2 b【1】(△) ◎	中国語初級1 a【1】(△) ◎ 中国語初級1 b【1】(△) ◎ 中国語初級2 a【1】(△) ◎ 中国語初級2 b【1】(△) ◎ スペイン語初級1 a【1】(△) ◎ スペイン語初級1 b【1】(△) ◎ スペイン語初級2 a【1】(△) ◎ スペイン語初級2 b【1】(△) ◎	ロシア語初級1 a【1】(△) ◎ ロシア語初級1 b【1】(△) ◎ ロシア語初級2 a【1】(△) ◎ ロシア語初級2 b【1】(△) ◎ インドネシア語初級1 a【1】(△) ◎ インドネシア語初級1 b【1】(△) ◎ インドネシア語初級2 a【1】(△) ◎ インドネシア語初級2 b【1】(△) ◎	コリア語初級1 a【1】(△) ◎ コリア語初級1 b【1】(△) ◎ コリア語初級2 a【1】(△) ◎ コリア語初級2 b【1】(△) ◎			8		
	母語以外の外国語		基礎	ドイツ語中級1 a【1】(△) ◎ ドイツ語中級1 b【1】(△) ◎ ドイツ語中級2 a【1】(△) ◎ ドイツ語中級2 b【1】(△) ◎ フランス語中級1 a【1】(△) ◎ フランス語中級1 b【1】(△) ◎ フランス語中級2 a【1】(△) ◎ フランス語中級2 b【1】(△) ◎	中国語中級1 a【1】(△) ◎ 中国語中級1 b【1】(△) ◎ 中国語中級2 a【1】(△) ◎ 中国語中級2 b【1】(△) ◎ スペイン語中級1 a【1】(△) ◎ スペイン語中級1 b【1】(△) ◎ スペイン語中級2 a【1】(△) ◎ スペイン語中級2 b【1】(△) ◎	ロシア語中級1 a【1】(△) ◎ ロシア語中級1 b【1】(△) ◎ ロシア語中級2 a【1】(△) ◎ ロシア語中級2 b【1】(△) ◎ インドネシア語中級1 a【1】(△) ◎ インドネシア語中級1 b【1】(△) ◎ インドネシア語中級2 a【1】(△) ◎ インドネシア語中級2 b【1】(△) ◎		コリア語中級1 a【1】(△) ◎ コリア語中級1 b【1】(△) ◎ コリア語中級2 a【1】(△) ◎ コリア語中級2 b【1】(△) ◎		
				応 用	ドイツ語上級1 a【1】(△) ◎ ドイツ語上級1 b【1】(△) ◎ フランス語上級1 a【1】(△) ◎ フランス語上級1 b【1】(△) ◎ 中国語上級1 a【1】(△) ◎ 中国語上級1 b【1】(△) ◎ スペイン語上級1 a【1】(△) ◎ スペイン語上級1 b【1】(△) ◎					
			選択ドイツ語1 a【1】(△) ◎ 選択ドイツ語1 b【1】(△) ◎ 選択フランス語1 a【1】(△) ◎ 選択フランス語1 b【1】(△) ◎ 選択中国語1 a【1】(△) ◎ 選択中国語1 b【1】(△) ◎	選択スペイン語1 a【1】(△) ◎ 選択スペイン語1 b【1】(△) ◎ 選択コリア語1 a【1】(△) ◎ 選択コリア語1 b【1】(△) ◎ 選択アラビア語1 a【1】(△) ◎ 選択アラビア語1 b【1】(△) ◎	選択イタリア語1 a【1】(△) ◎ 選択イタリア語1 b【1】(△) ◎					
		世界の言語と文化(ドイツ語)【△】 世界の言語と文化(フランス語)【△】	世界の言語と文化(中国語)【△】 世界の言語と文化(スペイン語)【△】	世界の言語と文化(ロシア語)【△】 世界の言語と文化(インドネシア語)【△】	世界の言語と文化(コリア語)【△】					
		言語文化研究(ヨーロッパ)1【△】 言語文化研究(ヨーロッパ)2【△】	言語文化研究(アジア)1【△】 言語文化研究(アジア)2【△】	言語文化研究(アメリカ)【△】						
海外語学研修	海外語学短期研修1(外国語)【△】 海外語学短期研修2(外国語)【△】	海外語学短期研修2(外国語)【△】				・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・海外語学短期研修は、夏期学修プログラムを修了した場合に短期研修1に、春期学修プログラムを修了した場合に短期研修2に認定されます。 ・海外語学短期研修は、中期学修プログラムを修了した場合に認定されます。				
		海外語学中期研修1(外国語)【△】 海外語学中期研修2(外国語)【△】 海外語学中期研修3(外国語)【△】	海外語学中期研修4(外国語)【△】 海外語学中期研修5(外国語)【△】 海外語学中期研修6(外国語)【△】	海外語学中期研修7(外国語)【△】 海外語学中期研修8(外国語)【△】						

国際コミュニケーション学部日本語学科 専門科目一覧【外国人留学生】

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必履修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区 分	1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	卒業要件単位	備 考
基礎科目	日本文化入門 [○] 日本語学入門1 [○] 日本語学入門2 [○] 日本語学総合 [○] 日本語情報処理1 [○] 日本語情報処理2 [○]				12	
	異文化理解の実践 [△] メディア日本語論1 [△] メディア日本語論2 [△] 日本語表現論1 [△] 日本語表現論2 [△] 言語学概論 [△]				4	
基幹科目		ゼミナール1 [○] ゼミナール2 [○]			4	・卒業要件単位28単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
	文化とコミュニケーション1 [△] 文化とコミュニケーション2 [△] 日本語の歴史的研究1 [△] 日本語の歴史的研究2 [△]	日本語の社会的研究1 [△] 日本語の社会的研究2 [△]			32	
	日本語教授法A-1 [△] 日本語教授法A-2 [△]				28	
専門科目		日本語の音声1 [△] 日本語の音声2 [△] 日本語の音韻・表記1 [△] 日本語の音韻・表記2 [△] 日本語の語彙・意味1 [△] 日本語の語彙・意味2 [△]	日本語の文法1 [△] 日本語の文法2 [△] 現代日本語の研究1 [△] 現代日本語の研究2 [△] 日本語教材研究1 [△] 日本語教材研究2 [△]	日本語の文献研究1 [△] 日本語の文献研究2 [△] 日本語統計・情報処理 [△] コーパス日本語学1 [△] コーパス日本語学2 [△]		・卒業要件単位8単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
	発展科目		ゼミナール3 [○] ゼミナール4 [○]		4	
		社会言語学1 [△] 社会言語学2 [△] 日本語の語用論1 [△] 日本語の語用論2 [△] 対照言語学 [△] 学習文法研究1 [△] 学習文法研究2 [△]	第二言語習得研究1 [△] 第二言語習得研究2 [△] 日本語言語政策史1 [△] 日本語言語政策史2 [△]		12	
	応用科目		日本語教育実習A (4) [△] 日本語教授法B-1 [△] 日本語教授法B-2 [△]		ゼミナール5 [○] ゼミナール6 [○] 卒業論文 (8) [○]	
関連科目	中国文学講義1 [△] 中国文学講義2 [△]					・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。
	日本文学概論 (古典) 1 [△] 日本文学概論 (古典) 2 [△]	日本文学概論 (近現代) 1 [△] 日本文学概論 (近現代) 2 [△]	書道1 [△] 書道2 [△]			
	地域研究 (北米) [△] 地域研究 (ラテンアメリカ) [△] 地域研究 (ヨーロッパ) [△] 地域研究 (アジア) [△] 地域研究 (中国) [△]		文化の衝突と融合 [△] 移動と交流の文化史 [△] 比較文化 [△] 宗教と文化 [△] 思想と文化 [△]	多文化共生論 [△]		
			越境する文化 [△] 環境と文化 [△] 資源としての文化 [△] 現代社会と多様性 [△] 植民地と現代世界 [△] 現代文化論 [△]	国際政治の基礎 [△] 国際関係論I [△] 国際関係論II [△] ビジネス英語A [△] ビジネス英語B [△]		
自由選択修得要件単位	自由選択修得要件単位には、所定の卒業要件単位を超えて修得した転換・導入科目、教養科目、外国語科目、専門科目、資格課程の一部の科目、全学公開科目の単位が算入されます。				28	
	総 計				124	
年間履修上限単位	44	44	44	48		

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 転換・導入科目、教養科目、外国語科目一覧【外国人留学生】

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区分	1年次	2年次	3年次	4年次	卒業要件単位	備考		
転換 導入科目	専修大学入門科目	専修大学入門ゼミナール ▲				・修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。		
	データリテラシー	データ分析入門 ▲						
	キャリア基礎科目	キャリア入門 △						
	情報リテラシー科目	情報入門1 △ 情報入門2 △						
教養 科目	基礎自然科学	あなたと自然科学 ▲				・卒業要件単位14単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・テーマ科目は、科目名の括弧内に示す表記が異なれば、それぞれ履修することができます（同一年度の複数履修も可能）。 ・教養テーマゼミナル論文は、教養テーマゼミナルの単位を修得し、次年度以降に同一教員の教養テーマゼミナルを履修する場合に作成（履修）することができます。 ・アドバンストスポーツは、スポーツリテラシーとスポーツウェルネスの単位を修得していなければ、履修することができます。 ・アドバンストスポーツは、種目にかかわらず、複数履修することができます。		
	留学生専修科目	一般日本事情1 ○ 一般日本事情2 ○			4			
	人文科学基礎科目	日本の文学 △ 歴史の視点 △ 基礎心理学入門 △ 応用心理学入門 △	哲学 △ 倫理学 △ 論理学入門 △ ことばと論理 △	芸術学入門 △ ジャーナリズムと現代 △				
	社会科学基礎科目	日本国憲法 △ 法と社会 △ 政治学入門 △ 経済学 △ 現代の経済 △	地理学への招待 △ 社会学入門 △ 現代の社会学 △ 社会科学論 △ 社会思想 △ 教育学入門 △	子どもと社会の教育学 △ 情報社会 △ はじめての経営 △ マーケティングスーシックス △ 企業と会計 △				
	自然科学系科目	生物科学1 a △ 生物科学1 b △ 生物科学2 a △ 生物科学2 b △ 生物科学3 a △ 生物科学3 b △	宇宙地球科学1 a △ 宇宙地球科学1 b △ 宇宙地球科学2 a △ 宇宙地球科学2 b △ 化学1 a △ 化学1 b △	化学2 a △ 化学2 b △ 物理学1 a △ 物理学1 b △ 物理学2 a △ 物理学2 b △	数理学1 a △ 数理学1 b △ 数理学2 a △ 数理学2 b △ 数理学3 a △ 数理学3 b △		科学論1 a △ 科学論1 b △ 科学論2 a △ 科学論2 b △	8
	融合領域科目		学際科目1 △ 学際科目2 △ 学際科目3 △ 学際科目4 △	学際科目5 △ 学際科目6 △ 学際科目7 △ 学際科目8 △	学際科目9 △ 学際科目10 △ 学際科目11 (4) △ 学際科目12 (4) △			
			テーマ科目 △					
			新領域科目1 △ 新領域科目2 △	新領域科目3 △ 新領域科目4 △	新領域科目5 △			
			キャリア科目1 △ キャリア科目2 △					
			教養テーマゼミナル1 (4) △	教養テーマゼミナル2 (4) △	教養テーマゼミナル3 (4) △ 教養テーマゼミナル論文 △			
保健体育系科目	スポーツリテラシー (1) ○	スポーツウェルネス (1) ○			2			
外国語 科目	日本語 導入	日本語文章理解1 (1) ○ 日本語文章理解2 (1) ○ 日本語音声理解1 (1) ○ 日本語音声理解2 (1) ○ 日本語口頭表現1 (1) ○ 日本語口頭表現2 (1) ○ 日本語文章表現1 (1) ○ 日本語文章表現2 (1) ○				8		
		応用日本語理解1 (1) △ 応用日本語理解2 (1) △	応用日本語表現1 (1) △ 応用日本語表現2 (1) △					
	母語以外の外国語 導入	Advanced English a △ Advanced English b △		English Language and Cultures a △ English Language and Cultures b △			8	
		ロシア語初級1 a (1) △ ロシア語初級1 b (1) △ ロシア語初級2 a (1) △ ロシア語初級2 b (1) △ インドネシア語初級1 a (1) △ インドネシア語初級1 b (1) △ インドネシア語初級2 a (1) △ インドネシア語初級2 b (1) △	選択ドイツ語1 a (1) △ 選択ドイツ語1 b (1) △ 選択フランス語1 a (1) △ 選択フランス語1 b (1) △ 選択中国語1 a (1) △ 選択中国語1 b (1) △	選択スペイン語1 a (1) △ 選択スペイン語1 b (1) △ 選択ロシア語1 a (1) △ 選択ロシア語1 b (1) △ 選択アラビア語1 a (1) △ 選択アラビア語1 b (1) △	選択イタリア語1 a (1) △ 選択イタリア語1 b (1) △			
海外語学研修	海外語学短期研修1 (外国語) △	海外語学短期研修2 (外国語) △						
		海外語学中期研修1 (外国語) △ 海外語学中期研修2 (外国語) △ 海外語学中期研修3 (外国語) △	海外語学中期研修4 (外国語) △ 海外語学中期研修5 (外国語) △ 海外語学中期研修6 (外国語) △	海外語学中期研修7 (外国語) △ 海外語学中期研修8 (外国語) △				

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 専門科目一覧【外国人留学生】

○：必修 ◎：選択必修 △：選択 ▲：必修

※科目名の後ろに記載されている（ ）内の数字は、単位数を示す（記載のない科目は2単位）。

区 分	1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	卒業要件単位	備 考	
専 門 科 目	日本文化入門 [○] 異文化理解の実践 [▲]				2	・卒業要件単位7単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・卒業要件単位6単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。 ・卒業要件単位24単位を超えて修得した単位は、自由選択修得要件単位に算入されます。	
	Readings in Liberal Arts 1 (1) [○] Readings in Liberal Arts 2 (1) [○] Writing with Clarity 1 (1) [○] Writing with Clarity 2 (1) [○] Cross-Cultural Studies (1) [○] ドイツ語基礎 A (1) [○] ドイツ語基礎 B (1) [○] ドイツ語基礎 C (1) [○] ドイツ語基礎 D (1) [○] ドイツ語基礎 E (1) [○] フランス語基礎 A (1) [○] フランス語基礎 B (1) [○] フランス語基礎 C (1) [○] フランス語基礎 D (1) [○] フランス語基礎 E (1) [○] 中国語基礎 A (1) [○] 中国語基礎 B (1) [○] 中国語基礎 C (1) [○] 中国語基礎 D (1) [○] 中国語基礎 E (1) [○] スペイン語基礎 A (1) [○] スペイン語基礎 B (1) [○] スペイン語基礎 C (1) [○] スペイン語基礎 D (1) [○] スペイン語基礎 E (1) [○] コリア語基礎 A (1) [○] コリア語基礎 B (1) [○] コリア語基礎 C (1) [○] コリア語基礎 D (1) [○] コリア語基礎 E (1) [○]				5		
	Academic Skills (1) [○] Talking Tasks 1 (1) [○] Talking Tasks 2 (1) [○] ドイツ語コミュニケーション A (1) [○] ドイツ語コミュニケーション B (1) [○] ドイツ語コミュニケーション C (1) [○] フランス語コミュニケーション A (1) [○] フランス語コミュニケーション B (1) [○] フランス語コミュニケーション C (1) [○] 中国語コミュニケーション A (1) [○] 中国語コミュニケーション B (1) [○] 中国語コミュニケーション C (1) [○] スペイン語コミュニケーション A (1) [○] スペイン語コミュニケーション B (1) [○] スペイン語コミュニケーション C (1) [○] コリア語コミュニケーション A (1) [○] コリア語コミュニケーション B (1) [○] コリア語コミュニケーション C (1) [○]						7
	世界の文化を知る (北米) [△] 世界の文化を知る (ラテンアメリカ) [△] 世界の文化を知る (ヨーロッパ) [△] 世界の文化を知る (アジア) [△]	文化研究の視点 [△] ことば・身体・映像 [△]					6
		異文化交流ワークショップ [○]	ゼミナール1 [○] ゼミナール2 [○]	ゼミナール3 [○] ゼミナール4 [○] 卒業研究 (6) [○]			18
	海外研修 (リーディング) [△] 海外研修 (リスニング) [△] 海外研修 (ライティング) [△] 海外研修 (スピーキング) [△] 海外研修 (リサーチ) [△] 海外研修 (プレゼンテーション) [△] 海外研修 (ディスカッション) [△] 海外研修 (異文化理解) [△]						48
		Big Reading for Speed [△] Critical Reading [△] Verbal Communication [△] Talking Points [△] Presentation & Research [△] Critical Writing [△]	ドイツ語総合 A [△] ドイツ語総合 B [△] ドイツ語実践 A [△] ドイツ語実践 B [△] フランス語総合 A [△] フランス語総合 B [△]	フランス語実践 A [△] フランス語実践 B [△] 中国語総合 A [△] 中国語総合 B [△] 中国語実践 A [△] 中国語実践 B [△]	スペイン語総合 A [△] スペイン語総合 B [△] スペイン語実践 A [△] スペイン語実践 B [△] コリア語総合 A [△] コリア語総合 B [△]		24
			Topics in English A [△] Topics in English B [△] ドイツ語表現 A [△] ドイツ語表現 B [△]	フランス語表現 A [△] フランス語表現 B [△] 中国語表現 A [△] 中国語表現 B [△]	スペイン語表現 A [△] スペイン語表現 B [△] コリア語表現 A [△] コリア語表現 B [△]		
	地域研究 (北米) [△] 地域研究 (ラテンアメリカ) [△]	地域研究 (ヨーロッパ) [△] 地域研究 (アジア) [△]	地域研究 (中国) [△]				2
		文化の衝突と融合 [△] 移動と交流の文化史 [△]	比較文化 [△] 宗教と文化 [△]	思想と文化 [△] 多文化共生論 [△]			2
	ことばのしくみ [△] ことばの習得 [△]	身体とコミュニケーション [△] 映像とコミュニケーション [△]			2		
テーマ研究 (北米) [△] テーマ研究 (ラテンアメリカ) [△] テーマ研究 (ヨーロッパ) [△]	テーマ研究 (中東欧・ロシア) [△] テーマ研究 (イギリス) [△] テーマ研究 (アジア) [△]	テーマ研究 (中国) [△]			2		
	越境する文化 [△] 環境と文化 [△]	資源としての文化 [△] 現代社会と多様性 [△]	植民地と現代世界 [△] 現代文化論 [△]		2		
	ことばと心 [△] ことばと社会 [△]	メディア文化論 [△] 身体文化論 [△]	映像文化論 [△]		2		
身体系特殊講義 [△] 映像音楽系特殊講義 [△] チェコ語 1 [△] チェコ語 2 [△] ベトナム語 1 [△] ベトナム語 2 [△] メディア日本語論 1 [△]	メディア日本語論 2 [△] 国際政治の基礎 [△] 国際関係論 I [△] 国際関係論 II [△] ビジネス英語 A [△] ビジネス英語 B [△]				14		
自由選択修得要件単位には、転換・導入科目で修得した単位のほか、所定の卒業要件単位数を超えて修得した教養科目、外国語科目、専門科目、資格課程の一部の科目及び全学公開科目の単位が算入されます。					21		
	総 計				124		
年間履修上限単位	44	40	44	48			

VIII 教職，司書，司書教諭，学校司書， 学芸員課程

専修大学の
学士課程教育

大学における学修

転換・導入科目

教養科目

外国語科目

専門科目

外国人留学生の
履修について

資格課程

海外留学
プログラム

情報科学センター

卒業後の進路

各種規程・規則

1. 教職課程

本学では、中学校および高等学校の「教育職員免許状」（以下「免許状」という）を取得することを希望する学生のために、教職課程を設置しています。

現在の法律では、原則として免許状を取得していないものは教職に就くことができませんので、将来教職に就く意思のある学生は、教職課程を履修し、免許状を取得してください。

本学で免許状を取得するためには、原則として3年間以上教職課程の科目を履修し、単位を修得しなければなりません。教職課程の履修方法等は、年度初めに行われる資格課程ガイダンスに出席し、説明を受けてください。

また、修得科目・修得単位は学部・学科によって異なります。詳細については、履修初年度のガイダンスで配布する「教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック」を参照してください。

なお、教職課程を履修する場合は履修初年度に教職課程受講料を納入する必要があります。

取得できる免許状は次のとおりです。

学 部	学 科	種 類 ・ 教 科	
		中学校教諭一種免許状	高等学校教諭一種免許状
国際コミュニケーション学部	日本語学科	国 語	国 語

※異文化コミュニケーション学科の学生は教育職員免許状を取得できません。

※教員免許更新制（免許状更新講習）について

免許状には最長10年間の有効期限が設けられ、免許状を失効させないために、免許状取得要件を満たしてから10年毎に免許状更新講習を受講し、免許状の更新を行うことが義務付けられています。免許状更新講習を受講しなかった場合や受講後の更新手続きをしなかった場合は、免許状が失効することになります。

2. 司書・司書教諭・学校司書課程

司書課程は、公共図書館、大学図書館、研究機関や企業の資料室などで、資料や情報を収集・整理し、これらを利用者に対して適切に提供する専門職（司書）の養成を目的としています。

司書教諭課程は、初等・中等教育の基礎をなす学校図書館の専門職（司書教諭）の養成を目的としています。なお、司書教諭の資格を取得するためには、司書教諭課程の履修と併せて、教職課程を履修し、教育職員免許状を取得しなければなりません。

学校司書課程は、学校および学校図書館において、図書館資料の管理や提供および授業の支援や情報活用能力の育成などの職務について、司書教諭と協働しながら従事する学校司書の養成を目的としています。

本学で司書の資格を取得するためには原則として3年間以上、司書課程の授業を履修し、15科目30単位以上を修得しなければなりません。また、司書教諭については5科目10単位以上、学校司書については13科目26単位を修得しなければなりません。

司書、司書教諭、学校司書課程の履修方法等は、年度初めに行われる資格課程ガイダンスに出席し、説明を受けてください。また、履修初年度のガイダンスで配布する「教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック」も併せて参照してください。

なお、司書課程、司書教諭課程、学校司書課程を履修する場合は履修初年度に各課程の受講料を納入す

る必要があります。

※異文化コミュニケーション学科の学生は教育職員免許状を取得できないため、司書教諭課程を履修できません。

3. 学芸員課程

学芸員課程は、博物館、美術館、歴史資料館、考古資料館、民俗資料館、民芸館、文学館、文書館、動・植物園、水族館、科学館等に勤務し、その事業の目的を達成するために、資料の収集、保管、展示および調査研究、その他これに関連する事業についての専門的事項を司る専門職員を養成することを目的としています。

本学で学芸員の資格を取得するためには、原則として2年間以上、学芸員課程の科目を履修し、13科目27単位以上を修得しなければなりません。

学芸員課程の履修方法等は、年度初めに行われる資格課程ガイダンスに出席し、説明を受けてください。また、履修初年度のガイダンスで配布する「教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック」も併せて参照してください。

なお、学芸員課程を履修する場合は履修初年度に、学芸員課程受講料を納入する必要があります。

4. 大学院教職課程

大学において教育職員免許法に定める所定単位を修得し、中学校教諭一種免許状・高等学校教諭一種免許状の授与を受けた者が、大学院修士課程で本学所定の単位を修得し修了した場合、中学校教諭専修免許状・高等学校教諭専修免許状を取得することができます。詳細は教務課資格課程事務室で確認してください。

5. 科目等履修生

在学中の単位不足等により本学卒業後、教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程の履修を希望する者は、科目等履修生として必要単位を修得できる制度があります。ただし、科目等履修生となるためには、前年度の2月中旬～下旬に出願し、面接選考のうえ、合格した場合に限り許可されます。

なお、詳細については、二部事務課窓口（神田校舎）へお問い合わせください。

Ⅸ 海外留学プログラム

本学では、1985年にネブラスカ大学リンカーン校（米国）およびサスケハナ大学（米国）と国際交流協定を締結以来、18ヶ国・地域26大学（令和4年1月現在）と大学間協定を結び、教員及び学生の相互交流を積極的に進めています。学部学生の参加できる海外留学プログラムは以下のとおりです（令和4年1月現在）。留学プログラムや留学先により応募条件が異なりますので、詳細については国際交流事務課窓口・グローバルカウンターにお問い合わせください。

1. 長期交換留学プログラム

国際交流協定を結んでいる海外の大学に最長1年間留学し、正規授業科目を履修するプログラムです。このプログラムの参加学生は専門科目のさらなる理解と語学力の向上のみならず、約1年間の留学で旺盛なチャレンジ精神とグローバルな視野を身に付け、人間的に大きな成長を遂げています。また、交換留学のため、留学先大学への学費の支払いが免除されます。留学先大学で修得した単位は、審査の上60単位を限度に本学の単位に振り替えることができます。なお、認定される科目や単位数については、留学先大学で修得した科目の内容や成績評価に基づき審査されます。

2. セメスター交換留学プログラム

国際交流協定を結んでいる海外の大学に約4～5ヶ月間留学し、留学先大学での1学期相当期間、正規授業科目を履修します。専門科目を学べるだけでなく、留学期間が1学期間に限定されるため、経済的な負担を抑えられます。また、交換留学のため、留学先大学への学費の支払いが免除されます。留学先大学で修得した単位は、審査の上60単位を限度に本学の単位に振り替えることができます。なお、認定される科目や単位数については、留学先大学で修得した科目の内容や成績評価に基づき審査されます。

3. 中期留学プログラム

協定校・研修校に約4～5ヶ月間留学し、留学生対象の集中語学研修に参加するプログラムです。インターナショナルクラスで、実践的なコミュニケーション能力の習得に加え、アカデミック・スキル（プレゼンテーション、ノート・テイキング、リサーチ、論文の書き方等）や異文化理解について学びます。社会知性開発コース（ワイカト大学・ニュージーランド）では、集中語学研修後に海外インターンシップを実施しています。

4. 春期留学プログラム

春期休暇中に、協定校・研修校で語学研修に参加するプログラムです。このプログラムでは語学研修のみならず様々なアクティビティや文化施設訪問を通して文化や歴史について理解を深めることができます。英語コースをはじめ、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語およびコリア語など英語以外の外国語コースもあり、短期間で語学力を向上させるのに最適です。

5. 夏期留学プログラム

夏期休暇中に、協定校・研修校で語学や文化を学ぶ初・中級者向けプログラムとして位置づけられ、「社会知性開発コース」としてイギリスとオーストラリアにて開設しています。イギリスでは現地学生と一緒にプロジェクトワークに取り組み、交流を通して異文化への理解を深めます。また、オーストラリアでは、2週間の海外インターンシップが体験できます。

6. 寮内留学プログラム（日本国内）

協定校等からの交換留学生や短期留学生の滞在する「専修大学国際交流会館」にレジデント・パートナー（RP）として入寮し、4ヶ月または6ヶ月の留学生との協働生活を通じて異文化理解や国際コミュニケーション力を養い、グローバル人材の育成を目指します。参加者は世界各国からの留学生の多様な価値観、発想、習慣等に触れる機会を日常的に持つことができ、「多文化共生」について理解を深めます。また、プログラム修了後も参加者の多くが、留学を実現しています。

専修大学の
学士課程教育

大学における学修

転換・導入科目

教養科目

外国語科目

専門科目

外国人留学生の
履修について

資格課程

海外留学
プログラム

情報科学センター

卒業後の進路

各種規程・規則

X 情報科学センター

1. 情報科学センターの利用について

情報科学センターでは、全学学生が授業および授業時間外にも利用できるパソコン（約2,400台）を生田キャンパス9号館（4階、6階）、10号館（1階情報コアゾーン）、神田キャンパス1号館（3階）、7号館（5階）を中心に設置しています。

各端末室では、パソコンでの文書作成、表計算処理、データベース検索等の利用はもちろんのこと、高速プリンター等の機器も自由に利用できます。また、学内の教室やゼミ室では無線LANが利用できるようになっており、個人のノートパソコンやスマートフォン等を持参すればインターネットが自由に利用できます。

その他にも、在学中であれば、電子メール（専修大学 Gmail）や最新の Microsoft Office（Word・Excel・PowerPoint など）を無償で利用できます。

2. 情報科学センター窓口

情報科学センター窓口は、生田キャンパス9号館4階および神田キャンパス1号館2階に設置されています。詳細については、センターのホームページを参照してください。

3. 開設時間

端末室サービス時間は、情報科学センターホームページで確認してください。

4. 利用手続

情報科学センターを利用するためには、ユーザー ID およびパスワードが必要になります。この2つを正しくパソコンに入力しないと、センターの施設を利用できません。ユーザー ID は入学と同時に学籍番号を基に付与されます。また、パスワードは初期状態の決められたものが付与されます。初期パスワードは、不正利用等を防ぐため、そのまま使用せず必ず変更してください。

5. 講座

情報科学センターでは、1人でも多くの学生にコンピューターの知識およびその利用技術を習得してもらうため、Word や Excel の実践的な使い方、PowerPoint によるプレゼンテーションの技能の習得、情報処理技術者試験対策講座や、MOS 資格試験対策等の各種講座を実施しています。

講座の内容および開催日時等は、センターホームページ等でお知らせします。

XI 卒業後の進路

1. 就職・キャリア形成について

就職とキャリア形成に関する、新入生へのメッセージ

就職指導委員会・キャリアセンター事務局

ご入学おめでとうございます。大学生になったばかりの皆さんは、現在、夢と希望に胸を膨らませていることでしょう。あるいは、どのような大学生活が始まるのか、不安を抱えているかもしれません。しかし、現在のこの入り混じった気持ちを大事にしてください。それは、社会に羽ばたくその日に向け、これからの大学生活をより充実させる力になります。

今後、Society 5.0（超スマート社会）の到来により、「人間のできること」「人間が行うべきこと」が急速に変化します。それにより、既存の価値観や雇用システム、賃金体系なども大きく変化することでしょう。AIの進展とともに、人には既存の常識（知識）を打ち破り、新たなモノや価値を創造できる力が重要となります。

この世相の中で企業は、コンピテンシー（行動特性）やリテラシー（読み書き、応用・活用・理解・発信力）をその採用面接で測ろうとします。しかし、これらの能力は学ぶものではなく、学ぶ中で身に付くものです。つまり、受動的に座学を修めるだけでなく、能動的に学ぶ皆さんが社会から評価されるということです。ご自身の生活基盤の確保のため、長い人生をより有意義なものとするために、既存の知識や常識を尊重しつつも疑い、新たなモノや価値を創造できる、社会の屋台骨を支える人物になる必要があります。

幸いにも皆さんは、社会に出るまでに4年間の時間的な猶予を得ています。これからの大学生活の中では大いに学び、挑戦し、失敗を繰り返し、この「コンピテンシー」「リテラシー」能力を身に付け成長してください。正課科目（授業）においては受け身ではなく自身から学び、課外活動（部活動、サークル、アルバイトなど）においては、それまでの自身の取り組み姿勢を一步超え、挑戦と失敗を体験していただきたいと思います。

多くの社会人が学生時代を振り返り、「大学でもっと学ぶべきであった」と痛感します。ぜひとも、皆さんは「学ぶこと」がいかに大切かを4年間の学びの中で実感し、社会に新たなモノやサービス、新たな価値観を創造できる人材となっていきたいと思います。

やがて皆さんが臨む就職（求職）活動は、そこまでに成長した自身を試す、いわば大学生活の最終段階です。就職活動とは、職に就く、ないしは会社や役所などに勤める契機です。

「人生100年時代」と言われています。そのうえでも、就職（求職）活動は、皆さんの人生をより意味のあるものにするための、重要な生活基盤確保の機会であり、また大事な節目の活動、といえます。

本学の就職支援は、長年にわたり就職指導委員会（教員）とキャリアセンター事務局（職員）が一丸となり行い、学内だけでなく社会からも高い評価を得ています。大学生活の中で能力を向上させた皆さんが、「就職の専修」と言われる本学の就職支援体制を活用することで、夢がきっと叶います。

そのためにも、皆さんは日々学び、地力を蓄え、本学の就職支援プログラムを活用し、就職活動に臨んでください。皆さんの主体的・能動的な学生生活と、我々の支援により、皆さんの就職活動が成功すると確信しています。

2. 大学院進学

大学院の目的

専修大学の学則第1条に「本大学は、社会現象に対する自由でとらわれない研究を基礎とし、古い権威や強力に対してあくまで批判的であることを精神とし、人間の値打ちを尊重する平和的な良心と民主的な訓練を身に付けた若い日本人を創り上げることを目的としている」と理念を述べています。また、大学院については、大学院学則第1条に「本大学院は、本大学の目的及び使命に基づき、学問の自由を尊重し、学術の理論及び応用を教授研究し、その精深を究めて、人類文化の発展に寄与することを目的とする」と記しています。

このような理念および目的のもと、本学大学院は、これまで研究者養成に大きな力を注いできました。本学大学院を修了した多くの研究者が現在、本学の各学部で、また他の大学・研究機関で教授・准教授・講師として教育・研究活動に従事しています。優秀な研究者・教育者を学会に送り出してきたことは本学大学院の誇りとするところです。

大学院の制度

本学大学院は、修士課程と博士後期課程からなる課程制大学院と、法科大学院などの専門職学位課程の専門職大学院に区別されます。本学の課程制大学院は、経済学、法学、文学、経営学、商学の5つの研究科で構成され、いずれの研究科も修士課程と博士後期課程からなっています。修士課程の標準修業年限は2年、博士後期課程は修士課程の上に標準年限3年の課程として設置され、最長在学年限は、修士課程4年、博士後期課程6年です。修士課程では、所定の単位を修得し、かつ、修士論文またはリサーチ・ペーパーの審査および試験に合格すると修士の学位が授与されます。また、博士後期課程では所定の単位を修得し、かつ、博士論文の審査および試験に合格すると博士の学位が授与されます。

大学院の多様化

人々が大学院に期待する内容には、時代の趨勢とともに変化が生じています。

従来は、研究者になるために大学院に進学する人がほとんどでした。このため、大学院は希望する領域について、学部卒業程度の学問知識と外国語文献を研究資料として使用していくのに必要な語学力を試験して入学者を決定していました。そして、修士課程、博士後期課程を通じて、研究者の養成を行いました。

ところが、現在の大学院は、研究者養成だけを目的としているわけではありません。学部を卒業して、さらなる高度な専門知識を得たい人が大学院に進学し、一般企業に就職する例も少なくありません。くわえて、社会人としてすでに働いている人がキャリアアップを目指して学びの必要性を感じたとき、大学院へ進学する例も多くあります。すなわち、大学院はリカレント教育、あるいは生涯教育の場としても機能しています。

最近におけるわが国の企業の置かれた状況をみると、終身雇用と年功序列の体系が崩れ、また、新卒者の離職率が高まり、途中入社の人が増えつつあります。とくに、これまで大企業は自社の企業文化を引き継ぐのに適した新卒者を採用して、その職務に必要な技能や能力をOJTなどによって社内で教育してきましたが、現在ではその余力が乏しくなっています。急激な技術の変化や市場の変化に対応することを個人に求めてきています。したがって、より高度な職業人になるためにも、学部および大学院での修学を通じて、論理性や批判的思考力、広い視野、コミュニケーション能力、他者と共生する力、創造力、変化へ

の適応力、主体性と責任感を備えた行動力、データ処理・活用能力など、普遍的なスキル・リテラシーを身に付けることなどが必要となります。大学院はこの志をもつ人達にも門戸を開いています。

大学院入試

大学院に入学するには自らの研究テーマを設定し、そのテーマに適した専攻分野を選んで志願し、入学試験に合格しなければなりません。

本学大学院各研究科の入学試験には、本学学部卒業見込み者を対象とした学内選考入学試験、9～10月に行われる第Ⅰ期入学試験および2月に行われる第Ⅱ期入学試験があります（各研究科により出願期間等が異なりますので、詳細は大学院事務課までお問い合わせください。）。

また、第Ⅰ期入学試験と第Ⅱ期入学試験では、一般、社会人、外国人留学生の区分があり、筆記試験と口述試験が行われます。

大学院進学に関する相談窓口

大学院への進学、入学試験、学業や奨学金などに疑問や不安がありましたら、大学院事務課窓口（専門職大学院については法科大学院事務課窓口）へお問い合わせください。

神田キャンパス 大学院事務課 7号館4階

法科大学院事務課 8号館2階

生田キャンパス 大学院事務課 2号館1階

XII 各種規程・規則

1. 専修大学履修規程

平成30年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、専修大学学則第4条第3項の規定に基づき、専修大学（以下「本学」という。）における授業科目並びにその単位数及び履修方法並びに修得すべき単位に関し必要な事項を定めるものとする。

(授業科目の種類)

第2条 授業科目の種類は、次のとおりとする。

- (1) 必修科目 当該学部・学科の教育目的を達成するため、卒業要件として修得を必要とする授業科目をいう。
- (2) 選択科目 学生の履修目的に応じて選択し、修得単位を卒業要件に算入する授業科目（選択必修科目及び必修履修科目を含む。）をいう。
- (3) 自由科目 履修することはできるが、修得単位を卒業要件に算入しない授業科目をいう。

(履修方法)

第3条 各学部・学科並びに教職課程、司書課程、司書教諭課程、学校司書課程及び学芸員課程（以下「資格課程」という。）において履修する授業科目は、入学した年次に適用される学修ガイドブック及びこの規程に従い、学生本人が決定するものとする。

(単位数及び授業科目)

第4条 各学部・学科の卒業要件単位数及び授業科目並びに資格課程の取得等要件単位数及び授業科目は、別表第1から別表第3まで及び前条の学修ガイドブックに定めるところによる。

(履修登録)

第5条 授業科目の履修登録は、前期及び通年の授業科目（後期の授業科目のうち、前期に履修登録することが必要な授業科目を含む。）にあつては前期履修科目登録期間、後期の授業科目にあつては後期履修科目登録期間に行うものとする。

- 2 後期に履修する授業科目についても、原則として、前項の履修科目登録期間に履修登録するものとする。

(スポーツ・ウェルネス・プログラムの履修登録)

第6条 スポーツ・ウェルネス・プログラムの履修登録に関し必要な事項は、入学した年次に適用される「SWP学修ガイドブック」に定めるところによる。

(資格課程科目の履修登録)

第7条 教職課程科目は、教員の免許状授与の所要資格を取得しようとする者が、所定の期日までに、所定の受講料、実習料等を納入することにより履修することができる。

- 2 司書課程科目及び司書教諭課程科目は、司書又は司書教諭の資格を取得しようとする者が、所定の期日までに、所定の受講料を納入することにより履修することができる。
- 3 学校司書課程科目は、学校司書課程を修了しようとする者が、所定の期日までに、所定の受講料を納入することにより履修することができる。
- 4 学芸員課程科目は、学芸員の資格を取得しようとする者が、所定の期日までに、所定の受講料及び実習料を納入することにより履修することができる。

5 資格課程科目の履修登録に関し必要な事項は、入学した年次に適用される「教職・司書・司書教諭・学校司書・学芸員課程学修ガイドブック」に定めるところによる。

(履修上限単位数)

第8条 1年間に履修登録することができる履修上限単位数は、各学部・学科が別に定めるところによる。

2 履修上限単位数には、再履修科目の単位を含めるものとし、次に掲げる単位を含めないものとする。

(1) 海外語学短期研修に参加したことにより認定される単位

(2) 資格試験により認定される単位

(3) 専修大学科目等履修生(附属高等学校生徒)として履修し、本学に入学した後、単位認定される授業科目の単位

(4) 資格課程科目として履修する授業科目の単位

(履修登録することができない授業科目)

第9条 教養科目及び外国語科目の授業科目のうち、外国人留学生のために開講する授業科目は、外国人留学生以外の学生は、履修登録することができない。

2 前項の授業科目を履修登録した場合は、当該授業科目の履修登録を無効とする。

(再度の履修登録の禁止)

第10条 既に単位を修得した授業科目と同一名称の授業科目は、各学部・学科が指定する授業科目を除き、再び履修登録することができない。

2 再び履修登録した場合は、当該授業科目の履修登録を無効とする。

(重複した履修登録の禁止)

第11条 履修する年度において、同一の履修期間、曜日及び時限に行われる授業科目は、重複して履修登録してはならない。

2 重複して履修登録した場合は、いずれの授業科目の履修登録も無効とする。

(履修登録の修正、削除、追加及び変更)

第12条 履修登録の修正、削除、追加及び変更は、各学部・学科が指定する授業科目を除き、履修科目登録期間及び履修修正期間に限り認めるものとする。ただし、当該期間以外の期間であっても特別の理由があると認められる場合は、履修登録の修正、削除、追加及び変更を認めることができる。

2 あらかじめ履修クラスが指定されている授業科目については、原則として、履修クラスの変更を認めないものとする。

3 履修者制限が行われた授業科目で、一旦履修を許可されたものについては、原則として、その削除及び変更を認めないものとする。

(履修の中止)

第13条 履修を継続する意思のない授業科目は、各学部・学科が指定する授業科目を除き、所定の履修中止申請期間に、所定の手続を行うことにより履修を中止することができる。

2 履修の中止については、次に定めるところにより取り扱うものとする。

(1) 履修を中止した授業科目は、授業への出席、定期試験の受験及び単位の修得をすることができない。

(2) 履修を中止した授業科目の単位は、当該年度の履修上限単位数に含める。

(3) 履修を中止した授業科目の単位数分の新たな履修登録は認めない。

(4) 履修を中止した授業科目は、GPA及び平均点に算入しない。

- (5) 履修の中止により当該年度に履修登録した授業科目が無くなる場合は、履修中止申請を認めない。
(6) 履修中止申請は、取り下げることができない。

(単位の修得)

第14条 履修登録を行わない授業科目については、単位を修得することができない。ただし、履修登録を行わない授業科目であっても本学が認定する単位については、この限りでない。

(事務所管)

第15条 この規程に関する事務は、教務部教務課の所管とする。

(規程の改廃)

第16条 この規程の改廃は、教授会の議を経て、学長が行う。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は、平成31年4月1日から施行する。

(経過措置)

- 2 改正後の専修大学履修規程の規定は、平成31年度以後の入学者について適用し、平成30年度以前の入学者については、なお従前の例による。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は、令和2年4月1日から施行する。

(経過措置)

- 2 改正後の専修大学履修規程の規定は、令和2年度以後の入学者について適用し、平成31年度以前の入学者については、なお従前の例による。

附 則

この規程は、令和3年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は、令和4年4月1日から施行する。

(経過措置)

- 2 改正後の専修大学履修規程の規定は、令和4年度以後の入学者について適用し、令和3年度以前の入学者については、なお従前の例による。

別表第1 (第4条関係) 略

別表第2 (第4条関係) 略

別表第3 (第4条関係) 略

2. 専修大学定期試験規程

昭和54年7月10日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、専修大学学則第17条の規定に基づき実施する試験に関し、必要な事項を定めるものとする。

(定義)

第1条の2 この規程において「試験」とは、学事暦により期間を定めて実施する定期試験をいう。

(種類)

第2条 試験の種類は、次の各号に定めるとおりとする。

- (1) 前期試験 前期で終了する授業科目について実施する試験をいう。
- (2) 後期試験 後期で終了する授業科目及び通年で終了する授業科目について実施する試験をいう。
- (3) 前期追試験 第1号の試験を受験できなかった者に対し、当該授業科目について実施する試験をいう。
- (4) 後期追試験 第2号の試験を受験できなかった者に対し、当該授業科目について実施する試験をいう。

(時期)

第3条 試験の実施の時期は、次の各号に定めるとおりとする。ただし、実施の時期を変更することがある。

- (1) 前期試験 7月～8月
- (2) 後期試験 1月～2月
- (3) 前期追試験 8月
- (4) 後期追試験 2月～3月

(試験方法)

第4条 試験は、筆記、口述又は実技によるものとする。ただし、レポートをもってこれに替えることができる。

(試験時間)

第5条 試験時間は、原則として60分とする。

(試験監督)

第6条 試験監督は、当該授業科目担当教員が行う。ただし、必要に応じて補助者を加えることがある。

2 試験監督者は、試験場において試験を厳正かつ円滑に実施する義務とこれに伴う権限を有する。

(試験委員)

第7条 試験の実施に際し、試験委員を置く。

- 2 試験委員は、試験の実施を統轄する義務と権限を有する。
- 3 試験委員は、教授会の承認を得て、学長が委嘱する。
- 4 試験委員は、試験の実施結果を学長に報告しなければならない。

(受験資格の取得)

第8条 受験資格は、次の各号の所定の手続を完了することにより取得する。

- (1) 履修科目登録の手続

- (2) 学費の納入手続
- (3) その他所定の手続

2 前項の規定にかかわらず、試験時において休学又は停学中の者は、受験資格を有しない。
(受験資格の喪失)

第9条 次の各号の一に該当する者は、当該授業科目の受験資格を失う。ただし、第4号については、別に定める「定期試験における不正行為者処分規程」による。

- (1) 学生証を携帯していない者
- (2) 試験開始後20分を超えて、遅刻した者
- (3) 試験監督者の指示に従わない者
- (4) 試験において不正行為を行った者

2 前項第1号に該当する者に対して、当日のみ有効とする臨時学生証による受験を認める。

3 臨時学生証の交付を受けようとする者は、当該試験開始時刻までに、一部の試験については教務課窓口、二部の試験については二部事務課窓口に出なければならぬ。

4 前項の規定にかかわらず、同項の規定による申出をしなかった場合であっても、その者が試験教室において、当該試験開始時刻までに試験監督者に対し、学生証不携帯の旨を申し出たときは、臨時学生証の交付を認めることができる。

5 前2項の規定による臨時学生証の交付に当たっては、所定の交付手数料を徴収するものとする。
(受験手続)

第10条 第2条第1号及び第2号による受験者は、試験前に公示する「定期試験実施要領」により、所定の手続を完了しなければならない。

2 第2条第3号及び第4号による受験者は、所定の期日までに追試験受験願及び次の各号に定める試験欠席理由を証明する書類を提出し、受験許可を得なければならない。

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| (1) 教育実習 | 教育実習参加を証明するもの |
| (2) 就職試験 | 就職試験受験を証明するもの |
| (3) 業務命令による出張又は超過勤務 | 所属長による証明書 |
| (4) 公式試合 | 公式試合参加を証明するもの |
| (5) 天災その他の災害 | 被災を証明するもの |
| (6) 二親等以内の危篤又は死亡 | 危篤又は死亡を証明するもの |
| (7) 本人の病気又は怪我 | 医師の診断書 |
| (8) 交通機関の事故 | 遅延又は事故を証明するもの |
| (9) その他当該学部長がやむを得ない理由と認めた事項 | 学部長の承認を得た本人記載の理由書 |

(成績評価)

第11条 成績評価は、100点を満点とし、60点以上を合格とし、60点未満を不合格とする。

2 前項の場合において、成績評価の区分は、90点以上をS、85点以上90点未満をA+、80点以上85点未満をA、75点以上80点未満をB+、70点以上75点未満をB、65点以上70点未満をC+、60点以上65点未満をC、60点未満をFとする。

3 前項の成績評価の区分に応じてグレード・ポイントを付与し、グレード・ポイント・アベレージ(GPA)を算出する。この場合において、グレード・ポイントは、Sを4.0、A+を3.5、Aを3.0、B+を2.5、Bを2.0、C+を1.5、Cを1.0、Fを0.0とする。

(成績発表)

第12条 試験の成績結果は、9月及び3月に本人に通知する。

(受験者の義務)

第13条 受験者は、次の各号に定める事項を厳守しなければならない。

- (1) 試験場においては、試験監督者の指示に従うこと。
- (2) 試験開始後20分以内の遅刻者は、試験監督者の入室許可を得ること。
- (3) 学生証を机の上に提示すること。
- (4) 解答にさきだって、学籍番号及び氏名を記入すること。
- (5) 学籍番号及び氏名の記入は、ペン又はボールペンを使用すること。
- (6) 試験開始後30分以内は、退場しないこと。
- (7) 配付された答案用紙は、必ず提出すること。
- (8) 試験場においては、物品の貸借をしないこと。

(無効答案)

第14条 次の各号の一に該当する答案は、無効とする。

- (1) 第8条に定める受験資格を有していない者の答案
- (2) 第9条に該当する者の答案
- (3) 学籍番号及び氏名が記入されていない答案
- (4) 不正行為に該当する者の答案
- (5) 授業科目の担当者、曜日又は時限を間違えて受験した者の答案

(不正行為)

第15条 試験における不正行為とは、次の各号の一に該当する場合をいう。

- (1) 代人が受験したとき。(依頼した者・受験した者)
- (2) 答案を交換したとき。
- (3) カンニングペーパーを廻したとき。
- (4) カンニングペーパーを使用したとき。
- (5) 所持品(電子機器を含む。)その他へ事前に書込みをして、それを使用したとき。
- (6) 他人の答案を写したとき。(見た者・見せた者)
- (7) 言語・動作・電子機器等で連絡したとき。(連絡した者・連絡を受けた者)
- (8) 使用が許可されていない参考書・電子機器その他の物品を使用したとき。
- (9) 他人の学生証で受験したとき。(貸した者・借りた者)
- (10) 偽名答案を提出したとき又は氏名を抹消して提出したとき。
- (11) 故意による答案無記名のとき。
- (12) 答案を提出しなかったとき。
- (13) 使用が許可された参考書等の貸借をしたとき。
- (14) その他試験監督者及び試験委員が不正行為と認めたとき。

(不正行為の確認)

第16条 試験監督者は、不正行為を発見した場合、その受験者の受験を直ちに中止させ、本人を同行して試験委員に報告するものとする。

- 2 試験委員は、学生部委員の立会いのもとに、不正行為の事実確認を行う。
- 3 試験委員は、不正行為が確認された場合、本人に始末書を提出させ、速やかに当該学部長に報告しな

ければならない。

(不正行為者の処分)

第17条 不正行為者の処分は、別に定める「定期試験における不正行為者処分規程」による。

(規程の改廃)

第18条 この規程の改廃は、教授会の議を経て学長が決定する。

附 則

この規程は、昭和54年7月10日から施行する。

附 則

- 1 この規程は、平成8年7月5日から施行する。
- 2 平成7年度以前の二部入学生の試験の種類及び実施の時期は、なお従前の例による。

附 則

この規程は、平成13年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成13年7月25日から施行し、平成13年7月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成16年4月15日から施行し、平成16年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は、平成27年4月1日から施行する。
(経過措置)
- 2 この規程による改正後の第11条の規定は、平成27年度以後の入学者について適用し、平成26年度以前の入学者については、なお従前の例による。

3. 定期試験における不正行為者処分規程

昭和54年7月10日制定

第1条 この規程は、専修大学定期試験規程第17条の規定に基づき、定期試験（以下「試験」という。）における不正行為者の処分に関し、必要な事項を定めるものとする。

第2条 不正行為者の処分は、学部長が行う。

第3条 不正行為者の処分は、次の基準による。

- (1) 代人受験（依頼した者・受験した者） 2ヵ月の停学処分とし、当該科目履修期間における定期試験実施科目を無効とする。
- (2) 答案交換 第1号に同じ
- (3) カンニングペーパー廻し けん責処分とし、当該科目履修期間における定期試験実施科目を無効とする。
- (4) カンニングペーパーの使用 第3号に同じ
- (5) 当該試験に関する事項の書込み 第3号に同じ
(所持品・電子機器・身体・机・壁等)
- (6) 答案を写す（見た者・見せた者） 第3号に同じ
- (7) 言語・動作・電子機器等により連絡 第3号に同じ
する行為（連絡した者・連絡を受けた者）
- (8) 使用が許可されていない参考書・電 第3号に同じ
子機器その他の物品の使用
- (9) 他人の学生証を利用した受験（貸し 第3号に同じ
た者・借りた者）
- (10) 偽名又は氏名抹消 第3号に同じ
- (11) 故意による無記名 第3号に同じ
- (12) 答案不提出 第3号に同じ
- (13) 使用が許可された参考書等の貸借 けん責処分とし、当該受験科目を無効とする。
(貸した者・借りた者)
- (14) その他試験監督者及び試験委員が不正行為と認めた場合 第1号から第13号に準じて処分する。

2 学部長は、前項の処分について速やかに学長及び教授会に報告しなければならない。

第4条 前条により処分を受けた者が、再度不正行為をした場合は、前条の規定にかかわらず教授会の議を経て2ヵ月以上1年以下の停学とし、当該不正行為が行われた学期における定期試験実施科目を無効とする。

第5条 試験終了後に不正行為が発覚した場合においても、第3条及び第4条により処分する。

第6条 処分の起算日は、処分決定日とする。

第7条 不正行為者の氏名及び処分は、速やかに掲示し、本人及び保証人に通知する。

第8条 処分事項は、学籍簿に記載するものとする。

第9条 不正行為者が本学奨学生制度による奨学生であるときは、直ちにその資格を失う。

第10条 停学処分中の者は、当該学部長の指導に従わなければならない。

第11条 不正行為者処分に関する事務取扱いは、教務課又は二部事務課が行う。

第12条 この規程の改廃は、教授会の議を経て学長が決定する。

附 則

- 1 この規程は、昭和54年7月10日から施行する。
- 2 この規程の制定に伴い「試験における不正行為者処分内規（昭和36年9月12日制定）」、「試験における不正行為者処分内規施行規則（昭和36年9月12日制定）」、「試験における不正行為者処分の特例（昭和37年9月24日制定）」及び「試験における不正行為により処分を受けた者の事後の取扱規程（昭和36年9月12日制定）」は、廃止する。

附 則

この規程は、平成13年7月25日から施行し、平成13年7月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

（施行期日）

- 1 この規程は、平成20年4月1日から施行する。
（経過措置）
- 2 この規定の施行前にした不正行為に対する処分については、なお従前の例による。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

4. 専修大学国際コミュニケーション学部学期末卒業に関する取扱内規

令和2年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この内規は、専修大学学則第18条第3項の規定に基づき、国際コミュニケーション学部における学期末卒業（以下「学期末卒業」という。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

(要件)

第2条 学期末卒業は、次に掲げる要件のいずれにも該当する者について行うものとする。

- (1) 卒業に必要な所定の単位を修得することができず、4年の修業年限を超えて在籍している者であること。
- (2) 学期末卒業を希望する年度の前年度までに卒業論文又は卒業研究の単位を修得している者であること。
- (3) 学期末卒業を希望する年度の前期において卒業要件を満たすことができる者であること。
- (4) 所定の学費を納めている者であること。
- (5) 学期末卒業をするための所定の手続をし、その許可を得た者であること。

(申請手続)

第3条 学期末卒業を希望する者は、当該年度の6月30日までに、保証人と連署の上、学期末卒業願書によって申請しなければならない。

(申請の取下げ手続)

第4条 前条の規定による申請をした者（以下「申請者」という。）が当該申請を取り下げる場合には、当該年度の7月31日までに、保証人と連署の上、学期末卒業申請取下げ書によって申請しなければならない。

(許可)

第5条 学期末卒業の許可は、国際コミュニケーション学部教授会（以下「教授会」という。）の議を経て学長が行う。

2 前項の規定にかかわらず、卒業発表日前に教授会を開催することができない場合には、国際コミュニケーション学部長及び申請者の所属学科長の確認をもって教授会の議に代えることができる。この場合において、国際コミュニケーション学部長及び申請者の所属学科長は、当該確認の内容について、直近に開催される教授会で追認を得なければならない。

(期日)

第6条 学期末卒業の期日は、9月20日とする。

(卒業延期制度との関係)

第7条 この内規は、専修大学卒業延期の取扱いに関する内規の規定により卒業延期をした者が学期末卒業の制度を利用することを妨げるものではない。

(事務所管)

第8条 この内規に関する事務は、教務部教務課の所管とする。

(内規の改廃)

第9条 この内規の改廃は、教授会の議を経て学長が行う。

附 則

この内規は、令和2年4月1日から施行する。

5. 専修大学卒業延期の取扱いに関する内規

平成23年12月1日制定

(趣旨)

第1条 この内規は、専修大学学則（以下「学則」という。）第18条第5項の規定に基づき、専修大学（以下「本学」という。）における卒業延期の取扱いについて必要な事項を定めるものとする。

(定義)

第2条 この内規において「卒業延期」とは、学則第18条第1項に規定する卒業の要件を満たした者が、同条第4項に規定する特別の事情により本学の許可を受けて卒業を延期し、引き続きその学部で修学を継続することをいう。

2 前項の「特別の事情」とは、キャリアアップ、資格取得等を目指すことをいう。

(卒業延期の期間)

第3条 卒業延期により在学することができる期間は、1年を限度とする。

(申請及び許可)

第4条 卒業延期を希望する者は、本学所定の申請書（以下「申請書」という。）により申請をし、本学の許可を受けなければならない。

(申請をすることができる者)

第5条 前条の申請（以下「申請」という。）をすることができる者は、次の各号の条件（以下「申請の条件」という。）の全てを満たす者とする。

(1) 卒業延期の目的が第2条の特別の事情に適合するものであること。

(2) 4年次以上の者で卒業見込みのものであること。

(3) 卒業延期の年度が学則第8条に規定する在学年限内にあること。

(4) 学費の滞納がないこと。

(申請期限及び申請方法)

第6条 申請は、卒業見込み年度の1月末日までに教務部教務課（二部在學生にあつては、二部事務部二部事務課とする。以下「教務課・二部事務課」という。）に、申請書を本人が直接その窓口に提出することにより行わなければならない。

(申請に対する審査等)

第7条 教務課・二部事務課は、申請書の提出があった場合においては、遅滞なく、その申請が適格な申請かどうかの審査を行わなければならない。

2 前項の「適格な申請」とは、次の各号のいずれにも該当する申請をいう。

(1) 申請の条件を満たしていること。

(2) 申請書の記載事項に不備がないこと。

3 教務課・二部事務課は、第1項の審査に基づき、その申請が第5条第1号の条件を満たしていない場合又は申請書の記載事項に不備がある場合は、申請者に対しその説明をし、修正又は補正を求めることができる。

(受理及び不受理)

第8条 適格な申請は、受理し、不適格な申請及び第6条の期限を過ぎた申請は、受理しない。

2 教務課・二部事務課は、前条第1項の審査に基づき、当該学部長の承認を得て、前項に規定する申請

の受理又は不受理を決定し、不受理の場合は、遅滞なく、その旨を申請者に文書で通知する。

(卒業延期の許可)

第9条 卒業延期の許可は、学部長会及び各学部教授会の議を経て学長が行う。

(卒業延期の許可又は不許可の通知)

第10条 卒業延期の許可又は不許可の通知は、本人及び保証人に対し、卒業発表日以後、遅滞なく行うものとする。

(卒業延期の手続)

第11条 卒業延期の許可を受けた者は、別に指定する期限までに、次に掲げる卒業延期のための手続を完了しなければならない。

- (1) 卒業延期年度の学費を一括納入すること。
- (2) 卒業延期年度の履修登録科目の仮申請をすること。
- (3) 卒業延期に関する本人と保証人とが連署した誓約書を提出すること。

(卒業延期の辞退)

第12条 卒業延期の許可を受けた者がこれを辞退しようとするときは、別に指定する期限までに、本人と保証人とが連署した本学所定の卒業延期辞退願を教務課・二部事務課に提出しなければならない。

(辞退とみなす者)

第13条 第11条の卒業延期の手続を期限までに完了しない者は、卒業延期を辞退したものとみなす。

(卒業延期をした場合の卒業の時期)

第14条 卒業延期をした場合の卒業の時期は、次項及び第3項に規定する場合を除き、その年度の3月22日とする。ただし、学期末卒業制度がある学部において、その許可を受けた場合には、学期末に卒業することができる。

2 卒業延期期間中に、本人が死亡した場合は、その死亡の日を卒業の日として学位記を交付する。

3 卒業延期期間中に、第17条第2項ただし書の規定により卒業延期の許可を取り消された場合にあつては、前年度の卒業とする。

(履修科目の登録)

第15条 卒業延期の許可を受けた者は、20単位を限度として、履修科目の登録をしなければならない。

(卒業延期期間中の学費)

第16条 卒業延期期間中の学費は、別に定める。

(学則適用の特例)

第17条 卒業延期期間中の者（以下「卒業延期者」という。）は、学則第27条の休学及び学則第31条の退学の願い出をすることができない。

2 学則第67条の規定は、卒業延期者についても適用する。ただし、けん責処分の場合は、併せて卒業延期の許可の取消しをすることがある。

(内規の改廃)

第18条 この内規の改廃は、学部長会の議を経て学長が行う。

附 則

この内規は、平成23年12月1日から施行する。

2022 国際コミュニケーション学部
学修ガイドブック

令和4年4月1日

編集・発行 専修大学国際コミュニケーション学部
〒101-8425

東京都千代田区神田神保町3-8

TEL 03-3265-3820 (ダイヤルイン)

